
萌えっ娘もんすたあ

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌えっ娘もんすたあ

【Nコード】

N0437U

【作者名】

阿佐木 零

【あらすじ】

ポケットモンスターの擬人化二次創作作品『萌えっ娘もんすたあ』ストーリー。初代ポケモンの世界を舞台に、主人公ファアルはチャンピオンの頂にいる父親を倒すために旅を始める。諦めかけた夢と、憧れた背中に追いつくために。強くなりたいと願うミニリユウや仲間たちと共にファアルはチャンピオンを目指す。

〈prologue〉(前書き)

かなりの独自解釈が含まれております。萌えて燃える。そんな物語になるといいなあ。初代ストーリーを独自アレンジ！

〔prologue〕

〔prologue〕

——お前には無理だ。

告げられた無常な言葉は、俺の心を打ち砕くには充分なものだった。

ずっと、ずっと夢の中にいた背中に追いつくために踏み出せる一歩のはずだった。

耳を破壊されるのかと思わんばかりの歓声に包まれながら、誇らしく胸を張るあの人が好きだった。

だけどあの人は、自分に向けられる声援よりも、まず真っ先に俺へと顔を向け子供のように笑みを浮かべるんだ。

どうだ、凄いだろう？

そんな笑みに、俺も笑顔で頷き返すのがたまらなく嬉しかった。

そう、あの人は——

あいつは——

俺の憧れであり、目標だった。

俺の誇りであり、いつか倒したい人だった。

だから、近づけると思った。

そのために選んだ。

だが、その初め。一步を踏み出す前に、博士によって打ち砕かれた。

どうして？

何故？

どれほど投げかけても答えはなく、背を向けられた俺は伸ばした

腕を下ろす他無かった。

そうして、ずっと夢見てきたものは幻となり、ただ遠くに亡羊と現れる蜃気楼と成り果てた。

叶わないのだと思い込み、遠くから眺めるだけの景色へと変わっていったのだ。

【第二話】マサラ——始まりの町（前書き）

いろいろとフリーダムな主人公ですね、はい。出会いのお話。

【第二話】マサラ——始まりの町

どれだけ歳を重ねようと、ずっと——ずっと夢見てきた。

本当に小さい頃。まだ自分が誰だとか、世の中なんてこんなものかとか、そんな馬鹿みたいな現実を知る前だ。野山を駆け回るのが好きで幼馴染と一緒に遊ぶのが楽しくて、一日が終わるのが惜しく、明日に心を躍らせた日々。

いつか、なろうと描いていた夢があった。

がむしゃらに、ひたむきに——目指すべき夢に向かって努力していた俺は、

「——」

今、ここにいます。

こうして自宅の警備をしながら虚ろに天井を見上げている今では、その夢は飛び移れないほどの深い溝となってしまっている。

「今日、か」

無気力に寝そべったベッドから見上げた天井には、ポスターが貼られている。

誇らしく優勝カップを掲げながら、片方の腕でまだ小さな子供を抱いている男だ。

そのポスターを見る度に、胸が掻き毟られるかのような焦燥と到達できない高みを感じてしまう。でも、剥がせない。そのポスターだけは剥がせなかった。

何も分からなかった俺への見せしめであり、己に対する懺悔でもある。

何故ならば、俺にはその資格はもう無いのだから。

手をどれだけ伸ばしても、届かない。

どこまでも、どこまでも……どれだけ伸ばしても決して届かない。自ら望むことを放棄した俺には、何を為そうと、どれほどの空想であろうと届かぬ距離なのだ。



「兄貴。俺、明日博士に”萌えもん”を貰いに行くよ！」

嬉しそうに報告してきたのは、昔から俺を慕ってくれている弟分の幼馴染であるレッドだ。赤い帽子を被っている様はなんとも子供臭いが、瞳は活気に満ち満ちている。

萌えもんトレーナー。

今では子供ですら野生の萌えもんを捕まえられる時代になったが、そうになったのは技術の進歩のおかげだ。モンスターボールが一般に出回るまでは子供にはもちろん、大人ですら二の足を踏んでいた。だからこそ、萌えもんトレーナーは人々に娯楽を生む、職業だった。

知識を武器に、知恵を戦術に。己の技術と六体の萌えもんをパートナーにしてリーグチャンピオンを目指す。年に一度の『萌えもんリーグ』では全国放送もされるほどの、娯楽である。

「……そうか。頑張れよ、レッド」

羨ましい。

嘘偽り無くそう思った。かつて俺が挫折してしまった道を、レッドは今歩き出そうとしているのだ。羨ましくないなんて嘘になる。

だが、俺にはきつとその想いを口に出す資格はない。

だから、羨ましい気持ちを押し隠し友人の門出を祝福する。

心から。俺の分まで――。

「ありがとう、兄貴。でも……でもさ、俺……兄貴にどう」

レッドが言おうとしていることはわかっている。

ずっと一緒にいたんだ。俺の夢がどうなったのかくらい、知っている。そして、まだ俺がその夢を捨て切れていないこともきつと、わかっている。

俺が言葉にせずとも知っているのだ。

「わっ」

帽子の上から頭を押さえ込む。

レッドからは俺の顔が見えないように、強く。

「気にすんな！ レッド、お前は俺を気にする必要なんてないんだ。せっかく博士から萌えもんを貰えるんだろ？ お前の夢だ、お前が胸を張らなくて誰が胸を張るんだ」

「……兄貴」

「行けよ。俺を気にするなら、お前は自分の夢に向かえ」

「——うん、わかったよ」

レッドは頷いた。

「だから、行ってこい。俺に遠慮してんじゃねえよ」

背中を叩いてやる。

痛がっていたレッドだったが、やがてしつかりを前を見てふみだしていった。

「行ってくるよ、兄貴！」

博士の研究所へと走っていく背中に、俺はただ

「……ああ」

小さく、頷いてやることしか出来なかった。

ベッドに寝転がっていたら、外から博士の声が届いた。かすかに窓が開いているから、風に運ばれてきたのだろう。

身を起こし窓から覗き込むと、白髪の混じる爺さんと出発前の話をしているようだった。

あの頭はオオキドのジジイか。

「つと、そうだ」

ふと思いつき、パソコンの電源を入れる。そしてアイテム呼び出しサービスから”傷ぐすり”を取り出す。昔使おうと思ってそのままにしておいたものだが、俺にはもう使い道がないし、餞別くらい

にはなるだろう。

家から出るとレッドが発見しようかとしているところだった。マサラからトキワへと向かう道だ。子供のお使いでも通る道だが、これからの旅を考えていろいろと話していたのだろう。

トキワへの道を見てみると、遠くでグリーンとブルーが野生の萌えもんと戦っているようだった。

そうか、あいつらも旅立つのか。

「おお、ファアルか」

「よう、ジジイ」

還暦を迎えた爺さんよりも大事なものがある。

邪魔なジジイをさっさと視界から消し去る。

「兄貴？」

「ほら、餞別だ。持って行け。俺にはもう必要ないもんだからな」

呆然とするレッドにさっき取ってきた傷ぐすりを投げ渡してやる。

「え？ わ、とと」

慌てて受け取ったレッドは、それが何なんのか気が付くと、

「傷ぐすり……ありがとう、兄貴」

リュックにしまった。

まあ、これでいいだろう。後はレッド自身の問題だ。俺に出来ることは……だぶんもう無い。

「行ってこい」

「――うん！」

駆け出していくレッド。途中、グリーンとブルーに合流し、3人でふざけあっているのが見て取れた。

「良いのか？」

「ああ、これでいいのさジジイ」

幼馴染である三人がいなくなって一気に暇になった。

煙草に火をつけ、去っていく幼馴染たちの背中を見送る。

まだ幼く子供っぽい弟分、レッド。

クールぶっているが突発的な出来事には弱い、グリーン。

悪戯好きで快活な女の子、ブルー。

それぞれがそれぞれの道を行く。萌えもんトレーナーとして。

「やはり感傷には浸るか？」

「たまには、な」

そうして、踵を返した。あの一件以来、棘のようになって突き刺さっているモノが、まだ取れていない。

ジジイ——オオキドと話すこともまだ辛い。そして辛く思う自分自身をまた責めてしまう。

「……すまなんだな」

去り際、ジジイがそんなことを呟いた気もするが、紫煙と共に吐き出した息で聞こえなかった。

だってそうだろう？

ジジイは、何も悪くないのだから。

悪いのは、俺だけなのだから。

俺の住むここマサラタウンは、カントー地方でも田舎と呼ばれる地域だ。そんな場所にどうして研究所を構えているのか知らないが、萌えもん学の権威であるオオキド博士が住んでいる。現在のリーグチャンピオンもこの町の出身なこともあり、【始まりの町】と呼ばれたりもするそうだ。

だが、蓋を開けてみればただのどかな田舎町であり、人口も少ない。学校だっているような学年の寄せ集めだ。海に面し、周囲は手付かずの森に囲まれた、村と言っても言いすぎじゃないくらいの本当に小さな町だ。ゆっくり散歩しても一時間くらいあれば町の全てを見て回れてしまう。

そのため、町に住んでいる人続べてと顔見知りだ。こうして散歩しているだけで、至るところから声をかけられる。それを適当にあしらいながら歩いていると、町外れの林道に見慣れぬものが倒れていた。

「……あれは」

草陰に隠れるようにして斃れている少女は、ぐったりとしていて動く気配がまるでない。苦し気な表情から、何か事件に巻き込まれたのではないかとも思える。

木漏れ日に反射して光るのは白露の球だ。長く蒼い髪の手端部分を纏める高貴なアクセサリ、そして額から少しだけ飛び出た角——どう見ても萌えもんだった。

しかし何があったのかわからないが、放っておいたら危険なのは間違い無い。このファアル、萌えもんだろうと人間だろうと、男は見捨てて女は助けるのがポリシー。

迷いなくその萌えもんを抱き上げると、やっぱり意識がないように重たかった。くぐもった声を一瞬だけ出したが、それだけ。

「悪い、ちょっとだけ揺れるからな」

聞こえてはいないだろうけど、声をかけてから駆け出す。目指すは——マサラで唯一の萌えもん機関、博士の研究所だ。

本来なら呼び鈴を押して反応があってからノブを回して入る——のが礼儀なのだろうが、緊急事態なので気にせず力任せにドアを蹴破った。脆い扉は俺の脚程度で簡単に開くどころか弾け飛び、飾ってあった額と壺をいくつか巻き込んだ上に壁に突き刺さって止まった。危ないな、泥棒だったらどうするんだ。

「いるか、ジジイ！」

耳が遠くなりかけているであろうジジイに向かって大声で呼びかける。

何事かと研究員たちが集まってくるが、気にせずジジイだけを探す。

「なんじゃ、さっきは沈んでおったくせに騒がしいのう」

「大変だ。とにかく大変なんだ。なんでもいいからベッド貸せ」

ぐい、っとわかるように抱えた萌えもんを突き出した。

「……お前、わしでもまだ手を出していないというのに」

ナニを考えてんだこのジジイは。

「急いでるんだ、ベッド貸せ」

「自分の家の方が良いと思うのじゃが……ここには研究用の粗末なベッドしかないぞ？」

「それが良いんだよ馬鹿たれ！」

「なんというマニアックな……」

ジジイは頭を抱えてから奥を指差した。

「奥の部屋じゃ」

「ああ」

走り出す瞬間、ぼそりと聞こえた声があった。

「……さて、今日は老人を労わらん日になりそうだ」

苦労はかけるが礼は言わないぜ、ジジイ。

治療室のような部屋で、傷ついた萌えもんをベッドに寝かせる。

ジジイの言うように本当に簡素なベッドで、スプリングも無い硬いものだった。枕もどうようにして硬い。まさしく実験室仕様といった感じ。これじゃ、ゆっくり眠ることも出来ないだろうに……。

「えっと……」

周りを見渡して目ぼしいものを探す。柔らかい枕が欲しい。

「ほら、これじゃろう？」

と、目の前に差し出されたのはひとつの枕。ちゃんと柔らかく真っ白な、人間が普段寝る時に使うものだ。

「……ジジイ」

感謝しつつ枕を受け取る。もちろん、ジジイが触っていたカバーは投げ捨て、中身に軽くファ○リーズをかけておくのを忘れない。「ひどい！」

嘆くジジイは放っておいて、枕を入れ替える。

呼吸は落ち着いてきているが、人間とは違うかもしれない。姿が同じだからって中身まで同じだとは限らないからだ。

「で、どうしたんじゃ、そのミニリユウは」

ミニリュウ。

そうか、これがあの珍しいミニリュウなのか。名前だけは聞いたことがある。

「町外れの林で斃れてたんだ。見捨てるのも、何だしな」

「なるほど。ま、お主らしいわの」

苦笑で返され、俺も同じように苦笑した。

ジジイは博士らしく、研究員たちを集めるとテキパキと指示を飛ばしていった。おそらく治療してくれるのだろう。センターとはいかないが、ここも立派な研究施設だ。それなりの設備は揃っているはず。

俺に出来ることはもう無いな……。

「——ん、んんっ」

邪魔になるだろうし立ち去ろうとしたら、萌えもん——ミニリュウが僅かに目を開けた。

「……これから怪我治すから、ゆっくり眠っとけ」

前髪を手ですかすと、心地良さそうに目を細めて再び眠りについた。

こうしてもみると、人間の女の子と変わらないな。

俺はそうしてしばらくミニリュウを見つめた後、

「じゃ、頼むわジイさん」

任せておけ、と頼もしい返事を貰ってから外に出る。壊れた扉を更に踏み抜いて外に出る。

煙草に火をつけ一服。

俺に出来ることなんて、もう何も無い。

レッドたちを見送った時と同じような虚脱感に包まれる。

でも、それは他でもなく俺自信が選らんだ結果だ。

だから、これでいい……この虚脱に身を任せるくらいしか出来ない。

「ふう」

ふと見上げた空は澄んでいて、冒険に出るにはうってつけの天気

だった。こんな日にトレーナーとしての一步を踏み出せたのだから、あの三人は本当についている。

でも、俺も出来れば――。

振り切れない迷いが頭を掠める。

もしかしたら、俺も萌えもんを捕まえられれば何か切っ掛けになるのではないだろうか。

「はっ、馬鹿か」

夢を諦めたのは、他でもない俺自身だろうに。

それを未だに振り切れず縋りついているだけの情け無い男だろうに。

「……俺に、夢を追う資格なんて無いだろうが」

そんな俺の迷いを見透かしたかのように、ころころと足元に転がってくる紅白の丸いボール。

手に取り呟く。

「モンスターボール、か」

おそらく研究員の誰かが忘れていったんだろう。ぽんぽんと遊びながら時間を潰す。

――夢を。

夢を、諦めたのは誰？――

「……」

追えもしない夢なんて、そもそも見るべきじゃなかったんだよ。色あせた思い出のまま、小さな子供が研究所へと走っていく。

買ったばかりのリュックを背負い、瞳を希望で彩らせて。

これから始まる冒険に胸を躍らせ、憧れの父親に追いつけるのだと信じて。

その先に、何て言われるのかも知らずに。

これが、夢の残滓だ。
自分の目指した夢の残り粕なんだよ。

気が付けば、モンスターボールを力の限り握り締めていた。

「っと」

さすがに握りつぶすほどの握力はないが、研究所の備品を壊すわけにもいかない。

短くなった煙草を研究所の玄関に放り捨て、次の一本に火をつける。

そうして。空が赤く染まり始める頃、中からジイさんが出てきた。

「お主、片付けようという気はないのか？」

「もう大丈夫なのか？」

「……大丈夫じゃ。今は意識も戻って目覚めておるよ」

「そうか」

なら、会っても問題ないだろう。煙草の吸殻を扉の上で踏みつけて火を消してから中に入る。火事になったら大変だ。

「いや、だから」

そういえば来客用のスリッパがあったような気がするが、まあ今更だろう。

「……もういいわい」

最後の呆れたジジイの言葉が耳に届いたような気がしたが、気にしないでおく。

途中すれ違う研究員たちの顔を見るに、本当に大丈夫のようだ。なんだかんだで皆優しい人たちなのは間違いない。ひとりの萌えもんが助かったことを心から安堵しているようだった。

ミニリュウが寝ているベッドが見えてくると、側にいた研究員が俺を指差した。ベッドには上半身を起こしたミニリュウ。だがその姿はさっきまでのように衰弱しておらず、弱々しく見えながらも高貴な空気を持っていた。

研究員によって俺の方に顔を向けたミニリュウは、何かを言おうとしたのかパクパクと口を開けた後に、やがて恥ずかしそうに顔を伏せた。

その様子を見れて、ようやく肩の荷を降ろせた。

それはどこにでもある、どこにでも見れる、萌えものの――ひとりの女の子の姿だったから。

備え付けられてあるパイプ椅子を拝借し、ベッドの横に座る。

「もう大丈夫なのか？」

「――うん。その、ありがとう」

ぎこちなく小さく返ってきたのは感謝の言葉だった。幼い中にも高貴さのある、まさしく龍の姫という印象を受ける声。鈴のように、俺の中へと染み入ってきた。

「そうか。良かった」

窓の外を見れば、そろそろ暗くなるうかという時間だった。

朝にレッドを見送ったのだから、結構な時間が過ぎている。

「じゃあ、俺は行く。明日にはきっとこのしみったれた研究所から出られると思うぜ」

「あっ」

立ち上がる俺に、ミニリュウは小さく声を漏らした。

意識してではなかったのか、自分でも驚いたように目を見開きやがて顔を落とした。

「……やれやれだ。」

「と思ったが、ジジイにちよつと用事があったんだった。動くのも邪魔臭いからここで待つことにするか」

わざとらしく、もう一度パイプ椅子に腰掛ける。

「お前も早く寝ろ。怪我してんだろーが」

「……ふんっ」

ミニリュウはぷいっと顔を背け、そのまま布団を頭から被った。

まあ、この様子なら大丈夫そうだ。

どうせ今日も家に帰ったところでいつもと変わらない。

なら、レッドたちが旅立った日くらい、特別であっていいじゃないか。

程なくして聞こえてきた寢息に苦笑を浮かべ、俺は静かに目を瞑った。

「起きんかファアル」

眠りこけていた身体を揺すられる。

目を開けてみればジジイがひとり。

「うるせえ、筆るぞ」

「どこを!？」

咄嗟に髪の毛をガードするジジイ。

相変わらずアグレッシブだな。

「んっ、……ふう、どうしたんだよ」

背伸びをして意識を覚醒させる。時計を見れば、目を閉じてから1時間程度しか経過していなかった。ミニリュウもぐっすりと眠っているようだった。

「お主に話がある。来い」

「……わかった」

険しい表情に真剣さを感じ、頷き従う。

廊下へと俺を呼び出したジジイは、抑えた声で語りだした。

「あのミニリュウ、酷く痛めつけられておった」

「あん？ そりゃ見ればわかるが」

「そうではない。ファアル、お主なら言ってもわかるだろうが」

そうして、ジジイは告げる。

あのミニリュウは、服の下にいくつもの傷跡が刻まれていたのだ、と。

火傷、裂傷、痣……それらが外からでは見えない位置に刻まれていた、と。

喧嘩——それも悪質な、苛めに近い陰湿な部類だろう。第三者にひと目でわからないように、と考えられて付けられる傷跡だ。

「……あいつ、人の萌えもんなのか？」

「いや、その形跡はなかった。彼女は野生じゃ……それもレベルも低い」

「ちっ」

あり得ることだった。

タマゴから孵化させる事が出来るようになった現在、そうして子供の頃から扱いて強くするトレーナーは多い。

かつてのように純粋に萌えもんの技とトレーナーの知略を競うのではなく、育成し戦わせ、勝つ。それが今の萌えもんバトルの主体でもある。

「なあ、あんたのところで保護はできないのか？」

「可能じゃ」

だが、と。

ジジイはそう締めくくり、俺を真っ直ぐに見つめた。

「ファアル」

「な、なんだよ」

その瞳は後悔しているようでもあり、怒っているようでもあった。まさしく、俺のように。かつてに自分に後悔し、激怒している瞳でもあった。

「お主は、本当にそれでいいのか？ 本当に今のままでいいのか？」

それは、俺が何度も自問した答え。

何度も自分自身に問うた答え。

そして出る答えも決まっている。

「当たり前だろ、俺は……」

俺にはその資格は、

「資格を決めるのは、お前自身じゃ。だから、あの時わしはお前に問うた。お前に告げた」

お主には無理じゃ、と。

年端も行かない子供には、あまりにも過酷な旅になるから。

そして俺は、自ら旅を放棄した。

叶わぬと自分自身で判断し、諦めた。

抱いていた夢をその手から零し始めた。

「お前の夢は終わるのか？ 本当に終わってしまうのか？」

だけど、まだ。

まだ、夢の残滓は。

まだ、俺の中に……この手に。

「……モンスターボール」

紅白の球。ついぞ手にすることのなかったトレーナー必須のアイテム。

それを力の限り握り締める。

「フアアル、あのミニリュウはお主と同じだ。あれは……同じドラゴンタイプからつけられた傷だろう。」

だから、と。

「お主が、救え。救ってやれ。ミニリュウを救ったお主には、その資格がある」

かつて、夢を捨てた男になら。

今もなお、夢を捨てずに持っている男になら。

誰に笑われようと、夢をまだ諦めずに抱いている男になら。

きつと、同じ人は救えるのだと。

オオキド博士はそう告げていた。

「そのボールを手にした時点で、お主にはもうひとりのトレーナーじゃよ。わしはそう思う」

旅立っていった幼馴染たち。

見送るしか出来なかった、夢破れた男がひとり。

「俺の資格、か」

見送るという選択をしたのは誰だったか。

自分には無理だったと決め付けたのは誰だったか。

憧れだと決め付けて、届かないと思いながら眺め続けていたのは誰だったか。

――俺だ。

全部、俺だった。

俺がそう望んでいた。

届かない自分への言い訳として。

「ジジイ、俺は……」

「こんな時くらい博士と呼べんのかお前は」

「――はっ、それは無理だな」

もう一度、踏み出せるかもしれない。

まだ、この胸にある火が燻り続けている限り。

「なら、行け。あまり女子を待たせるものではないぞ」

「……ああ」

俺はジジイに背を向けて治療室の扉を開ける。

ミニリュウがベッドの上で身体を起こしていた。

「よう、起こしたか？」

「……起きてた」

「そうか」

パイプ椅子まで戻る。

座ると、きし、と軋みを上げた。

「……これは、独り言。だから無視してくれても別にいい。」

「ああ」

ミニリュウの声に、耳を傾ける。

「私、強くなりたい」

「ああ」

ミニリュウは、小さい自分の身体をかき抱く。

弱い自分を押し隠すように。

そうしていれば、いつか強い自分が出てくるかのように。

「私は、誰にも馬鹿にされないくらい、強くなりたい……！」

「ああ」

無力な自分を責め、どうにもならないと心の中で哭いている。

それは硝子のように脆く、しかし祭壇のように美しい決意でもあった。

俺に足りなかった想い。

どうしても強くなりたい。

その想いを、ミニリュウという萌えもんは持っていた。

だから、

「俺も強くなりてえ。

目指したい……いや、斃したい奴がいる。俺は負けたくなんかねえ」

ミニリュウが俺の言葉に耳を傾けているのがわかる。

きつと、これは儀式だ。

今日初めて会って初めて話して——理解できるかもしれない相手へと向ける、誓いの言葉だ。

「だから、パートナーが欲しい。まだスタート地点にすら立てていない俺と共に歩んでくれる、相棒が」

そして、ミニリュウの目を真っ直ぐに見つめる。

「一緒に強くなろうぜ。

まだ始められるのなら。俺達がまだ終わっていないと思っているのなら、まだ終わっていないんだ」

きつと。

それは当たり前で。

誰もが気付いている真実で。

俺にはわからなかった、現実なのだ。

「……うん。強く、なる」

ミニリュウは俺へと手を伸ばす。

俺はモンスターボールをその手に触れさせかけ、慌てて止める。そうじゃない。

俺達に相応しいのは、きつとこれ。

小さな手を握る。

俺の掌にすっぱりと覆われてしまうほどの掌は、温かった。

「俺はファアル。マサラタウンのファアルだ。」

そして一番必要で大切な言葉を。

信頼という気持ちを乗せて、相手へと送る。

「よろしくな、”リウ”」

握手。

人と萌えものの絆の証。

俺とミニリユウーリウとの絆の始まり。

「――うん。ファアル」

ぎこちなく返す笑み。

だけど、俺達の旅は。

俺達の夢は。

きっと今、この簡素な研究所から始まったのだ。

【第二話】 トキワ——旅立ちの儀式（前書き）

ゆっくりと物語は進みます。お使いイベントとか無かったんやでえ。
バトル部分に関しては今後もこんな感じになるかとは思いますが。

【第二話】トキワ——旅立ちの儀式

しかし息巻いて出発しようとしたのはいいものの、ぶっちゃけ何の準備もしていないことに気が付いた。

てなわけで、家に一旦帰宅し必要なものを纏め上げていたら一日経ってしまった。

「そっか。ファアル、あんた…」

家に帰ると、家事をしていたお袋が出迎えてくれた。

俺と傍に寄り添うにして警戒しているリウを見て、納得したように深々と息をつき、

「もしもし警察ですか？　うちの息子が幼女誘k」

「待て待て待て待て！」

ボールには入りたがらないリウの意志を汲んで外に出したまま帰宅した時の母の言葉と顔は生涯忘れない。ほんとに警察が家に来たじゃねえか。

そんなこんなでリウは温かく俺の家族へと迎えられた。親父が不在の家で萌えもんとはいえ久しぶりに賑やかな食卓となった。

「リウちゃん、これ食べてみて。自信作なのよ！」

「は、はあ」

「リウ、こつちも美味しいから。食べさせてあげるね。あーん」

「あ、あーん」

おかしいな、俺、ガン無視ですけど。

四角い食卓でひとりしょんぼりと箸を持つ。

目線の先には小さなメザシ一尾と醤油、かつおぶしに梅干。

片や、リウは若鶏のから揚げに色とりどりのサラダ、大根おろしをつけてさっぱりとした味付けに仕上げられており、更にじゃがいもの煮付けにかぼちゃの煮物まである。

……非常に納得がいかない。

「……あのー」

もしもし？

ああ、無視ですか。聞いちゃいないねこれ。

「え、えっと」

申し訳無さそうに俺を見るリウに小さく笑い返してから、メザシを加えた。

ほとんど生じゃねえか。

ただまあ、悪いもんじゃない。

チャンピオンって立場上、ここ数年は家に帰ってきていない親父。だからこそかもしれないが、お袋が笑っているのを良く見かけるようになった。

そう、笑っているんだ。

「どうしたの、フアアル」

「……いや、なんでもねえ。ってかこのメザシ、半分生じゃないか」

「刺身と思いなさい」

「無理があんだろ」

だから、どんな切っ掛けであれ楽しそうなのは見ていて安堵した。

——旅に出る。

何も言わない俺に、それでも何か感じ取っているのだろう。今夜のお袋は、ひよっとしたらここ数年で一番はしゃいでいたように思えた。

夜が明けて。

「さて、行くか」

「うん」

結局、荷物は安っぽい鞆がひとつ。機能性のあるリュックなんて持ってなかったので腰に小さなホルダーをつけ、そこにボールを収納することにした。

もうひとつあるホルダーにはアイテムやらを収めるつもりだ。

寝袋はかさばるので基本的には萌えもんセンターでの寝泊りを想定。ただ、軽いタオルケットだけは鞆に押し込めた。

ということで、旅立つには非常に心もとない装備になってしまった。

が、正直な話、必要になれば買えばいいんだからそれほど軽装でもないだろう。

リウを頷き合い、一緒になって一步を踏み出した。

ここからが俺達のスタートだ。

青々とした空が俺達の旅立ちを祝福してくれているようでもある。レッドたちにも負けなくらい良い旅立ち日和だ。

と、

「兄貴ー！」

ジジイの研究所から駆けて来るのは見知った姿。大きめのリュックに赤い帽子は見間違うことなく弟分のレッドだ。

レッドに手を挙げて応えつつ、これからどうするかを思案する。萌えもんリーグに挑むには各街に存在するジムリーダーを斃してバツジを集めなくてはいけない。近くでは…トキワかニビになるだろう。

だが、それよりもだ。

まずはやらねばなるまい。

「……なんで海なの？」

「漢が旅立つ時は海を眺めるもんだって決まってるんだよ」

潮風が気持ちいいぜ。広がるマサラの砂浜には人っ子ひとりおらず、過疎化が心配になるが、まあ今はどうでもいい。

「――寒い」

春先だからな。

隣でリウが両手で身体を抱えながら「馬鹿やってないで早く行くぞ」と哀れみを込めた視線を投げかけてくる。その視線がたまらない。

「何で照れてるんだよ、兄貴」

「お前にも直にわかるさ」

漢の美学ってもんがな。

「確かこの先には――グレン島か」

地図を取り出してみると、今俺が望んでいる場所から遥かな遠方にグレン島と呼ばれる火山島があるようだ。そこにもジムはあるが……今は無理だろう。

だが、

「泳いでならいけるかもしれねえ」

「……はい？」

何しろグレンには萌えもん研究所なるものがあるはずだ。

萌えもんの研究所だ。

あられもない萌えもんとかいっぱいいるに違いなんだ。

そうに違いはない。

「なあ、リウ」

「――何？」

地平線を指差す。こう、逆転でも出来そうなくらいビシツと。

「泳いでいこうぜ」

「いや」

「でも泳げばきっと気持ちいいと思うんだよ」

「いや」

「ほら、どうせ行かなきゃいけないんだし」

「いや」

取り付く島もない。

「どーしてー？」

「――気持ち悪いなあ、もう。」

大体、泳ぐって言うけどその格好でどうやって行くの？」

言われ、自分の姿を見る。全くもって泳ぐには適さない格好。この服装だと海どころか川ですら溺れる自信がある。

「リウが泳いで俺が捕まる。どうだ、完璧だろう！」

「絶対にやだ！」

だいたい、とリウは怒りを露わに続ける。

「ファ、ファアルは絶対に変なことしてくるに決まってる！　そうよ、だって変な目してるもの！」

「おい、見損なうなよリウ」

あまりにも失礼な発言だった。

昨日の今日だ。信頼関係が形式上のことなのはわかる。

だが、俺だってリウを相棒と認めているのだ。リウのことを認めているのだ。

「ファ、アル……？」

だから俺は宣言する。

声高らかに。

「そんな平坦な胸に興味なんぞあるわけなからうが！」

「溺死しろバカああああああああああ————！」

リウのたたきつける攻撃

一回転した遠心力そのままに長い髪を尾のようにして俺へと文字通りに叩きつける。

「お、ぶばおっ！」

見事にぶっ飛ばされた俺は顔ごと着水。初めてした海とのキスはしょっぱい味だった。

「はあー、はあーっ」

「あ、ははは」

レッドに至ってはもう笑うしかないのだろう。引きつった笑みを浮かべている。

「ぶはっ」

しかし死ぬかと思った。打ち付けた顔がまだ痛い。

なんとか浮き上がると、リウたちの姿はかなり遠かった。こりやかなり飛ばされたものだ。

リウとしても手加減はしてくれていたのだろうが、それでこの威力だ。使えるかもしれない。

まあ、とりあえず戻るとするか。服も重たいし、沈みそうだし、妙に重たい身体に違和感を覚えながらなんとか陸地に戻る。

「うゝ、さぶ」

海から上がると、暖かいはずの春風が身に染みた。

「そのまま溺れちゃえばよかったのに」

身も心も寒くなった。

「あ、兄貴……それ」

「あ？」

浜辺に置いておいた鞆からタオルを出して顔を拭いていた俺をレッドが驚いた顔で指差していた。

視線を移してみると、リウも同じような顔で俺を見ている。はて。

この妙に重たい身体と何か関係でもあるのだろうか。

ゆっくりとレッドたちの視線を追って腰あたりに視線を落とす。

「ぎやはっ」

何かいた。

俺の腰あたりに抱きついていた。

1 mくらいの小さい萌えもんが。

場所的にかなりアウトなんだが、それもまた——イイもんだ。

「お前、どうしたんだ？」

海草だらけでどんな萌えもんかすらわからない。マサラ近海ならばメノクラゲっぽい気はするんだが……。

ぬめぬめする海草を一通り取り払うと、小さな顔にきょろりとした紫の瞳が俺を見上げていた。身体を覆っているのは頑丈な殻で、緊急時にはその中に籠ることが可能な萌えもん。

即ち

「シェルダーじゃないか」

マサラ近海でもあまり見かけない萌えもんだ。

迷ったのかじゃれついてきたのか。

シエルダーは面白いものでも見つけたかのように俺から放れない。そろそろ放れてくれないと困るんだが……理性的な部分で。

「とりあえず放れてくれないか？」

ゆっくりと諭す声で話す。

「や！」

拒絶。

どうしよう。万策つきた。

シエルダー。水と氷タイプを持つ萌えもんだ。正直な話、この先を考えるとこれほど頼もしい仲間もない。

だけど、今の俺にはボールが無い。

捕まえるべきアイテムが無いのだ。

こんな事なら見栄なんて張らずにジジイのところから99個借りてくれば良かった。

「あの、兄貴」

「ん？」

「これ……良かったら使ってよ」

言ってレッドが差し出したのはまだ何も入って無いモンスターボール。

「いいのか？」

「――うん。使ってくれ」

レッドは眩しいものでも見るかのように、真っ直ぐな瞳で頷いた。「博士に聞いてきたんだ。昨日、俺達が旅立ってから的事。俺、嬉しかったんだ、本当に。兄貴が……本当の兄貴に戻れた気がして」だから使ってくれと。

レッドはもう一度だけ俺に告げた。

「……ありがとよ」

そして貰ったボールをシエルダーに見せ、その瞳を見つめる。

紫の瞳。それは深い海の底のようでもあり、シエルダーそのものの色でもあるかのような純粹さを持っていた。

「一緒に来るか？」

「ほ？」

シエルダーは俺とボールをしばらく見た後、頷いた。

「よし」

ボールを押し当ててシエルター、もといシエルが仲間になったのを確認してからホルダーにボールを収める。

萌えもん、げっとだぜ！

断じて口には出さんが。

「別にそんなの捕まえなくても」

「戦力は多い方がいいだろ？」

「それは……そうだけど」

どうにも納得が出来ないといった風のリウの頭を撫でてやる。

「ちょ、ちょっと」

「はは、行こうぜ」

「——もう、わかった」

でもその前に風呂な。

マサラからトキワへと抜ける道。

そこはマサラと違い、綺麗に整備された道だ。歩道は整備されているし、道端には老人が休憩し、恋人たちが愛を語らうためのベンチが備え付けられている。まっすぐにトキワへと伸びているその道は、嫌でも冒険への期待感が膨らむというものである。

また、人と萌えもんの住み分けが曖昧なのも特徴で、すぐ側の草むらでは野生の萌えもんが生息していたりするのだから不思議なのだ。

そんな歩道を、俺達はトレーナーよろしく草むらを意識しながら歩いていく。目的はもちろん、レッドの戦力増強だ。

シエルダーでの恩もある。頼りないかもしれないが、レッドを手伝ってやりたいというのが本心だった。

そのレッドだが、ジジイから貰ったヒトカゲを出して草むらを歩き回っている。

正直な話、どう考えても危ない気がするんだが、まだ春先だし引火したらシエルでなんとなるだろうけども。

「ったく」

別の意味ではらはらしながら、レッドの後姿を見る。

まだ幼さの残る小さな体だ。男の子って言葉が一番しっくり来る。新品のリュックも真新しく、まるで入学したてのようにも見える。

大して俺はといえば、擦り切れそうな薄手のロングコートに肩からかけるだけの小さなバックだけだ。

「? どうしたの、急に笑って」

「いや、なんでもねえさ」

俺もレッドも同じようなもんか。

こみ上げてくる笑みを抑えながら俺も周囲を見渡す。

こちらとしてもそろそろリウの力を試してみたいし、ポップやコラッタのような手ごろな相手が欲しかった。

「ふああ……あふ」

リウは俺の考えを知ってか知らずか、良い天気の前に可愛らしい欠伸をしてながら俺の歩調に合わせてゆっくりと歩いている。

腰につけたボールは後ひとつ。ニビでのジム戦を考えると、シェルの実力も把握しておきたい。

しかし、萌えもんバトルは初体験でもある。手持ちの萌えもんを駆使して指示を出し、勝つのが目的とはいえ、要は戦術の読み合いだ。一定以上は頭の中で戦術パターンを構築しておいた方がいいだろうな。

「なあ、レッド」

「ん?」

「お前、バトルはもうやったのか?」

レッドはぴたりと足を止める。

そして肩を落とし、酷く沈んだ声で呟いた。

「――グリーンとやった」

ああ、あいつか。シヨタグリーン。

「勝ったのか？」

「……訊かないでよ」

つまり、負けたんだな。

聞けば、グリーンが貰ったのはフシギダネだという。となると残りのゼニガメはブルーだろう。レッド、グリーン、ブルー、それぞれに象徴的なカラーの萌えもんを渡すとはジジイのくせになかなか小粋だ。

とはいっても、ヒトカゲは火、フシギダネは草だ。タイプの相性からして負けるとは思えないのだが……。

「……いや」

むしろ負けた方が良かったのかもしれない。

ここから這い上げれるのなら、きっとレッドは強くなる。そんな予感があった。

「あ、兄貴！」

野生のコラツタが飛び出てきた！

「きたきたきたぜえ、レッド！」

僅かに伸びた前歯チャームポイントの、これまた可愛いお客様だ。今すぐお持ち帰りしたい。

だが今回の相手は俺じゃない。

「お前がやれ。こいつは、お前の相手だろ？」

「――うん！ わかってる！」

レッドが臨戦態勢になると同時に、ヒトカゲもまたレッドの前へと躍り出る。

なんだ、良いコンビじゃないか。

「ヒトカゲ、ひっかけ！」

レッドの指示に従って、ヒトカゲが長い爪を出してコラッタへと飛びかかる。負けじと応戦するコラッタ。

……なんだか、実にイイ光景だな。

客観的に見れば普通に戦っているだけなんだろうが、小さな女の子たちが組んずほぐれつバトルつてのもまた……たまらんものがある。

「あ、敵だ」

「お？」

リウのたたきつける攻撃！

油断していた。まるで敵を見るかのような眼差しで俺を睨みつけるパートナーさんの存在を。ですよねー、ただの変態でしたもんねー、俺。

まあ、手加減はしてくれているようだし何よりだ。本気なら海の向こうまで飛べるもんな。

と、相棒の後ろに影が現れる。

「――リウ、たたきつけろ！」

敵は後ろだと視線に籠める。

伝わる気配。リウが振り向き様に放った一撃は、野生のポップを確かに捉えていた。

だが甘い。相手も気配を察知して後ろへと飛んだのだろう。幾分か衝撃が和らいだようで、こちらへと敵意をむき出しにしている。

「……今はいいい」

その様子に違和感を覚えるも、気にしている場合ではない。

空中で体勢を立て直し、着地する。

即座にポケモン図鑑を開いてリウの技を確認する。

電磁波、叩きつける、まきつく、龍の息吹

随分と頼もしいラインナップだ。

リウの扱える技を頭に刻みつける。

「電磁波いけるか!?!」

「当たり前よっ!」

すかさずポッポに打ち込む電磁波。なるほど、遠距離から放てる技のようだ。

電磁波が命中し、ポッポは麻痺で動きが鈍る。鳥の萌えもんは空に飛ばせたら厄介だ。こうして動きを封じるのがセオリーだろう。

「リウ!」

「諒解!」

隙を与えず、次の指示を。こちらの意図を汲んでくれたリウは身体を大きく捻り、長い髪を鞭のようにして叩き付けた。

「ぴっ、!」

しかし動けるようになったのか、ポッポは即座に身を翻すと、そのまま空へと飛び去って行った。

「あ、逃げたっ」

「……」

今の一瞬、まるで麻痺が治ったかのように見えたんだが……俺の気のせいだったのだろうか。

「こらっ、待てえー!」

「……まあ、いいか」

暴れたりないのか、リウが空へと向かって叫んでいるがもう戻ってくる気配はなかった。

「兄貴、今のは?」

「ん? ああ、逃げられてな」

無事に捕まえたのだろう。萌えもんボールを手にレッドが駆け寄ってくる。

俺は苦笑を返してリウへと声をかける。

トキワまでもう少しだ。

「……ふむ、なるほど。状況判断は悪くなさそうだ」

ベンチに座った男の呟きと放り捨てたへなんでもなおしゝの存在に気が付かないままに。

街道を抜けると、マサラとは比べ物にならないくらい賑やかな喧騒に包まれる。

トキワシティ。

チャンピオンロードとニビシティへと続く交流点でもあるこの町は年中通してトレーナーに溢れている。

だが、肝心のトキワジムは閉鎖されており、年に一度、萌えもんリーグが開催される直前にのみ扉を開くのだという。

「さて、着いたな」

「うん。そうだね」

レッドは自分の捕まえたコラッタを考え深げに眺めている。

ボール越しながら既に愛着がわいているようだった。

「うしっ、萌えもんセンターに行くぞ！」

そんなレッドを伴って萌えもんセンターへと向かう。

萌えもんセンター。戦って傷ついた萌えもんの治療を専門的に行ってくれる場所だ。トレーナーにとっては休憩所でもあり、パートナーを癒す大切な私設でもある。

俺はシェルを、レッドはコラッタと――もうひとつボールを預けていた。

「なんだ、いつの間に捕まえたんだよ」

「あはは、実は兄貴が戦ってる間にね」

照れたように笑うレッド。

てつきりコラッタだけかと思っていたが、そうでもなかったようだった。

「お預かりになりました萌えもんは無事に傷が癒えましたよ」

にっこりと笑みを返してくれる受付の姉さんに挨拶を済ませ、外に出る。

まだまだ日は高い。この先、ニビへと続くトキワの大森林は広大だし、準備も必要になってくる。急がなければならない。

「じゃあ、レッド。またな」

旅の仲間もここで終わり。

俺はレッドに背を向けて先に行く。

いつまでも一緒にいるわけにはいかない。

「――あ、兄貴っ！」

と、レッドがどもりながら大きく声を上げる。

数歩先を進んでいた俺はいつもの調子で振り返り、その手に握られたものを見て言葉を呑み込んだ。

「ぼ、僕と……いい、いや、俺と」

萌えもんトレーナーの鉄則。

目の合ったトレーナーとは戦うのが規則。

真っ直ぐに俺へと突き出した腕の先には、ひとつのモンスターボール。

そして、もうひとつの暗黙のルール。

勝負を挑まれたのなら、

「萌えもんバトルだ！」

背中を見せてはならないっ！

「――はっ、いいぜ！」

臨戦態勢に入ろうとするリウを片手で制する。

まずはこいつの様子を見ないとな。

腰のホルスターからボールを抜き出し、そのままの勢いで前に投げる。

光を放ち、ボールからシエルが現れる。

「やっはー、外だー」

さて、頼むぜシエル。

「い、いけっ、ポッポ！」

レッドが繰り出したのはポッポ。先ほど見かけた野生のものよりも一回りほど小さいが、鋭い目が印象的だ。

「頼むぜ、シエル！」

しかしいきなり出されて状況がわからないのか、シエルはしきりに首を傾げている。

「何なにー？」

こつちを向いて首を傾げてくるシエル。

「ああ、実は……」

「い、未だポップ、体当たり！」

レッドの指示に従ってポップがシエルへと小さな身体をぶつけてくる。

「ちっ、シエル、殻に籠れ！」

「あいさー」

殻に籠ったお陰で、ポップの攻撃はなんとかダメージが軽減されるも、今の先制はかなり痛い。

「うー、バトルー？」

涙目で俺を見上げてくるシエル。

「ああ、いきなりで悪いが頼めるか？」

「――やるっ！」

シエルは頷くと、殻から飛び出てポップと向き合った。

「……」

凶鑑を開く。

体当たり、殻に籠る、水鉄砲

ポップの方が素早さが高く、こちらの方が遅い。

しかし防御はポップが弱く、こちらの方が高い。

なら、遅いながらの戦術を行うしかない。

「ポップ、もう一回だ！」

レッドが指示を出す。

このレベルだと、まだ体当たりくらいしか覚えていないのは当然だろう。

ああ、だからこそ付け入る隙がある。

「わくわく。わくわく」

楽しそうに身体をリズムカルに揺らしているシェル。この緊張感の無さは良い意味で頼もしい。

レッドの指示を受けたポップが真っ直ぐにこっちに向かってくる。そう、真っ直ぐにだ。

「シェル、水鉄砲！」

「らじゃっ！」

だから、命中する。

「なっ」

レッドが驚く。

ああ、当たり前だ。これはゲームじゃない、現実なのだ。相手が攻撃してむぎむぎ喰らうつもりは更々無い。

「ぴっ」

水鉄砲の威力に体当たりを外してしまうポップだったが、勝機は今この瞬間にしかない。

すかさず指示を出す。

「シェル、体当たりだ！」

「がってんしょうち！」

水鉄砲で浮いたポップへとシェルが水の上を走るようにして体当たりを食らわせる。

「あ、ああっ！」

「ぴ、ぴう……」

そして、目を回して斃れた。

「一体目、撃破だ」

戻ってきたシェルが褒めたと首を傾げる。

「おう、ありがとな」

その頭をなでる。

「きゃっ、もっとほめるがよい」

生き生きと返事をしてくれた。

さっきの水鉄砲の威力といい、当てに出来そうだ。

「も、戻れポップ！」

ポップを手元に戻すレッド。

小さく「ごめんよ」と呟いていたが、聞こえないフリをする。

「……ファアル、いいの？」

「いいんだよ、これでな」

「そっか。わかった」

見上げてくるリウにはどうやらお見通しらしい。

まあ、昨日からの付き合いだとはいえ、さすがに俺とレッドの関係くらいわかるわな。

「今回はシエルでいく。いいか？」

「私に訊くことじゃないでしょ？ トレーナーなんだから」

そうだな。

そうかもしれない。

「ほらっ、次よ次！」

「いっ！」

弱めの電磁波を喰らい、身体に痺れが走る。

ああ、でも。

気付けにはちょうどいい。

両の頬を叩き、レッドへと意識を向け直す。

「いけ、コラッタ！」

続いてはコラッタ。さっき街道で俺が発見した萌えもんだ。

おそらくヒトカゲは最後だろう。弱点属性であるシエルの体力を出来るだけ削り、ヒトカゲのダメージを軽減させるつもり、という事か。

「……」

こちらには全快に近い状態のリウが控えている。

萌えもんを変更するなら今しかない。

思考は一瞬。

即座に指示を飛ばす。

「シエル、一旦下がってくれ！」

そして渴を入れてくれた本人へと。

「頼む、リウ」

背後のリウから、くすりというような笑みが漏れたような気がした。

「諒解」

「えー？」

シエルをこっちに手招き。

「主役は後に出番があるもんだぜ、シエル」

「わかった！」

シエルの頭に掌を置く。

「ミニリユウ、か」

レッドがリウの姿を見て呟いた。

相手はコラッタだ。本当なら斃すはずだったポッポに逃げられたため、事実上はこれが初めての俺とリウの戦闘となる。

手は抜けない。

「先手必勝でいく。リウ、電磁波！」

「はいはい」

リウが右手を掲げると、掌から電磁波が発せられる。

これが電磁波。電気萌えもんなら勝手が違ってくるのだろうが、リウはそうやって生み出すようだった。

「かわせ、コラッタ！」

だが鼠に近い萌えもんであるコラッタは、難なくかわす。

「なっ」

それに驚いていたのは他でもない、リウだった。

「……なるほどな」

少しだけリウの本質が見えた気がする。

だが、それも後回しだ。

レッドは更に指示を飛ばす。

「体当たり！」

すばしっこく走り回り、リウの電磁波から逃れながらも近づいてくるコラッタ。

「こ、このっ、このっ！」

リウはコラッタへと電磁波を放つも、その度に右に左に動かれ命中とまでいかない。

拙いな。

即座に頭で戦術を組みかえる。

コラッタはポップよりもなお素早い。電磁波を当てて動きを止めて、と考えていたが、どうやら無理のようだ。

一方、リウは攻撃力が高い分、命中精度に難がある。改善点はそこだが、戦闘中にどうにかなるものでもないだろう。

「――いや、あるか」

閃いた思考。

挽回するにはこの手しかない。

「リウ、電磁波を止めろ！」

「いや！　だって当たれば斃せるんだもの！」

コラッタは既に目の前だ。

後1回、電磁波を放つ隙すらない。

ならば、

「だから言ってるんだ！　俺の指示に従え！」

「うっ」

びくりと身体を竦ませるリウ。

なんだ？

その姿に違和感を覚えるも、その瞬間コラッタがリウへと体当たりを命中させる。

「あ、うっ！」

リウの小さな身体には大きなダメージだ。

体当たりをしたコラッタともども地面を転がっていく。

そう、共に。

「リウ、今ならいける。電磁波だ！」

「――っ」

俺の意図を汲んだのか、コラッタの尻尾を掴んで電磁波を流す。強烈な電磁波を喰らったコラッタはその瞬間、動きを止めてしまふ。

「叩きつけろ！」

「くっ」

リウは跳び上がり、勢いのままコラッタを叩き伏せる。

「あ、ああ……」

レッドの悲鳴が聞こえるも、こっちのさっきので体力が削られてしまっている。

おそらく後1撃喰らえば立っていたのはコラッタだっただろう。

「ナイスファイト」

「――うん」

元気の無いリウ。

シエルのように頭でも撫でてみようかと手を伸ばすと、びくつとまるで恐れれうように身を縮こまらせた。

「……」

そつと。

優しく触れる。

「あっ」

そして前を向き、小さく告げる。

「ありがとよ」

レッドはボールにコラッタを戻している。

そして、俺を真っ直ぐに見つめ告げる。

「いけ、ヒトカゲ！」

ボールが割れ、砂煙を上げながら火蜥蜴が現れる。

「よし、頼むぜシエル！」

「ばっちまかせろー」

シエルを送り出す。

「……そっか。そうじゃないんだ」
だから聞こえなかった。

俺の後ろで安堵したリウの呟きは。

「ヒトカゲ！」

「シエル！」

ここから先は読み合いだ。

如何に相手を倒せるかにかかっている。

「体当たりだ！」

警戒するべきは、その長い爪でのひっかく攻撃だ。

他の萌えもんと比べても攻撃力の高いヒトカゲが繰り出す一撃は、それだけで脅威足りうる。

しかし、

「ひのこだ！」

レッドの予想は俺を裏切っていた。

「あ、あちち！ あーつーいーよー」

シエルの周りが火に包まれる。

そうか。

シエルのタイプは水と氷。通常ならば有効になりにくいはずだが、氷を持っている分、相殺されてしまうのだ。

加えて、今の攻撃がレッドの隠し球であったのも悟る。

マサラからトキワまでずっと草むらを歩いていた。だからこそ、

レッドは「火の粉」を使えなかったのだ。

そう、つまり逆に言ってしまうえば周りに燃えるものが無いならばいくらでも使用できるのだ。

「ますたー」

シエルが涙目でこっちを振り返る。

ヒトカゲとの距離はまだ離れている。

「もう少し踏ん張ってくれ」

機を狙うにはまだ早すぎる。

先に焦れた方が負けになる。

じりじりと削られていくシェルの体力。しかし火の粉は永遠ではない。すぐに消えてしまえば、そこには体力がつかけているシェルがいるだけだ。

「へ、へろへろー」

ふらふらと千鳥足になるシェル。

「くっ、ひ、ヒトカゲ……」

しかしレッドは俺を警戒してか、二の足を踏んでしまっている。さて、どうするか。

もう一度火の粉がくれば終わりだ。シェルは力尽きる。

しかしこちらの水鉄砲が一度でも命中すればヒトカゲも力尽きるだろう。

賭けるしかない、か。

「シェル！」

俺は真っ直ぐに上を指差す。

「水鉄砲だ！」

「ばっちりょーかい！」

指示通りに、真上へと水を放出した。

「な、何を……」

レッドはその光景を見て、驚いているようだったが、

「ヒトカゲ、ひっかけ！」

チャンスは今しかない！と指示を出した。

レッドに伝えてヒトカゲがシェルのひっかくべく距離を詰める。

——賭けのひとつには勝った。

上に向けて水鉄砲を放ったのは、ひとつは火の粉を消す目的があった。

上空へと放たれた水鉄砲はやがて重力に従って地面へと拡散して降り注ぐ。云わば人工の雨となる。

火炎放射などのような威力の高い技ならば防げないが、火の粉程度なら打ち消せる弾幕になる。

加えて、ヒトカゲの攻撃方法は察するに「ひっかく」か「火の粉」のみだ。泣き声は相手の攻撃力を下げるものだから、水鉄砲には適用されない。つまり、必然的にレッドはひとつの技しか選べない。

こちらへと近づくための攻撃しか。

「シエル！」

素早く指示を飛ばす。

相手の爪が届くよりも速く、

「水鉄砲だ！」

シエルの水鉄砲が至近距離で放たれた。

「嘘でしょ……」

後ろでリウの驚いた声が上がる。

「ひ、ヒトカゲ！」

相性の問題もある。今の一撃でヒトカゲは力尽きた。

……ふう。

これで、俺の勝ちだ。

「やったな、シエル」

「いえーい」

ふらふらしながらもVサインを向けてくれるシエル。俺もシエルに同じようにVサインしてからボールへと戻した。

「ありがとうよ」

もう一度ボールに向かって言葉を向け、レッドへと意識を戻す。

ヒトカゲを手元に戻し、レッドは項垂れていた。

力弱く、地面に向かって。

「う、うう……また、負けた……」

シエルの打ち上げた水鉄砲がまだ降り注いでいるが、レッドが流しているものはそのせいじゃないだろう。

「あ、ちよつとファアル!？」

何か言いたそうなりウを置いてレッドへと向かう。

気配を察したのか、レッドが擦れた声を出す。

「僕、やっぱり才能が無いや……グリーンには勝てないし、ブルー

にだって負けた。今頑張って兄貴にも挑んだのに……負けた!」
それは慟哭だった。

立ち向かってもしも立ち向かってもしも。
それでもなお立ち塞がる巨大な壁だった。
勝てない。

自分の全てを尽くしても、勝てない。
足掻いても、どれほど想っても。

自分の限界を突きつけられる。

だから、上を向いていた頭を下げて項垂れる。

自分には無理だと自分を納得させ、諦めることで惨めな自分を慰める。

「――レッド、顔を上げろ」

だから、そんな奴に向けることなんてひとつしかない。

「な、なんだよ兄貴。兄貴になんてわかるわけないじゃないか!」

涙と鼻水で汚くなった顔で、真っ直ぐに。

自分の不幸などわかるはずもないと叫びを上げる。

その姿はまるで赤ん坊のようで。

俺はまだまだ子供だから。

そんな奴に出来ることなんてひとつしか知らない。

「お前は――どこ見てやがる!」

殴った。

涙に濡れた頬を容赦なく殴った。

「ぶっ、えええっ!?!」

吹っ飛んでいくレッド。

地面を何度もバウンドし、砂煙を上げて転がり、やがて止まった。

「ちょ、ちょっとファアル何やって」

「顔を上げろ、レッド!」

リウの声を無視する。

今必要なのはそんな言葉じゃない。

傷ついた相手に、羽が折れて飛ぶのを躊躇っている奴にかける言

葉は慰めの言葉じゃない。

いつか諦めてしまった俺のように。

もう一度、飛べるように背中を押す事だ。

「あ、兄貴……？」

「お前が……いや、お前とさっきまで一緒に戦っていたのは何だ？
情け無いって自分で言ったお前の腰についてる重みは何だ？」

そう、それは酷く簡単なことなのだ。

俺がこうしてここにいるのも。

リウが俺と一緒に旅立ってくれたのも。

ひとつの、同じ理由なのだから。

「お前が戦ってるのは俺じゃねえだろ！」

だから、いつでも感じられる。

いつでも感じていられる。

「情け無いって下を向くなら、まず初めにそいつらを見てやれ」

自分を信じてくれる奴らを。

自分を信じて背中を預けてくれる奴らを。

「お前が戦ってるのは、そいつらがいるからだろうが」

だから、裏切らないように。

どれだけ人から罵倒されても。

どれほど人から貶されようとも。

自分を信じてくれる奴らだけは、決して裏切らないように。

「もう一度立ち上がってやれ。お前が謝るよりも、お前がもう一度
立ってくれる方がそいつらのためだ」

「こいつらの……」

それがトレーナー。

それが萌えもん。

俺達の絆であり、夢なのだ。

「じゃあな、俺は行くぜ」

レッドへと背を向ける。

「……やっぱりファアルは馬鹿だと思う」

呆れたようなリウの言葉。

でもそれはどこか嬉しそうでもあって。

「はっ、だろ？」

俺も笑って、そう答えたのだった。

きつと、ただそれだけの事。

そしてそれは、トレーナーだけじゃなく誰にでも言える事でもある。

だから、信じられる。

だから、立ち上がれる。

「……みんな、俺は」

きつとレッドは大丈夫に違いない。

どれほど挫折しようとも、あいつが気付いたものはそう簡単に折れはしない。

「――兄貴いつ！」

レッドが叫ぶ。

必死に。

目指す目標へと向かって。

かつて俺が、親父にそうしたように。

「俺は、兄貴を倒す！」

はっ。

「やってみろ！」

背を向けて、手を振る。

これだけでいい。次に会うのはいつだかわからない。

だけど、目指す目標はひとつなのだ。

「……待ってるぜ、レッド」

萌えもんセンターへと向かって駆けていくレッドを見送りながら、そう呟いた。

「で、快復は？」

「もうちょっと待っててください」
リウに土下座するのも忘れはしなかった。

【第三話】 トキワ——シヨタグリーンと森林浴（前書き）

タイトルと中身は関係あるようであんまり関係がありません。幼馴染たちが貰ったのはそれぞれの色に合わせた萌えもんです。個人的にはグリーンはヒトカゲのイメージなんですけどね（笑）

【第三話】 トキワ——シヨタグリーンと森林浴

レッドがトキワに入っていていつてから約1時間。頬を膨らませているリウをからかっていたらいつの間にか意識が飛んでいて約1時間。俺はようやくトキワへと足を踏み入れた。

若者が闊歩し、子供たちが駆けまわり、萌えもんセンター、大きなコンビニとその姿はマサラ出身者にしてみれば都会そのものだ。また、無計画ではなく計画的に景観を考えながら建設されているのも面白い。そのため、マサラから来た田舎者でも迷わずに済む。まったく、そのあまりに都会的かつ親切的な町並みに、この俺ですらはしゃぐ心が抑えられない。

「や」

「やつほー、とかバカ言ったら叩きつけるから」

「……やつと着いたなあ、トキワ」

危なかった。今度は見知らぬ人の家の壁とでもキスをするところだった。無機物はもう嫌だ。

だが、手始めにすることは決まっている。リウをボールに戻すと、その足で萌えもんセンターへと。受付の姉ちゃんに相棒たちの疲れを取ってもらっている間に買い物へ。

萌えもんの回復は無料だからいいものの、買い物はやはり金がかかる。これから目指すのは広大なトキワの森だし、迷っても大丈夫なように日持ちする食料をいくつかと萌えもんボール、そして傷薬と毒消しを買っていれば金がすぐに無くなってしまう。

ふむ、町の周りで調子に乗って萌えもんバトルしているガキからカツアゲもとい報酬を得なければならぬ。

ずしりと重たくなった鞆を持ってセンターに戻ってみれば、そこには元気になった我が相棒たち。飛び込んでくるシエルを抱きとめながら受付の姉ちゃんに頭を下げた。にこりとスマイルを返す姿はさすがにプロ。これからお世話になるだろうからこっちも失礼の

ないようにしないとな。例えば、ボールに入れられたせいかな隣りで不機嫌そうな相棒による壁の破壊とかそういうの。

ま、てなわけできっそく森に行こうと思ったのだが、なにやら前方、レッドが森に向かう道で酔っ払いの爺さんに絡まれていたのでさっさと見捨てて寄り道していくことにした。

俺的都会トキワシティから少し外れると、大きな一本の道がある。今は放置されている簡素な道だが、一年に一度、大きく賑わう時がある。萌えもんリーグが開催される数週間だ。各地を旅し全てのジムリーダーに勝利し、その証となるバッジを集めた者だけが通ることの許されるチャンピオンロード——栄光へと続く唯一の道が、今俺の歩いている道なのだ。

そして俺にとっては幼い頃に通った記憶のある道でもある。今では朧気な記憶でしかないが、いつかここを堂々と歩いていける日を目指したいと心から願う。

トキワから少し歩くと巨大な建物が見えてくる。周囲の自然とは相反した人工物でありながらも、どこか周囲と馴染んでいる、まるで神殿を思わせるかのような一風変わった建物。見ようによっては教会のようにも見えるその建物こそ、チャンピオンロードへ挑戦する許可を下す門だ。

「……っ」と

その近く。生い茂る草むらで見慣れた姿を見つけた。

ツンツンに逆立った髪は性格を現しているかのように実に親切。切れ長で吊り上がった気の強そうな瞳も美男子に入るであろうルックスも、女の子を惹き付けずにはいられない。要するにレッドを含めた男たちの天敵みたいなガキがそこにいた。

正直に言ってしまうば、会うと喧嘩を吹っかけてくるただの生意気な糞ガキなんだが、爺さんの孫とあって顔は既に知られている。むしろレッドと並んでの幼なじみである。

だから、声をかけてやった。

「おーい、シヨタグリーン！」

「ぶっ」

「……うわ、何その名前」

草むらで盛大に吹き出したグリーンを見て、心底嫌そうな顔をするリウ。安心しろ、デマのように思えてデマじゃないから。

グリーンは怒りに髪を逆立たせてずんずんと俺へと向かってくる。まったく、相変わらず怒りやすい奴だ。

「おい、フアル」

しかも呼び捨て。まあ、昔からだから気にしないけども。

「なんだよ？ 見かけたから声をかけたただけなんだが、何を怒ってるんだ？」

「怒るわ！ 見ろ、周りを！」

言われて顔を巡らせてみればピクニックなどで遊びに来ていた人たちが一様に顔を見合わせてひそひそとこちらをちらちら見ながら小声で話している。露骨に笑っているおばさんまでいらっしやるようだ。

これまた……

「無視すれば良かっただろうが」

「無視したらお前、肩組んでくるだろうが！ 何度それで俺がからかわれてると思ってるんだ！」

「不器用だなあ」

「何がだよ！」

「有名人になってるじゃないか」

「違う、こんなの有名人じゃねえ！」

しかし手を振り回して講義してくるグリーンだが、これがまた必死すぎて退く要因になっているのをこのご本人、全く気付いていない。ジジイの孫だしまあ訂正しなくてもいいだろう。別に俺の評判は悪くならないしな。

「つーかあんた」

と、息を荒げながらグリーンはリウを指さした。

その姿があまりにも変質者だったので、さすがにリウは俺の影に

隠れてしまった。

「間違えた。こっちも変態だった」

「おいちょっと待て」

「いや、もうそれはいいから」

グリーンは額に手を当て、一呼吸置くと、やがて落ち着いたのか俺達の方をゆっくりと見上げ、

「あんたも旅に出たのか？」

「――ああ」

「そうか」

グリーンは空を見上げた。

大きく、広い空だ。俺も空を見上げる。本当に、良い天気だ。

「安心しろ、リウ。お前は立派な女の子だからこいつのストライクゾーンには入らないぞ」

「えっ」

「おい、なんで今の流れでそうなるんだよ！ 脈絡とか無かっただろ今！」

「わかってる。俺はどんなお前でもお前の味方だからな、シヨタグリーン」

まったく、この恥ずかしがり屋め。背中をばんばん叩いてそれとなく周囲にアピール。

「――はあ、もういい」

「それで、お前も萌えもん探しか？」

「ん、まあな」

グリーンは俺から一旦距離を取ると、草むらに目をやった。

「ジイさんからの頼みでもあるからな。捕まえていって図鑑を完成させないと」

しょうがないジイさんだ、と文句を言いながらもその顔は優しく緩んでいる。なんだかんだでこいつ、ジイさん子だからな。

「確かお前もレッドやブルーと一緒に図鑑を完成させるんだろ？」

「ああ、そのためにも冒険しないと」

なるほどな。このひたむきさはいいつの強みでもある。外見に似合わずどこか優しかったりするのにも長所だろう。レッドとは正反対だが、良いトレーナーになるだろうな、という予感がある。

「って、俺のことよりあんただ。そいつ、ミニリュウだろ？」

「おう。可愛いだろ？」

「かわっ!？」

「いや、それはいい」

グリーンは自分の図鑑を開くと、なにやら考えた挙句閉じた。そして、

「バトル、やらねえか？」

ぽん、とボールを出してきた。

もちろん、断る理由は俺にはない。

「このフアアル、売られた喧嘩は買うのが流儀だ」

こちらにも距離を取る。俺につくようにして後ずさったリウは、俺の数歩前で着地。今度こそは自分がとばかりに自己主張している。もちろん、文句は無い。

グリーンもまた同じようにして後ろに跳ぶと同時に、手にしたボールを地面に投げつける。中から飛び出したのは小さいながらも獰猛さを持ったたてがみのイカス萌えっ娘、オニスズメだ。近頃見かけるようになってきた、男の娘というらしい。さすがグリーン、お前やっぱりカッコ良いよ。

「オニスズメ、つつけ!」

先行を取ったのはオニスズメ。素早さから見てもリウより鳥萌えもののオニスズメが速いのは当然だ。問題はどうか対処するか、だが。リウの覚えている技を即座に頭に思い浮かべる。

叩きつける・電磁波・りゅうのいぶき・たいあたりと言ったところ。オプションでにらみつけるも出来る。

各技の威力を元に空より襲い来るオニスズメへの対処方を構築。耐久力から見て、オニスズメを沈められる技は揃っている。

問題なのはタイミングだ。速くても遅くても駄目だ。もちろん、

ジイさんの元で戦い慣れている分、さっきのヒトカゲほど甘い相手でもあるまい。制空圏を取られている以上、迂闊な戦法はこちらの負けを意味する。

以上を元に、即座に戦略を弾き出す。なんだかんだ言いながら、リウは俺を信じてくれている。俺の指示を待ち、真っ直ぐに獲物を見据えて立っている。

だから応えなければならぬ。トレーナーとして、相棒として。

「はっ、良い的だぜ！」

縮まる距離。互いが接触するのに数秒とかかるまい。瞬きした次の瞬間には地に臥すリウの姿があるだろう。上空から勢いを上乘せしたオニスズメの攻撃はそれだけの威力がある。

だが――

「そいつは俺たちの台詞だ、小鳥野郎」

右手を上挙げ、勢い良く振り下ろす。

「リウ、叩きつけろ！」

その姿を見たリウは意味を汲み取りすかさず行動に。

まるで技を技で迎え撃つかのような指示に、リウはその長い髪を地面へと向かって叩きつけた。

地面にこそ敵はあり。衝撃で粉塵が巻き起こる。そしてその衝撃に跳躍を加えれば、オニスズメの元へと跳ぶことが出来る。

「な――！」

しかし狙ったのはここではない。鼻白んだオニスズメが身体の前僅か数ミリを掠めていく瞬間に、リウが掴み取る。

これで零距离。有利な部分は消えたわけだ。

「電磁波、撃ち抜け！」

「諒解！」

「――びっ！」

リウの電磁波が空中に咲く。閃光の後、全身を痺れさせられたオニスズメは、空中でバランスを失い地上へと落下する。

だがまだだ。最後の指示をリウに下す。

「……容赦が無いというか」

当たり前だ。いくら幼なじみとはいえ、敵にくれてやる優しさなど微塵も無い。

俺の指示を受けて、無残にもオニスズメは地面へと叩き付けられる。ノックアウトってやつだ。

「「「おおー!」」」

周囲から湧き上がる拍手と歓声。いつの間にかギャラリイが来ていたようだ。

「くそ、戻れオニスズメ」

グリーンがオニスズメを手元に戻した結果、対オニスズメはリウの勝利となる。

続いてグリーンが出したボールは判断するまでもなくフシギダネ。頭に乗った球根がとってもキュートだ。しかし騙されてはいけない。

奴は、男の娘だ。

「今度は負けねえぞ!」

「はっ、いいぜ、来いよ!」

第二戦に突入というわけだ。

レッドのヒトカゲに勝った実力、試させてもらうぜ。

しかしこっちの手持ちはリウとシェルだ。相性から見ても、水タ-ipのシェルだと草タイプの子ギダネ相手は分が悪い。ならここは、やはり迷わずリウだ。

「リウ、続投よろしく」

「任せて」

さっきも俺の意図を組んでくれたようだし、思った以上に連携は取れている。

リウの小さいながらも大きい背中に俺も全幅の信頼を寄せる。

と、

「おっ?」

手元の図鑑を見れば、さっきの勝利で新しい技を閃いたようだ。

” 竜巻 ”

良い技じゃないか。

「リウ、睨みつけろ！」

「はぁ？」

「俺じゃなくてフシギダネをだ」

危うく俺の防御が0になるところだった。

眼光鋭く睨みつけるリウ。

「へ、ばーか！」

グリーンは好機と見てかフシギダネに指示を飛ばす。

「宿木の種だ！」

「任せろ！」

頭の球根から小さい種を飛ばすフシギダネ。

「へっ？」

もちろん、睨みつけていたリウは為す術も無く命中する。

種はリウの服へと潜り込み、そこから種子を見る間に成長させ、最後にはリウの全身を襲う。

「な、何これ！？」

「おお！」

ばっちりだグリーン。この時を狙っていた！ この、リウが触○に襲われているようなこのシチュエーションを！

ナイスだ！

しかしグッと親指を立てるもグリーンは軽く無視。調子に乗って更にフシギダネに指示を飛ばす。

「蔓の鞭！」

「きゃあ！」

リウを襲う一条の鞭。良い。非常に良いよグリーン。言いようのない昂りが俺を――

「いいからさっさと指示をせんか、この変態！」

「――ちっ」

せっかく人が楽しんでるってのに……。

さて、体当たり・鳴き声・宿木の種・蔓の鞭、か。なるほど、確かに育っている。

仕方ない。俺はフシギダネへと向けて、

「竜巻」

「……それでいいの」

リウが目を瞑ると、額の短い角が明滅し始める。

自然法則を無視し、物理法則を蹴破った異常は瞬時にして展開。

空気で捻じ切るかの如く天を貫く文字通りの竜巻がフシギダネを呑み込んだ。

S Mプレイから解放されたリウはまず最初に俺を睨みつけると、

「後で覚えてなさいよ」との怖い発言をして下さった。すまん、さっきの素晴らしい光景は生涯忘れない。

「ふ、フシギダネ！」

オニスズメですら到達しなかった高みまで吹き飛ばされた後、フシギダネは落下する。落下ダメージも合わさって、これで終わりだ。

「あ、ああ……」

フリギダネの無事を確認し、ほっと一息をつくグリーンを一瞥してリウは呟く。

「はい、勝利」

元の蔦へと戻っていく宿木をむしり取り、リウは俺の方へと駆け寄ってくる。

あまりの嬉しさに抱きつこうとしてくれたのだろう。俺が手を広げこの胸で抱きとめようとしたら、何故か体中が痛い上に今度は柵とキスをしていた。

「死ね」

ごもつとも。

俺がむくりと起き上がると、グリーンはフシギダネをボールへと戻したところだった。

しぶしぶと言った様子で俺の前まで来ると、握った掌から数枚の小銭がちゃらり。俺の掌へと納まったそれは勝利した者にのみ与え

られる賞金だ。

「確かに、いただいたぜ」

「――ふん。次は勝つからな！」

グリーンは持ち前の負けず嫌いを発揮したまま、萌えもんセンタ
ーへと歩いて行く。

ま、確かにレッドよりかは強かった。だけど、まだまだ甘いのに
は変わらない。根が正直な分、戦い方も真っ直ぐすぎる。もうちょ
っと弄れた戦い方もありだと思ふんだが――俺から言うべきもので
ないのは確かだ。

「リウ、お疲れ」

ぷい、とそっぽを向くリウ。これまた機嫌が直るには時間がかか
りそうだ。

そしてもう一度、改めて聳え立つ建物を見やる。

数カ月後、あそこを堂々と潜れる日が来るのだろうか。

「いや――」

潜るんだ。自信と誇りを持って、萌えもんリーグに殴り込む。今
目の前で膨れているリウと、ボールに入っているシエル。今後会う
だろう仲間たちと一緒に、あの門を通り抜ける。

感傷に浸るのは帰る時でいい。今はただ、前に進むだけだ。

「行こう」

「ん」

リウの手を引っ張って、来た道に戻る。見物していた人たちの声
が嬉しかった。背中を後押ししてくれているような気さえしてくる。
だから、それに恥じぬ戦いを。いつか俺を見た人が同じように誇
りを持ってくれるように。そのために、せいぜい戦ってやろうじや
ないか。

寄り道しちまったけど、目指すはニビシティ。今日でトキワの森
を越えてやる――。



トキワの森。

深く生い茂った木々によって日光が遮断され、昼間ですら薄暗い森である。森に面するトキワとニビにはそれぞれゲート代わりの大きな建物があり、そこで休息を行ったり落し物をした場合の届け出も受け持っている。

その人工的な建物から一步中に踏み入ると、自然の明かりが僅かながらに世界を照らす天然の迷路が広がる。

時々見える子供達は一様に虫取り網を持って駆けずり回っているのどかだ。のどかだが、ガキ共が追いかけているのが女の子の姿をしているというのは凄くシュールだ。人間なら確実に通報もんだらう。

「さて、と」

そんな奴らをよそ目にしながら、地図を広げる。ここに入る前にゲートの警備員から貰った森の地図だ。物資を運ぶようなルートももちろん存在しているが、そっちは野生の萌えもんはほとんどいない。出来るだけ萌えもんと触れ合いたいので、ここは森の中を迂回していくルートを選びたい。

だがそれも一直線に進めばいいというものでもないようなので、草むらを散策しながらだと選ぶ道がかなり狭まってくる。寄り道も大事だが、ここで出てくる萌えもんといえばキャタピーとビードル、そしてピカチュウくらいか。この先がタケシだということを考えると、電気タイプのピカチュウは使えないが、今後を考えると是非とも欲しい萌えもんではある。

キャタピー・ビードルも同様、進化すれば強くなる。早々に戦力を増強するならば外せない要員であろう。

何はともあれ、進むべき道は決まった。

ルートをたたき出してからリウとふたりで歩いて行く。

しかし、なんでリウはボールに入らないんだろうな。まあ、ひとり寂しく旅をするよりよっぽど気が楽だし、何より信頼関係が築け

る。

つまるところ、だ。なんだかんだでぶっ飛ばされているけど、リウとこうして旅をすることを俺は気に入りはじめているって事なんだろう。

「決まったの？」

「おう、ばっちりだ」

途中、トレーナーとも出くわすだろう。タケシ対策に出来ればシエルも補強しておきたい。

というわけで、草むらを散策しつつバトルを経験していく。道中出会った萌えもんはゲットー——と言いたいが、リウが容赦なく叩き潰していくので全く捕まえられない。

だがおかげでシエルやリウの癖がわかってきたのは大きい。例えばシエルはまだ子供だから力に斑があるし、リウはリウで戦闘能力は高いものの、高見から見下ろしている節がある。かと言ってやはり不安が拭えないようで、俺の指示がないとんでもない事をしてかしてしまいかねない弱さもある。不安定さで言ってしまうえば、シエルもリウも一癖以上持っていると考えていいだろう。

それらを予測して行動を指示していかねばならないので、トレーナーとしてはとても有り難い収穫だ。

「俺の虫萌えもんも勝負だ！」

と麦わら帽子に短パン、虫取り網といういかにもな格好のガキとも戦っていく。というか、日が当たりにくいのに麦わらを被っているところにも違和感があるな、少年。

「あ、これもってー」

シエルが道中楽しそうに拾っていくのは頭上から落ちてきた木の実だ。これは萌えもんたちに持たせると時分たちで判断して使用してくれる、案外と便利な代物でもある。こちらが道具を使うタイムラグが消えるのは大きい。持っているのと持っていないのでは大きく違ってくる。

「お、意外と美味いな」

「そうね……って、あれは何？」

言ってリウが指差したのは他の木々に隠れるようにして存在している木だった。日光が当たらないためか、細く今にも倒れそうな木に、白い布のようなものが引っかかっている。

「紐みたいだな」

近付いてみると、どうやらハチマキのようだった。引っかかっている高さは俺の身長よりも低いが、子供の頭なら調度これくらいになるだろうという場所だった。おそらく、この辺りまで来た子供が引っ掛けてしまったのだろう。

「ん」

このまま放っておいてもよさそうだが、本人が探している可能性もある。俺はハチマキを手にとると、ニビ側のゲートに預けることに決めた。

「ぱくっちゃえー」

さすがにそれは犯罪だ。欲しいなら持ち主探してカツアゲした方がマシってもんだ。

「ま、困った時はお互い様だしな」

シエルの頭を撫でてやる。こずいたら泣きそうだな、ほんと。「……まったく」

リウはリウで仕方ないとため息をついた。

ま、どうせ行く方向だしな。特に問題もないだろ。

「――待ってー！」

踵を返した時だった。遠くから聞こえてくる、どこ聞き慣れた声。が次第にこちらに近づいてきているようだった。

「待てー！」

「あれは……ピカチュウ？」

小さい身体でちょこまかと逃げているのは黄色い毛並みがトレードマークの電気鼠。ああ、可愛い。抱きしめたいな！

「変わったもんだなあ、ブルー」

「ちっがーう！」

更にその向こう。草むらから野生の萌えもんのように這い出してきたのは我が幼なじみであるブルー。活発さを絵にしたようで、冒険の大好きな漢顔負けの少女だ。博士によれば、確かこいつも萌えもんを貰っていたはず。確か……ゼニガメだったか。

ブルーは体格こそ歳相応で小柄だが、レッドやグリーンと違って大人びている。女の子らしいというか、精神が早熟なのだろう。その代わり、悪戯っぽいというか若干ながら小悪魔気質なわけだが。

「手伝い、いるか？」

「いない！」

「へいへい、と」

肩を竦めてピカチュウの道を空ける。だがピカチュウさん、どうやら俺までも敵と認識して下さったらしく、立ちふさがるなら倒すまでと放電を始めた。

「げっ」

最悪だ。まさか俺の魅力がここまで萌えもんを惹き付けてしまうとは思っても

「はいはい、いいから」

リウが呆れたようにピカチュウの頭を長い髪で叩きつけた。

「びっ!？」

今気付いたとばかりにリウを向くピカチュウ。若干涙目なのが非常にそそる。お持ち帰りしたい。

しかし世の中は非情である。遊んでくれると思ったのか、シエルが遠慮無しに威力の増した水鉄砲を発射。

「ピッ」

断末魔すらかき消して水流は巨木へと。流されるままに押しやられたピカチュウもろもとも激突した。

「……きゅう」

目を回して倒れるピカチュウ。捕獲するのなら、今しかないだろう。

「うそ……」

だが驚いていたのはブルーも同じだ。あつという間に片付けられたピカチュウを信じられないといった様子で見ている。

「投げないのか？」

ボールをひとつ渡す。最初にピカチュウを追っていたのはブルーだ。仕方ないが、俺が横取りするわけにもいかない。

「でも——ううん、そうだね」

さすが幼なじみ。ブルーはそんな俺の気質を知っているため、すぐに頷くとピカチュウに向けてボールを投げて見事に捕獲した。

「おめでとさん」

「うん、ありがと」

はにかんで笑ったブルー。シヨタグリーンと違って実に素直な娘さんだこと。多少男勝りな部分があっても、こういった素直さを捨てていないのはブルーの魅力だと思う。どっかのシヨタ糞孫とは大違いだ。

「もうおわりー？」

「ああ、ご苦労さん」

「んー」

頭を撫でてやるとまた嬉しそうに目を進めるシエル。なんかリウもうずうずしているように見えたんでついでに撫でてやる。

「勝手に触るな！」

「なんで！」

今度は巨木とキスをした。



「でも驚いたなあ」

近くにあった切り株に腰を下ろしてしばしの休息。

俺は事のあらましをブルーに話してから一息ついた。

周りではシエルとブルーのゼニガメが仲良く遊んでいる。リウは

疲れたのか、俺にもたれかかって小さく寝息を立てていた。結構な強行軍だったからな……今はそっとしておいてやろう。

「まさかフアアルもトレーナーになったなんて」

俺の見せた図鑑は、同じくブルーも持っていた。去り際にジイさんから貰ったものだったが、やはりブルーたちと同じものだったようだ。これで俺にも萌えもんを集めてみろって事らしい。そうならそうとあの時に言えってんだ。妙な含み笑いしかしやがらなかったくせに。

「お前こそ、順調なのか？」

「んー、まあまあかな」

ブルーは俺にとっては妹に近い。昔から良く遊んだし、何かと世話を焼いていたらしいの間にこんな感じになっていた。近すぎず遠すぎずってやつだ。家族に近いけどそうじゃない。

だから、ある種の遠慮はあってもずばりと切り込める部分もある。不思議な関係と言えばそれまでだが、お互い信頼している事だけは確かだろう。

「で、お前はジムに挑戦するのか？」

ブルーは照れくさいのか頭をかきながら、

「うん。頑張ろうかなって思ってる」

「そうか……」

なら、本当に頑張って欲しい。きっと険しい道だろうけど、ゼニガメもいるんだ。ニビだと相性もあるし良い勝負は出来るはずだな。

と、そうだ。

「これ、お前のじゃないか？」

俺はさっき拾った白いハチマキを掲げてみせる。

「あう」

予想は見事に当たってくれた。ブルーは驚いた顔をした後、悪戯が見つかったかのように舌を出した。

そして受け取ろうと手を伸ばし――

「やっばいい」

「は？」

「あげる。さっきのお礼だよ」

さっき——ピカチュウの事だろうか。だったらあれは不可抗力だ。俺は何もしていないに等しい。

だけどブルーは断固として譲らないつもりらしく、俺が受け取るまでじっとこっちを見ている。

その目がまるで、家を出ると告げた時のお袋に似ていて——

「——わかった。貰っておく」

俺は受け取るより他に選択肢が無かった。

ブルーによると、どうやら萌えもん専用のアイテムらしく意外と使えるらしい。昔、空手道場に通っていた時に貰ったものだという。とりあえずそのハチマキをポケットにしまう。そしてついでに時計を見てみれば夕方に近づいていた。

「今から急げば日が暮れる前には出られそうだな」

「だね。そうしょっか」

リウを起こし、シエルを呼び戻してからブルーと一緒に森を抜けた。

ニビで別れたブルーはやっぱり笑顔で、俺たちはお互いの武運を祈りつつその道を違えた。

そして、ついに俺はジムへと挑む——。

【第四話】ニビ——岩を繰る王者（前書き）

早くも新しい仲間が！ でもチョイ役です。次回激戦、今回は準備回。

【第四話】ニビ——岩を繰る王者

ついに到着したニビシティ。カントー随一とも言われる広大なトキワの森を抜けたために頭も身体もぼろぼろだ。今はとにかく休みたい。

トキワの森へと繋がるゲートから出て少しだけ歩くとニビの穏やかな町並みが見えてくる。トキワと同じ程度の大きさだが、どこかゆとりを感じる景観だ。

しかも夕暮れに染まる町並みはどこか哀愁を漂わせていて、日が沈むまでその光景を目に焼き付けていたいと思える景色だった。

「行こう？」

言って、リウが袖を引っ張ってくる。

「ああ」

町の奥に見える立派な建物は、おそらく有名な萌えもん博物館であろう。裸の萌えもん——げふんげふん、古代の萌えもんの化石が展示されている、この世界の歴史を知ることが出来る唯一の博物館である。ジイさんもこの協力者らしく、時々顔を出していると聞いたことがある。俺も一度小さい頃に来た記憶があるが、その時はさっぱりだった。ジムリーダー戦が終わった後にゆっくりと見てみようか。

夕日に染まる町は家路を急ぐ人々で賑わっており、独特の活気に包まれている。俺も晩ご飯を買うべくコンビニへと足を向ける。ついでにトキワの森で手に入れた報奨金でジム戦の準備も忘れないようにしたい。

「モ」

と、途中小さい草むらに隠れる影を発見。すぐに見えなくなったとは言え、俺の萌えもんリーダーが激しく反応している辺り、何かのモンスターだとは思うのだが……。

また、一瞬だったが身体の色が特徴的で夕日に染まって巧く溶け

込んでいたようにも見えた。逃すまいと揺れた草むらを注視してみればそこには、

「ロコンか」

後で絶対に戦力になり得るであろう小さな炎っ娘がひとり。現在の戦力に炎タイプはいない。ニビシテイのジムリーダーは岩タイプだから相性の悪い炎タイプの出番はないが、これから先を考えれば必要なタイプのひとつなのは間違いない。

「リウ、頼むわ」

「――あれを？」

「おう、捕まえない」

リウはしばらく俺を真っ直ぐに見た後、

「――わかった。変態みたいな目付きが多少マシだからやってみる。でも、倒しても文句言わないでよね」

俺はいつでも紳士的な眼差しだったの。

ただ、紳士的すぎてつい相手をじっくり舐め回すように見てしまっただけだ。

「あいよ」

リウは嘆息して、肩を回して戦闘へと向かった。その後ろ姿はまるでどこかの部族長のようだ。言ったらまたぶっ飛ばされちまうけど。

だが、正直シエルだと弱点の属性もあって倒してしまう恐れがあるため、ここはどうしてもリウに頑張ってもらうしかない。

てなわけで、さっそく萌えもんファイト。

「さ、出てきなさい。そこにいるのはわかってるのよ」

「ふえ？」

びくりと軀を震わせ、おそろおそろ草むらから顔を出したのはやはりロコン。おっかなびっくりと言った様子は保護欲をくすぐるものがある。ますますお持ち帰りしたい。

リウはロコンがこちらに気付くや否や、電光石火の勢いで地を蹴る。

ロコンは吼えて逃げさせようとしているのか口を大きく開けて息を吸おうとするも、その前にリウが肉薄する。

「はあっ！」

電磁波を見舞うと、ロコンが一瞬びくりと軀を震わせる。

「お……おお？」

痺れて思うように動けないロコン。自分自身に何が起こったのかわからないのだろう。直前の行動を止めて、目をぱちぱちさせながら驚いているようだ。

だが俺からしてみれば今がチャンス。躊躇うことなくボールを投げると、ロコンはあっさりと捕まった。

「ゲットだぜ！」

「恥ずかしいから止めて」

しかし電磁波がここまで使える技だとは思わなかった。地面タイプには完封されてしまうとはいえ、それ以外の場面ではお世話になりそうな万能技だ。捕獲にしろ戦闘にしろ、使えて損はない技だろう。

ロコンを捕まえたボールをしまってから、俺は急ぎ足でコンビニへと向かい、その足で萌えもんセンターへと立ち寄る。

萌えもんセンターはトレーナーのための施設というだけあって、萌えもんを休ませるのもさることながら、トレーナーが宿泊できる施設も完備されている。そのため、旅をしているトレーナーにとっては非常にありがたい施設なのである。

俺は受付の姐さんに萌えもんを回復してもらってから、トレーナーの宿泊所となっている場所で利用台帳に記帳した。台帳を見れば、おなじみの三人も同じ宿泊所に泊まっているようだ。

相変わらずボールに入らないリウを連れて宿泊所に行ってみれば、さっそく多目的ホールで出くわした三者三様の声。

「兄貴！」

「ちっ」

「あ、お昼ぶりー」

しかしシヨタグリーンだけ舌打ちだったのはおそらく仕様だろうな。

俺は片手を挙げて返事をしてから用意された部屋へと。荷物を下ろして一休みした頃にはレッドたちが俺の部屋へと雪崩込んできた。だが萌えもんを出しているのは俺ひとり。みんな腰にボールはつけているものの、外に出して交流を深めたりはしないようだ。

しかしまあ、そういうものかもな。他のトレーナーからも好奇の視線を受けているのは俺自身わかっている。萌えもんを外に出しているのがよっぽど不思議な光景らしい。ぱっと見は女の子だもんな。だからかもしれんが。

「ま、いいか」

「？ 何が？」

なんでもないさ、と手を振って答える。

こうなりやついでだと、シエルとさっき捕まえたロコンを出す。

ロコンの方はあだ名を考えてやらないとな。

「ますたー」

ボールから出た瞬間に飛びついてくるシエル。いつも通りに受け止めて、苦笑しながらロコンを見やる。こうして面と向かうのは初めてだからか、俺の顔を見てびくりと身を竦ませた。人間で例えるなら所謂”人見知り”って奴だろう。身体を小さく縮こまらせている姿がまさしくそれだ。

「なあ、ロコン」

「は、ははははい！？」

「あだ名を決めたいんだが、どっちがいい？」

「あ、あだ……？ え、えっ？」

突然の事で戸惑うロコンに選択肢を突きつける。

候補はふたつ。俺はびしっと指を2本立て、

「マコトとピロシキ、どっちが」

「普通の名前にせんかい！」

「ピロシキッ！」

言い終わる前にリウにぶつ飛ばされた。ふふ、可愛いやつめ。

「あ、兄貴……」

「——ほんと何やってんだあんたは」

「あははははははは！」

これもまた三者三様なご反応。

「軽い冗談じゃないか……いてて」

「それがわかりにくいの」

さて、相棒さんからも忠告が出たことだし、ここは真面目にいくとするか。

俺はロコンと再び向かい合う。

「あ、あの——」

「コン」

「は、はい？」

「コンだ。お前のあだ名は、今からコンだ！」

はい、周りの反応わかるよわかる。安直だっただろう？ ああそう
うだ。フィーリングだよ！ 名前聞いて思いついたんだよ！ 全員
で呆れた顔しやがって！

「……コン」

ロコンは俯いて何度か俺が決めたあだ名を小さく呟いた後、

「あの、コンでいいです」

「よし、決定！」

ぱちん、と指を鳴らす。これでコンも俺達の仲間ってわけだ。

「あのさ、私が言うのも何だけど……嫌ならちゃんと言った方がいいわよ？」

「い、いえ……これでいいんです。ううん、これがいいです」

「——そう、わかった」

リウはやれやれと肩を竦めたようだった。

「改めて、よろしくな」

「はい」

コンは俺に深く頭を下げ、その後にリウとシエルにも頭を下げて

いた。礼儀正しいってのはああいうのを言うのかもしれない。

そうして、寝るまで俺達は騒ぎあった。

時々リウに殴られたり、レッドたちをからかったり。何も無い日常のように。まるで、明日がジム戦だとは想像出来ないほどの緊張感の無さで。

でも、それでいいと思う。

戦いは……明日なのだから。



天気は快晴。日差しも暖かく、雨の気配など全く感じない。まさしく絶好の勝負日和だ。

ニビシティは今日も平和だ。しかしその中でも一部活気づいている場所が、ここニビジム。岩タイプの萌えもんを扱うジムリーダー、剛司の根城である。

今日は俺を含めて四人の対戦が決まっている。昨日申し込み、通達が来たのは今朝だ。時間通りにジムへとやってきた俺を出迎えたのは、地面が揺れたのかとすら思うほどの大歓声だった。

レッド・グリーン・ブルーは俺より先にニビシティに到着し、すぐに申し込んでいたようだった。そのため、俺は順番としては最後となる。おそらく、今戦っているのはブルーだろう。

そして、ブルーなら勝つと信じている。正直、相手の手の内を見たいとも思ったが、それはフェアじゃない。何も知らない、わからないで挑むからこそ勝負は面白いもんだ。

もちろん自分の相棒たちを傷つけさせたくはないし、負けるつもりもない。だが、戦いには礼儀がある。俺たち萌えもんトレーナーにしかない礼儀が。例えば相手がエキスパートだったとしても、だ。少なくとも俺には相手の使うタイプがわかっているだけで、充分だ。

「よう、ファアル」

「兄貴、遅いよ」

既に戦闘を終えたレッドとグリーンがジムの前で出迎えてくれる。

「あんたなら俺達の戦いを見に来るかとも思ったんだけどよ」

俺はその問いに問題外だと肩を竦めてみせる。

「お前らなら勝つって信じてたからな」

そしてそれは本当だったわけだ。レッドとグリーンの胸に光るグ
レーバッジを見て結果を知る。

バッジとは、各ジムリーダーに勝つとその証拠として授与される
照明だ。これがないと萌えもんリーグには挑戦できない。だからチ
ヤンピオンを目指す者たちはこぞって各地のジムを回る、というわ
けだ。本当に実力を持ったトレーナーと萌えもんだけど遙かなる頂
きへと挑戦出来るシステムなのだ。

「良く頑張ったな、レッド、グリーン」

ふたりの頭をぐしゃぐしゃに撫でてやる。

「ちょ、何するんだ」

「ま、いいじゃねえか」

弟たちが頑張ったんだ。今度は兄貴分である俺が頑張らないとな。
リウと目を合わせる。不安そうに揺れる瞳に、俺はしっかりと頷
き返す。

「……震えてるじゃねえかよ、あんた」

グリーンの呟きを鼻で笑う。

「はっ、当然だろ」

当たり前だ。

怖いさ。自分自信の実力と、見たことも無い萌えもんとの戦い。

相手は俺と同じくらいの年齢とはいえ、歴戦のジムリーダーだ。経
験もまるで違う。

だけど。

だけど――

「――楽しんだよ、これが」

わくわくしてたまらない。

この先、奴とどんな戦いが出来るのかと考えれば考えるほど、笑みが浮かんで仕方がない。

ああ、やっぱり俺は――

どこまでも萌えもんトレーナーなのだろう。

レッドたちに後ろで手を振ってジムの門を潜る。ここから先は、俺の――いや、俺達の戦いだ。

勝ってみせるさ。リウにシェル、そしてコン。お前らが信じてくれている俺を。お前らを勝たせる事の出来る俺自身を。

「……ふう」

落ち着かせるためか、さっきからリウの挙動も固い。

俺はそんなリウに向かって手を挙げる。

何のことだろう？ 首を傾げたリウだったが、いくら経っても俺が止めないので最後には手を挙げた。

「勝つぞ、相棒！」

「――っ」

掌を叩き合わせる。俗に言うハイタッチだ。

待ってろニビジムリーダー。今からお前を倒しに行く。

「――諒解、マスター」

背を向けた俺に、リウの小さな呟きが届く事はなかった。

ジムリーダーが何故強いのか。問われると、大抵の人間はこう答えるだろう。

萌えもんの扱いが旨いのだ、と。

事実それは真実で、彼らは各属性のスペシャリストと呼ばれるほどの実力を備えた天才たちだ。しかし歴然として違うのは、その経験と誇りである。トキワの森では虫萌えもんばかり捕まえていた少年たちがいたが、彼らとは全く違う存在として扱われているのがその点である。

つまり、元から持っていたトレーナーとしての才能に加え、使用する萌えものの属性を限定する事で戦闘に、戦略に磨きをかけたのがジムリーダーと呼ばれるトレーナーなのである。云わば、トレーナーとして到達するべきひとつの頂きなのだ。

その中でもマサラ、トキワのトレーナーに登竜門とされているのがニビシティジムリーダーの剛司である。彼が扱う萌えもんは一樣に岩タイプ。堅い表面を傷つけることは並大抵の萌えもんでは不可能に近い。水タイプや草タイプのような弱点で攻めるか、格闘タイプのように力で制するか。それほど強力な萌えもんのいないトレーナーにとっては腕の見せ所でもある。

話に聞いた限りだと、レッドはバタフリー、グリーンは弱点である草タイプのフシギダネ、ブルーも同じく相性の良いゼニガメで勝利を収めたらしい。

ならセオリー通りに行くならばシエルを先鋒に持っていくのが無難だろう。相手の出方、萌えもんがわからない以上、こちらもアドバンテージを持つ必要がある。

「これより本日最後のバトルを始めます！」

ドーム上のバトルフィールドに、砂と岩が敷き詰められており、さながら天然の荒野である。岩が多いのはジムリーダーである剛司が有利に立つためであろう。俺のような挑戦者は、こういう仕掛けをも打ち碎いていかねばならない。

そして、実況の声がマイクを通して会場内に響き渡る。周囲を軽く見渡してみれば、観客席は満員だ。盛況じゃないか。

「受けて立つのはもちろん、本日3度の戦いを経て尚疲れを見せないニビシティジムリーダー、剛司！」

俺とフィールドを挟んで向かい合っている壇上の上で剛司が手を挙げる。同時、割れんばかりの歓声が開場を轟かす。

いいね、ぞくぞくするぜ、こういうのは。

自然と震えてくるのを落ち着かせる。

そして観客が静まるのを待ってから、実況は続ける。

「続いて、本日最後の挑戦者は、またもやマサラタウン出身者のフアアル！」

俺には歓声なんぞ起こらないだろう。そう思っていたから驚いた。俺の時もまた同様に——いや、それ以上に歓声が巻き起こっていた。客席を見てみれば、レッドとグリーン、ブルーも最前列に座って俺を応援してくれている。

……ありがとうよ。心強い応援だ。

「では、バトルの前に剛司から発言があるようです」

実況者が剛司にマイクを渡す。

剛司は受け取ると、真っ直ぐに俺を見て言う。

「俺は今日これで4回目の戦いになる。だが、受けたからには全力でいかせてもらう。これまで以上にな」

その目はしっかりと、俺を見据えていた。必ず倒す。その意思を込めて。

ひしひしと伝わってくる戦意にいてもたってもいられなくなる。

同様に実況者からマイクを預かる。

大きく息を吸い込む。

言いたい事なんてのは、ひとつだけだ。

「正直、ブルってる」

その言語で開場内から失望感にも似た空気が漂うがわかる。

だけど、構うものか。

「——あんとと戦うのが楽しみで仕方ねえ。楽しみで楽しみで、笑えてきやがる」

俺はきつと、壮絶な笑みを浮かべていただろう。

憧れていた萌えもんトレーナー。その第一歩を踏み出した時よりももっと、昂っているのがわかる。

未知の敵と戦うのが楽しみで楽しみで仕方がない。

だから、真っ直ぐに指をさして宣言してやる。

「本気で来い。今からてめえのバッジを奪ってやるよ」

「……いいだろう」

気のせいか、剛司の表情が笑ったかのように見えた。そして、おもむろに自分の持っていたホルダーを外し、別のホルダーを取り付けた。

設置されたモニターに表示されたボールの数が2個から4個まで増える。戦力に出来る数にして、俺の倍いる計算になる。

「さあ、ゴングを鳴らしてくれ」

啞然とする実況者に告げ、剛司は壇上よりフィールドへと降り立つ。それだけで、何故か会場がどよめいた。

ボールを取り出し、剛司は俺に真っ直ぐ突きつける。

「本気で行くぞ、挑戦者」

俺もまた、ホルダーからシェルのボールを取り出し、真っ直ぐに剛司へと突きつける。

「当たり前だ、岩使い」

俺達は互いに小さく笑みを浮かべ、

「それでは、ニジシティジムリーダー戦——」

同じように振りかぶり、

「ファイト！」

勝負を開始した。

【第五話】ニビ——岩砕き勝利を手に入れる者（前書き）

ニビシティジムリーダー戦です。少しだけ古いVerのをモデルにしているので、比較的優しめです。また、タイプの相性等には個人的な解釈も含まれております。ご注意下さいませ。

【第五話】ニビ——岩砕き勝利を手に入れる者

かくして、ニビシティジムの火蓋は切って落とされた。

俺と剛司、投げたボールは同時に展開され、

「イシツブテ！」

「シエル！」

互いの声も同時。目の前の敵を打ち砕かんと下される指令は違っても、お互いに込められた意思はひとつだけだ。

お前を倒す。

勝利の頂を手にするために、全力でぶつかり合う。

「地震だ！」

「水鉄砲！」

会場そのものを揺らす、地面タイプでも屈指の技が繰り出される。イシツブテといえども傲ればこちらに勝機はない。

何を気に入ってくれたのかわからないが、剛司は本気で俺と戦ってくれているようだ。明らかに、通常対戦で使う布陣とは違っている。

それがたまらなく嬉しく、楽しかった。

「さて、そのひ弱な水鉄砲でどうする！？」

だが、剛司が力で来るというのなら、俺は知力でお前を引きずり下ろすだけだ。

イシツブテが地震を繰り出す瞬間に飛ばした俺の指示は水鉄砲。

効果があるといっても、そもそもシエルは地震を耐えられない。だが地面の上にいる以上、命中は必須だ。

なら、答えは簡単だ。

要は地上にいないればいい。

指示と共に地面に向かって腕を振り下ろす。シエルは意味をくんでくれ、両手で溜め込んだ水を一気に地面へと放射した。

シエルは子供とあってまだ体重は軽い。通常の水鉄砲ならば身体

が持ち上がるほどの威力はない。だが、水を封じ込め注ぎこみ続ける事で流れが発生し、それが力と転じる。その力を一点へと向けて発射すれば、鉄砲水へと威力は跳ね上がる。

即ち、シエルの身体程度ならば簡単に空を跳べる。

「な——！」

だが剛司が驚いたのはその瞬間だけだった。

即座に気を取り直し、空中で無様に身動きの取れないシエルと攻撃を開始する。

「ならば、ロックブラストだ！」

指示を聞き届けたイシツブテがバトルフィールドに転がっている岩を持ち前の腕力を駆使して投げつけてくる。

こちらは水タイプ。空では身動きなど取れず、回避の方法は存在しない。まさしく”良い的”である。

「シエル、籠れ！」

「らじゃ！」

俺の号令と同時に即座に殻に籠るシエル。刹那到来した岩は容赦なくシエルを襲うが、シエルダーの取り柄はその頑丈さだ。思った通り、こちらのダメージは少ない。

これならば、最初に地震を食らうより余程リスクは少ない。加えて——

「まだだ、イシツブテ——」

「遅え！ シエル、ぶちかませ！」

「水、鉄砲っ！」

殻にこもっていることでこちらの次の行動が読めなくなる。

俺の指示を聞いたシエルは殻にこもりながら先ほどと同じように溜めていた水鉄砲をイシツブテへと一気に噴射した。その威力、空中にいるシエルを観客席付近まで吹き飛ばすほどの威力を持っていた。

「——ぐっ」

剛司の指示を受けようとした隙が仇となった。為す術なく命中し

た水鉄砲は、無防備だったイシツブテを飲み込んでそのまま壁へ轟音と共に直撃する。

「イシツブテ！」

馬鹿な、とイシツブテを見る剛司。

「――1体目、撃破」

目の前で敗れたイシツブテの様子に啞然としていた司会だったが、俺の言葉で我に返ったようだった。

「イシツブテの体力――0です！ ファアル選手、先鋒のイシツブテを鮮やかに倒しました！ これは面白いバトルになりそうだ！」
遅れて沸き起こる歓声。

こっちに戻ってきたシエルの目線に合わせる。

「いけるか？」

「ぼっち」

「よし、次も頼むぜ！」

「うむ！」

自分の頬を叩いて気合を入れるシエル。こいつはまだまだやってくれそうだぜ。

「……凄い」

「逆転しやがった」

「あれがファアル――ううん、お兄ちゃんの力」

その様子を、観客席の最前列で観ていた少年たちがいた。

彼らの名前はレッド・グリーン・ブルーという。萌えもん研究の第一人者、オオキド博士より”萌えもん図鑑”の完成を託されて旅に出ているファアルの幼馴染たちである。

幼い頃より家族同然に育った彼らをずっと面倒を見てくれていた少年がいた。少年はかつて目指した夢を挫折し、心の奥に仕舞い込み、もはや届かないものだと言っていた。そして、その事を誰よりも嘆いていたのは少年ではなく、彼ら3人の幼馴染たちであった。

誰よりも強く、誰よりも大きく見えていた少年。兄のようだと慕う者もいれば、その大きさに反発する者もいた。

しかし彼らはずっと望んでいた。いつも自分たちの前に立ち、引っ張ってくれていた兄の本当の姿を。いつの頃か、輝きを失ってしまったその瞳に再び光が灯るのだと信じて。

だが現実は無情にも少年たちを旅へと駆り出した。かつて自分たちを引っ張ってくれていた少年が夢見たはずの舞台へと。

「んーむ……いや、奴に萌えもん凶鑑は無理じゃ」

旅立ちの前、3人で博士に詰め寄った時の記憶が蘇る。

考え込み、難色を示していた博士。

その言語の真意は果たして何だったのか。もし、博士がそのままずばり、「ファアルに凶鑑を完成させるのは無理だ」と言いたかったのだとすれば？

夢を諦めた少年はいつしか青年と呼べるまで成長した。夢を失い擦り切れ始めた彼はしかし、かつて持っていた魂をずっと胸の奥に仕舞い込んでいた。

大切に、大切に。

いつかもう一度、夢を追える日に今度こそ間違わないように。二度と折れないように。

だからきつと今日こそが彼の本当の——旅立ちの日なのかもしれない。

「戻れ、イシツブテ！」

イシツブテを戻し、すかさず剛司は次のボールを手取る。

「さあ、剛司の次の萌えもんは——おおっと、ここでカブトだあ！剛司が選んだのは、膝を抱えた姿がまた愛嬌のある生きた化石ごとカブト。シエルと似たような戦い方をする萌えもんだらう。ひよっとしたら御先祖様かもしれない。タイプは岩と水。弱点はカバーしているが、ここに来て電気がいないのは残念でならない。

「体当たりだ、カブト！」

似たようなタイプの戦い方が可能だ。剛司も力で押すことに決めたらしい。だが、堅い甲羅に岩が加われば、シエルとは違った体当たりとて油断はでない。ましてや標的はシエルだ。堅い殻を持つとはいえまだ子供。当たり負けする確率の方が遥かに高い。

かと言ってさっきのような大掛かりな水鉄砲は無理だ。発射まで時間がかかる上に隙が大きい。ここはひとつ、堅実に手を打つのがベストか……。

「水鉄砲、頼むぜ！」

「ばっちぐーおっけー！」

ここはシエルの水鉄砲を当ててカブトの体力を削りながら体当たりの勢いを弱めるしか手がない。

だが、そんなのは誰にだって予想できる。いくつもの戦略から剛司が最も待ち望んでいたのは、まさにこの瞬間だった。

「ふっ——カブト、冷凍ビームだ！」

「おっけー！」

土煙を上げながらこちらへと向かってくるカブトは、今まさに水鉄砲を発射しようとしているシエルに向かって冷凍ビームを放った。氷と水の属性を持つシエルだ。本来ならば別段怖くない攻撃だが、タイミングが悪かった。

水鉄砲は即ち水を勢いよく発射する技だ。逆にカブトの放った冷凍ビームは相手を瞬時に凍らせる技である。もちろん氷タイプを持っているシエルには効果はほとんどない。だが、シエルが発射した水鉄砲には——

「ちっ、シエル！ 止められないなら上へ向けろ！」

指示を下す時間も無い。射線をずらすべく、指示を下す。頼む、間に合ってくれ！

「は——あわわ、そんなのむりむりー！」

だが力もまだないシエルにそんな力技は難しかった。僅かだけ持ち上がったくれたが、その瞬間、冷凍ビームはシエルの手まで到達し水鉄砲によって濡れていたシエルの手元まで凍りつかせた。事実

上、シエルの行動は封鎖されたようなものである。

しかし恐ろしいのはここからだ。自然、発射していた分の質量もシエルへとかかってくることになる。当然支えられるはずもなく体勢を見事に崩してしまい、更には身動きすら封じられてしまう。

まずい――！

「今だ。カブト、」

だが狙っていた隙を剛司が逃すはずもない。いち早く号令をカブトに下すと、シエルに向かってその長い爪を振り上げる。

「ひっかけ！」

「ひああああああ」

身動きの取れないシエルは見る間に被弾していく。

一撃ごとに削られていく体力。このままでは数秒の内に敗北は必須だ。実況もさすがにこれはまずいと思ったのか、俺に敗北を認めるよう視線で促してくる。

だが、まだだ。まだシエルは倒れちゃいない。

――いけるか？

視線で話す。

――このままじゃ納得いかない！

返ってくる信頼。

おーけー。なら、俺も踏ん張ろうじゃないか。散るならこいつをぶっ倒してからだ！

最後の指示を視線に籠める。頼むぜ、シエル。その頷きに俺は賭けるぞ。

「これで、トドメだ！」

カブトの爪が振り下ろされる。喰らえばシエルは負ける。逃げ場などない完全なマウントポジション。だが――

「負、けないもん――！」

叫ぶと共に思いつき身を後ろに倒すシエル。

無駄だ。誰もがそう思ったであろう光景は、しかし次の瞬間に覆される。

「な——に」

驚きに目を見開く剛司。

そりゃそうだろう。シエルがカブトの攻撃をかわしたのだから。

ま、カラクリを明かせば簡単だ。要は、凍ってしまっただけから水が発射し続けただけのこと。カブトの冷凍ビームは無限の時間凍りつかせておけるものではない。ただその場にあったものを凍らせるという一時的な効果に過ぎない。後は子供でもわかる。氷の上から、より温度が高い水を通し続けられよう。答えは簡単だ。つまり——

「溶けるってこった！」

今度はこっちの番だぜ剛司。その最高の隙、俺が——俺たちが見逃すとも思ったか！

「水、」

「鉄砲！」

号令と共に吹き出される水流。凍ってから尚堰き止められていた水はもはや濁流だ。一瞬にしてカブトを押し飛ばし、飲み込んでいく。

だがシエルも同時に飲み込まれてしまう。その瞬間、シエルの体力を示すゲージは0へと。

「きゅ」

目を回したシエルに駆け寄って労いの言葉をかける。なんとか顔を返してくれたのを確認してから、ボールの中へと戻す。

遅れて、カブトの体力もまた0になる。シエルと同じように目を回している姿は、こんな戦いの最中だということのお持ち帰りしたくなるレベルの可愛さだった。

「——二体目、撃破だ」

「おおっと、負けるかに思われた戦いでしたが、なんとファアル選手の奇跡の巻き返し。シエルダーとカブトは相打ちとなりました」

そして、それぞれに表示されるボールの数は、俺がひとつに剛司がふたつ。

「だが、萌えもんの数では以前剛司が有利。さて、次の勝負もまた見物だぞ！」

実況の声を背景に、俺はリウと真っ直ぐに目を向かい合わせる。

緊張に揺れている瞳は、しかし自信に満ち溢れている。

マサラで初めて出会った頃を思い出す。時間にしてみればほんの数日前だ。まだまだ絆も信頼も、充分とは言えない。

だが、既に信じられるに足るものは俺の中に確かにあった。

「後は任せていいか？」

少しの敗北すら信じずに、ただただ勝利を掴んでくれると信じて。りうは少し躊躇うように一度俯いた後、自らを鼓舞するかのよう
にブルーから貰ったハチマキを力強く額に巻き直した。

「バッジ、いただきこう」

そして、右手を高らかに挙げる。

「――ああ、そうだな。やろうぜ！」

高らかにハイタッチ。会場中に響きそうなくらい、良い音が鳴った。

準備は整った。残り2体――決着をつけるぞ、剛司。

「やるようだな……」

改めればならないようだ、と内心で舌を巻いた。

悔っていたわけではない。

だが、相手の萌えもんを見て油断していたのは確かだ。ミニリュウと満足に育ってはいないであろうシェルダー。たった2匹で大見得を切ってみせたトレーナー。しかし何度も戦ってきたように、外面だけのトレーナーだと思っていた。だからこそ、イシツブテにカブトといったジムリーダーとしての最強の布陣で粉々に打ち砕くつもりだった。

しかし、そのつもりで出したイシツブテとカブトはたった一体の

シエルダーによって敗北した。しかも弱点をついたからではない。戦い方を見ればわかる。萌えもんの信頼、そして状況に合わせた奇抜な戦術、豊富な知識。それらを駆使し、勝利を手繰り寄せるその力。間違いなく、ファアルは今日一番の強敵であった。

「ならばこちらにも全力でいこうじゃないか」

久しぶりだ。ああ、本当に久しぶりではないか。

今まで何千とバトルを行ってきた。だが、真に燃えるバトルは数えるほどしか経験してこなかった。四天王とも、ジムリーダーとの戦いとも違う。ひとりの萌えもんトレーナーとして、勝負を挑みたかった。

だからこそ、剛司は自然と笑っていた。久しぶりのバトルに滾る気持ちを抑えることなく。

「さあ、行つてこい——」

手に取ったのはこれまでほとんど使う場面など無かったボール。

不意打ちにすらなり得る萌えもんだ。だからこそ、思う。

打ち砕いてみせろ、と。

剛士が笑った。俺を見て、確かに笑っていた。

なるほど……お前も燃えてきたってことか。気が合うな、俺も熱くてたまらねえよ！

「さあ、先が見えなくなってきました今回のバトル。続いて挑戦者ファアル選手が繰り出すのはミニリュウ。対する剛士は——えっ」

そのモンスターを見た瞬間、実況だけでなく会場そのものが凍りついた。

まるで産声のように咆哮を上げ、巨大な姿が露わになる。その姿は——まさしく翼竜が相応しい。プテラ。カブトと同じく遙か古代に生きた萌えもんのひとつだ。

「なんと——プテラです！ 岩タイプを持ちながら飛行するという、まさに反則とも言える萌えもんをまさか剛司が使うとは！」

岩でありながら飛行する。そのハチャメチャぶりもさることなが

ら、重たい身体を飛ばす筋力も要注意だろう。イシツブテなどとは比べるべくもない。おそらく、一度でも被弾すればこちらは瀕死になる。

「いくぞ、フアアル！」

剛司の言葉に答える。

「来な、岩使い！」

互いの声がフィールドに響く、

刹那の後に行動を起こしたのはプテラ。地上近くで羽ばたきを始め、脚で、翼で、そして風で。フィールドに落ちている岩を無数に飛ばしてくる。

ロックブラスト。

イシツブテのそれが投擲ならば、プテラのは弾幕だった。

かわすことはおそらく難しい。なんとかかわせたところで、プテラの懷まで潜り込まなければ勝ち目はない。

「――」

そして、状況を打開するには、奴の裏をかく必要がある。

「よし。リウ、頼むぜ！」

「任せて！」

以心伝心。リウに指示したのは竜巻。瞬時にして天井まで届くかと思えるほどの竜巻を4つ展開。まるでリウを守るかのようにしてプテラの前に立ち塞がる。

だが、プテラのロックブラストと比較すればその威力の弱さは歴然だ。こちらの竜巻はプテラほど巨大な岩を持ち上げられるほどの力が無い。

「リウ、出来るか？」

「わからないけど……やってみる」

リウは念じるかのように目を閉じる。それが決定的な隙になるのはわかっていても、俺たちには縋るより他にない。

しかし剛士がそれを逃すはずもない。ロックブラストに続く形でプテラが飛行する。

おそらく、竜巻の威力を即座に計算したのだろう。確かに、竜巻でプテラを倒せない。よしんばダメージを与えられたとしても、微々たるものだろう。

ひとつなら、だ。

そう、届かないのなら足せばいいのだ。

4つあった竜巻を3つに。3つあった竜巻を2つに。2つあった竜巻を1つに。

それぞれの威力を上乗せし、ひとつの巨大な竜巻を作り出す。

「いや、だが！」

既にロックブラストはリウの眼前へと迫っている。

リウはゆっくりと目を開け、大きく横へと跳んだ。

ギリギリで回避した岩はそのまま竜巻へと飲み込まれていく。果たしてどれだけの数を飛ばしてきたのか確認できないほど岩が竜巻へと吸い込まれていく。

だが、それだけだ。急速に回避したことで無防備なリウへとプテラが迫る。

「噛み砕け、プテラ！」

喰らえばおそらくリウに後はない。

しかしこちらには即座に出せる切り札がある。

「リウ、電磁波だ！」

指示と同時に、リウが掌から電磁波を繰り出す。地面タイプのないプテラは抵抗なく喰らうも、一瞬だけ動きを止めただけで、口を開き急下降で迫り来る。

以前としてリウの敗北が揺るがない場面の中、俺はまた同じように左手の指を3本立て、告げる。

「3体目——」

誰もが何を言っているのかと思った瞬間、それは起こった。

リウへと向かって飛行していたプテラを上空から岩が襲ったのだ。そしてそれは雪崩れとなって降り注いでいく。

「何が……」

絶句する剛司。

種を明かせば簡単だ。竜巻というのは回転しているためわかりにくい、その実、上へ上へと物体を持ち上げていく。海で発生した竜巻が陸上で魚を降らせる原因でもある。言ってしまう、その理屈を利用したわけである。

つまり、ロックブラストによって飛ばされた岩は竜巻へと飲み込まれ、上空へと昇っただけなのである。やがては竜巻が消えた瞬間、重力に従って降り注いだ。

岩雪崩れ。

岩タイプの技にして非常に威力の高い技である。プテラは岩タイプであると同時に飛行タイプを持っている、即ち、

「――撃破」

雪崩れに飲み込まれれば、待つのは敗北だけである。

電磁波で一瞬だけでも動きが止まれば、それがこちらの勝ちと同意だったのだ。

モニターに表示された剛司の手持ちがひとつ消えた。これで、残るは一体だけだ。

歓声が一際大きくなった。こちらに戻ってくるリウにウィンクしてみせ、キモいと言われて超へコんだ。

「……見事だ」

剛士はプテラをボールへと戻し、続いて取り出したボールに額を押し当てた。

おまじないのようなものだろうか。俺もリウとハイタッチをしたんだ。きっと、同じことなのだろう。

やがて、剛司は顔を上げて俺へとボールを掲げた。それは、俺に勝つという意志の現われでもあり、また同時に全力で来いという言葉葉でもあった。

だから俺も頷きを返す。やってみろ。無言の言葉は、しかし剛司には伝わった。

剛士が投げたボール。そこから出てきたのは――

「イワーク、か」

会場がざわつくのがわかる。

ここに来てイワークだと……？ とそこかしこから疑問の声が上
がっているのが俺の方まで聞こえてくる。

だが、剛司はそんな声など気にせず、腕を組んで俺を真っ直ぐに
見据えている。

何にひとつの理由すらなく、剛司はイワークこそが最強の萌えも
んだと信じている。そして、イワークもまたそんな剛司に答えるべ
く、長い岩のポニーテールを地面へと打ち付けた。

轟音が鳴り響き、実況が意識を取り戻したようだった。

「剛司のラストはイワーク……これまで歴戦を共にしてきた剛司の
相棒です！」

そして、これまで何度も萌えもんトレーナーに立ち塞がり、倒し
てきた歴戦の萌えもんである。自信に満ち溢れた表情が物語ってい
る。

間違いなく、強い。

リウも気迫を感じているのか、小さな手をぐっと握り締めていた。

「リウ」

「……ん」

言葉少なに、リウは頷いた。

小さな背中。今にも震えそうな気持ちを必死になって抑えこみ、
立っている。

リウが抱えていた弱点のひとつだ。彼女はいつも”自分が本当は
弱い事を知っている”事実を隠している。だからこそ、自分より強
い相手と向かい合えば、押し隠していた感情が表に出てくるのだろ
う。

傷だらけだったリウは、強くなりたいと願っていた。そして、俺
もまた強くなりたいと——憧れだった背中を追い越すために、強く
ならねばならないと今でも信じている。

俺もリウも、ひとりだけでは決して届かない夢なのだろうけど……でも、今はひとりじゃない。

だから、

「勝つぞ」

万感の想いを込めて、たった一言の言葉を送る。

「うん。勝つ！」

まるで会場全体に響くかと思うほど、両手で強く自分の頬を叩いて、リウはイワークへと向かい合う。

身長も体重も、ましてや経験だって違う。差がありすぎる。

だが、そのために俺たちがいる。その差を埋め、勝利を導くために俺たちトレーナーがいるのだ。

ゴングが鳴らされる。ニビシティジムリーダー最後の戦いが、こうして始まった。

「イワーク！」

先手は岩石竜イワーク。長い岩状のポニーテールは重くないのかと思わず訊きたくなるほど重量感に溢れており、身体を覆う灰色の鎧は下手な物理攻撃など無効化するほどの強度を持っている。

王者のように腕を組み、仁王立ちしていたイワークは剛司の指示を聞くや否や――

「体当たり、行け！」

尻尾の如きポニーテールを伸縮させ、爆発的な威力を持って襲いかかってきた。

イワークの特徴は、岩タイプとは思えないほどの素早さにもある。飛行しているプテラには劣るが、その素早さは決して侮っていないものではない。

まして更に剛司のイワークは背後にロックブラストを射出することによって加速力を高めていた。

その威力、もはや体当たりの範疇を越えている。

「ぐっ！」

かわせないと判断した時には既に遅かった。リウの小さい身体は跳ね飛ばされ、防御したのにも関わらずその体力は見る間に減っていく。

残り、もっても1撃。

「リウ、立て直せ！」

「わかって、る」

余程効いたのか、答える声も弱々しい。しかし跳ね飛ばされながらもなんとか空中で姿勢を立て直してくれた。

ほっとしていたのもつかの間だった。そんな隙、剛司が逃すはずもないのだ。

「叩きつける、イワーク！」

瞬時にして肉薄していたイワークが身を振る。唸るポニーテール。岩で構成されたその一撃は、岩雪崩を直に食らうより尚強力だ。

横薙ぎに繰り出された一撃を為す術なく食らうリウ。

グリーンのオニスズメや、先程のプテラの時と同じだ。今度はこちらが逆手を取られた。

「リウ！」

状況を打開するべく思考を回す。擦り切れるほどに練っても、勝機があるのはたったひとつの方法しかない。だが、そのためにはリウが倒れては意味が無い。

そして、相手の懐に潜り込まねばならない。

「まだだ、イワーク！」

トドメを指すべく、イワークが空中で回転する。あの方向、地面へと叩きつけるつもりだ。

——くそっ、何か方法があるはずだ！

諦めずに方法を探す。唯一の勝機は見つけた。だが、それに繋がるための布石がない。

「いや、あれは……」

ふと、リウの額に巻かれたハチマキが目に残る。

そうか、これなら……。

「かつ、はっ——」

そして俺が答えに至った瞬間、イワークは無情にもリウを地面へと叩きつけていた。

地響きと共に沈む。あまりの威力に会場が地震でも起こったかのように揺れ、立ち上った砂塵でリウの姿は完全に消えていた。

モニターを見ると、見る間に減っていくリウの体力があった。

「あ、ああ……」

静まり返った観客席から漏れた声は、おそらくレッドだろう。

俺はリウが沈んだその場をじっと見つめ、

「……見えたぜ」

「? なんだ」

「フアアル選手のミニリュウ、体力が一気に減っていく! あの強烈な一撃はやはり華奢なミニリュウでは厳しかったかあ!」

会場の誰もがモニターへと釘付けとなっていた瞬間、剛司だけは俺を見ていた。

敵はまだ諦めていない。

剛司もわかっているのだ。俺が、勝利を手放していない事を。

そして、指示を飛ばすべく、ゆっくりと右手をイワークへと突きつける。

「叩き、つけろお!」

号令と共に右手を遥か上空へ。

同時、砂塵を切り裂いて現れたのはリウの姿。その後を、もはや原型を留めていないハチマキが後を引いて落ちていく。

「あ……まさかあれって」

持ち主なだけあって、ブルーは得心がいったようだった。

そう、ブルーが俺にくれたのはただのハチマキじゃない。

気合の鉢巻。

一度だけ——たった一度だけ萌えもんを瀕死から救ってくれる、萌えもん専用のアイテムだ。

だが、これだけじゃ足りない。

この程度では、剛司は出し抜けない。だから、俺はお前の更に行く！

「ナメるなあああ！」

瀕死の身体で、リウが懷に潜り込む。同時、その場で得た慣性を回転することで遠心力さえプラスし、一気にイワークを空へと叩きつける。

いかなイワークとて、衝撃に耐えられず上空へと放り出されるのは必然。

「ならばもう一度叩き潰すだけだ！」

そう、ここまでなら同じだ。

弱点を補うのでは足りない。克服するのでは物足りない。弱点を活かすのが、俺の戦い方だ！

「電磁波！」

宙に浮いたイワークへとリウが電磁波を放つ。

会場の誰もが、剛司でさえも絶句した。

当たり前だ。イワークに電気は効かない。何故ならば、イワークは岩と地面タイプだからで、地面タイプは電気を受け付けないからだ。

だが、地面タイプの本質はそうではない。彼らが電気に効果が無いのは地面タイプだからではなく、地面と接しているためにアースの役割を果たしているからだ。地面タイプは電気を通さないのではない。電気を大地に含まれる水分へと逃がしているからこそ電気が通じないのだ。即ち、それが地面タイプの特性なのである。だからこそ、飛行タイプと地面タイプ、両方を持つ萌えもんは現在まだ確認されていない。

そして岩タイプに電気は効く。これは既にプテラで実証されている。

つまり、だ。

地面と接していない状態のイワークは電気を逃がす事が出来ず——
「なんだと——！？」

帯電し、電磁波のダメージを喰らうというわけだ。

効果が無いとは言わせない。効くだろう、イワーク。何しろ、お前がこれまでずっと素知らぬ顔をして受け流してた電流なんだ。刺激的だぜ、俺たちの電磁波はよ。

「う、動けない!?　なんで!?!」

身体が麻痺して動けないイワークを踏み台にし、リウが更に上空へ跳ぶ。

「リウ」

俺は右腕を一気に振り下ろす。

「叩きつけろ!」

「はあああああっ!」

リウが渾身の力でイワークを地面へと叩きつける。自らの体重で地面に激突したイワークの体力は見る間に減っていく。だがまだだ。トドメには至らない。

凶鑑を開く。先程のプテラのお陰で新しい技を既に覚えている。

「すう——」

宙を舞う龍が息を吸い込む。小柄であろうと龍は龍。岩石”竜”如きに負ける道理は無しと、地に伏せた竜へと吐息を放つ。

「龍の息吹!」

リウの口からイワークの巨体をも呑み込む極彩の炎が吐き出される。瞬時にしてイワークを呑み込んだその吐息は、モニターに映ったイワークのた威力を0にした後、まるで何もなかったかのように消え去った。

軽い音を立てて着地するリウ。静寂に包まれる会場にその音だけが反響する。

火をつける。その意味をこめて、

「四体目、撃破——俺たちの勝ちだ」

俺は勝利を宣言した。



「まったく、完全に俺の負けだ」

言って剛司は手を差し出してきた。

俺はその手を強く握り返す。

「さすがはジムリーダーだ。熱い戦いだったぜ」

互いに笑い合う。全力を出してぶつかったんだ。勝っても負けてもお互いに後悔は微塵もない。

「受け取ってくれ。俺に勝った証だ」

剛司が渡してくれたのは灰色のバッジ。萌えもんリーグ突入への切符のひとつ、グレーバッジだ。

「ああ、確かに受け取った」

剛司から受け取ったバッジをリウとシエルに見せてやる。今回の功労者は俺じゃない。最後まで踏ん張ってくれたこのふたりにこそ見せてやりたかった。

「おおー、きれーだ」

「……へえ、確かに」

覗き込むふたりに手渡してから、俺は改めて剛司と向かい合う。

「そのグレーバッジは持っている萌えもんの攻撃力を上げる効果がある。といっても微々たるものだがな。気に入ったのなら付けてみるといい」

「ああ、わかった」

ま、これは肉弾戦の多いリウでいいだろう。言うと怒られた上に俺で実験させられそうだから言わんが。

俺と剛司が話していると、会場にいた観客たちがいつの間にか周りを囲んでいた。

「おめでとう！」

「すっげえ面白いバトルだったぜ！」

「また見たい戦いだった！」

そして送られる拍手。

周囲の音すら消えるほどの盛大な拍手だった。

……はっ。

「我慢しなくてもいいと思うけど？」

珍しく、悪戯っぽい顔をしてリウが見上げてくる。

「言ってる」

「ちょ、ちよっと！」

その頭を乱雑に撫で、俺は手を挙げて答えた。

更に大きくなる歓声の中、レッドたちも思い思いの表情でそこにいた。

俺は幼馴染たちに笑みを返し、踵を返す。

やってやったぜ、兄弟共。

「またいつか——」

背中にかけられる剛司の声を耳にしながら。

「またいつか、戦おう。その時を楽しみにしている」

「ああ、俺も楽しみにしてる」

そうして、俺たちはニビシティズムを後にした。

いつものように俺の隣を歩くりウの胸には、燦然と輝くグレーバツジがあった。

【第六話】 オツキミ山——それぞれが抱えるモノ（前書き）

ロケット団ってマフィアな設定なのに可愛いキャラクターが多いですよね、性格的な部分で。

【第六話】 オツキミ山——それぞれが抱えるモノ

ニビでの激戦も終わり、萌えもんセンターで体と休め気力を養った俺たちは、いよいよハナダシティへと向かう。

「と、その前に」

どうしても行っておきたかった場所があった。

世界中を探してもニビシティにしかない、萌えもん博物館である。ここに行けば、萌えもんのあられもない姿が合法的に見られる。とてもとても素晴らしい施設である！

「はあ、まあいいけど。寄り道してる暇なんてあるの？」

呆れるリウだったが、強引に引っ張って博物館へと向かう。

ジムと同じほどの高さに、横に幅広い施設となっているのはさすが博物館といったところ。受付で料金を支払い、真っ直ぐに進むと、やがて吹き抜けのようなメインホールに出る。

「ひゅう、すげえ」

幼い頃の記憶と重ねても、リニューアルしたのか面影はほとんど残っていなかった。

中心には巨大な化石、として左右の通路には展示物がずらりと並んでおり、その通路がやがては円になって奥の建物へと向かっている。そこでは遥か昔の萌えもんの生態を研究しているのだ。

そしてメインホールの中央にどっしりと展示されているのは巨大な萌えもんの骨だ。今では姿を見ることができない萌えもんらしい。リウは少しだけ複雑そうにその化石を眺めているようだった。

「……帰るか？」

だけどもあわからなくもない。リウにとっては同じ種族の化石を見せられているのだ。俺たちが人間の化石を見せられているのとは変わらない状態なのだから、心境としては複雑だろう。

だが、

「いい。さっさと見て回る方がいい」

あくまでも強気に告げるリウに俺は頷きを返し、足速に博物館を見て回った。

充実した博物館ライフが終われば、いよいよニビシティともおさらばだ。

時刻は正午前。腹ごしらえをし終わったらすぐに出発したい。これから向かうハナダシティの前にはオツキミ山が聳えており、ハナダへ向かうには山越えをしなくてはならないためだ。

もつとも、オツキミ山の麓には萌えもんセンターがあるので、夜はそこで過ごすのが無難であろうが。

「ま、そこは臨機応変に、だな」

剛司から貰った賞金で準備を整え、いざ出発。

オツキミ山へと向かう道には、やはり萌えもんトレーナーが何人もいる。そして俺の手の中にはまだ戦力がわからない萌えもん——コンがいる。

初めての炎タイプだ。戦力としてどうなのか見ておきたいのが正直なところである。

「……そいつ、戦力になると思う？」

リウの問いに肩を竦めて答える。

「あ、そ」

興味もないのか、それだけで終わる。リウもリウでやはり問題はあるが……今のところは考えても仕方が無い。

凶鑑を広げてコンの状態を見る。極めて良好。性格は弱気。覚えている技は、吼える、尻尾を振る、咬みつく、火炎放射。見事な偏り具合だ。リウが攻撃的な技だらけだったのに対して、相手に対する有巧打を見つけるのは難しそうだ。

しかし火炎放射を覚えてくれているのは心強い。強力な武器になるのは間違いないだろう。もちろん、それを活かせればの話になるが。

「お、兄ちゃんトレーナーだな？ バトルだ！」

と、歩いているといきなり麦わら被った短パン小僧に勝負を挑まれた。虫網を振り乱してトリップしている少年だったが、手加減はしない。これ大事。

「はっ、いいぜ！」

俺はさっそくコンを出す。

「頼むぜ！」

「は、はいっ!？」

いきなり外に出されて戸惑うコン。きよろきよろと周囲を見渡している、どうやら自分の正面に萌えもんがいるのに気がついたようだった。

「はうっ」

虫取り小僧が出したのはキャタピー。トキワの森を歩いていれば見かける、珍しくもない萌えもんである。しかしバタフリーに進化した際の強さは計り知れない。

「キャタピー、体当たりだ！」

指示を受け、キャタピーがコンへと突進する。

俺はさっそくそのキャタピーを丸焦げにするべく火炎放射の指示を出す。

が、

「……や、こっちに来ないでえ！」

コンは吼えた。

その声に竦んでキャタピーは虫取り小僧の下へと舞い戻ってしまう。

「お、おいコン……?」

「うう、やだよお」

身を竦ませているのはコンも同じだった。涙目になって震えている。

その姿に、捕まえたときのことを思い出す。そういえばあの時も、吼えようとしていた。

「あー」

……なるほど、そういう事か。

「くそ、じゃあこっちだ！ いけ、ビードル！」

キヤタピーに変わって今度はビードルを。またまた虫萌えもんであるが、コンにとっては強敵に違いない。

「ひっ、まだやるんですか……」

ずっと野生だったコンにはきつとわからないのだろう。

萌えもんバトルは双方どちらかの手持ちが無くなるまで続く事を。

「ビードル、毒針だ！」

そして勝負は非情だ。こちらの事情などお構いなしに進んでいく。横でバトルを見ていたリウに目配せをすると、頷いてくれた。

「コン、交代だ！ リウ、頼むぜ！」

コンを即座に交代させ、リウを出す。

「りよう、かい！」

毒針を浴びせるべく突進していたビードルを着地と同時に叩きつけてノックアウトすると、そのままバトルを支配した。

「兄ちゃん、強えな！」

負けても笑顔の虫取り小僧と別れ、更にオツキミ山を目指す。

その後も何度かトレーナーと戦ったが、結局コンは同じような状態だった。というか最後にはリウとシエルだけで勝ち進んでいく事になった。

しかもどうやら昨日のジムリーダー戦を見に来ていたトレーナーも多かったようで、やたらと絡まれてバトルを申し込まれたものだから、麓へとたどり着く前に日が暮れてしまった。

「仕方ない、今日は野宿だな」

「歩いていったらいいじゃない」

「危ないさ」

夜行性の萌えもんは危険なものも多い。加えて、昨日のバトルでの疲労も考えるとそれほど無理も出来ない。

ごねるリウを宥めて野宿の準備をする。

といっても簡単なもので、燃えるような枝をいくつかと寝袋程度だ。テントでもあればいいんだけど、旅をするにはどう考えても不向きだからやめた。

暖かい季節で本当良かった。

「さて、と」

もう一度だけボールからコンを出す。

「え、え、またですか……？」

「違う違う」

警戒して周囲を見渡すコンに苦笑してから、積み上げた枝を指差した。

「火をつけてもらってもいいか？」

一応火を起こす道具は持っているのだが、コンに頼りたかった。

「わ、わかりました」

小さく頷いてからコンは小さく火を吹いた。火炎放射——使おうと思えばこういう使い方も出来るらしい。

こりゃ便利。

「ありがとうな」

「ひゃっ」

コンの頭を撫でる。

火が起ると、一気にあたりが明るくなった。

同時に、これで料理も出来る。

予め買っておいた旅用のレトルト食品を加熱していく。

リウも黙ってそれを見ていた。しかしその表情はむっつりとしている。

「あの……」

しばらく沈黙が続いた後、コンが切り出した。

「今日は、ごめんなさい」

バトルの事だろう。

俺は笑いながら首を横に振った。

「いいさ、悪いのはこっちだ」

そう、コンの性格を考えずにいきなりバトルへと放り込んだ俺が悪い。これでは萌えもんトレーナー失格だ。

シエルはあれでも好戦的だった為に頭から完全に忘れ去っていた。萌えもんだって、性格もあるし相性も気質もあるのだって事を。

だから、悪いのは俺だ。判断せずにいた俺の。

断じてコンのせいではない。

「……でも、わたし」

「いいさ。代わりにこうして力になってくれてるじゃないか」

でも、火は起こせた。俺ひとりだったら苦労して火を起こしていたのは想像するに容易い。それだけでも本当に助かった。

「じゃあ、あんた戦えるの？」

しかしリウは納得がいていないようだった。

当たり前といえば当たり前だ。リウは——リウと俺は強くなって倒したい奴を倒すために旅をしているのだから。

「それは……」

「正直に言うわ」

リウは真っ直ぐにコンを見据える。

腕を組んで堂々と立って。

コンにはおそらく、今日出会ったどんな萌えもんよりも怖いものとして。

「あんたはいらない。強くなるために旅をしてる私達に、あんたみたいなお荷物はいらないの」

「おい！」

「——っ、煩い！」

俺の停止すら聞かず、リウは続ける。

「シエルはまだ良かった。でも……あんたは駄目。認めるわけにはいかない。その弱さは——」

コンの目に涙が溜まっていく。

そしてリウは最も告げてはいけない言葉を告げた。

「迷惑なのよ」

食事も終わって、なんともなしに俺は星を見上げていた。

コンが起こしてくれた火は燻っているが、そろそろ消えそうだな。知らない新聞紙を丸めて投げ入れ、一緒に枝を数本ぶち込んでおく。

「……」

あの後、コンは俯いたままボールへと戻った。

俺が声をかける間もなく。

そして、何度呼びかけても答えてくれることは無かった。

リウもリウで、そっぽを向くとそのまま無言になってしまい、今は不貞寝しているのかこちらに背を向けて横になっている。

「――私は認めない」

しかし独り言のように、小さく呟いた。

焚き火が爆ぜる。

「あんな弱い姿、認めない」

それはまるで自分に言い聞かせているかのようだった。

「何かの後ろに隠れていればそれで大丈夫だなんて、絶対に」
認めないと。

リウはそれっきり黙ってしまった。

やがて小さな寝息が聞こえてきたのを見計らって俺は呟いた。

「難しいもんさ。”強さ”ってのは」

まるで答えるかのように、もう一度焚き火が小さく爆ぜた。

「よし、出発だ！」

後片付けをすませ、今日こそはオツキミ山を越えるべく出発する。程なくして萌えもんセンターに到着すると、昨日バトルで見た顔がいくつもあった。どうやらあの場所で野宿をしていたのは俺達くらいのように、他のトレーナー達は無理をして麓の萌えもんセンターまで向かっていたらしい。

そいつらと萌えもんセンターでオツキミ山の情報交換をしておく。山越えといっても洞窟の中を進むので、懐中電灯等の準備は欠かせ

ない。

入り組んだ洞窟は迷いやすく、ハナダまでの道は明記されているものの、薄暗い洞窟内では見落としやすいだろう。慎重に進んでいかねばなるまい。

リウは埃っぽくならないかと気にしていたが、仕方ないと諦めてもいるようだった。

「今日中に越えるの？」

「ま、大丈夫だろ」

岩山トンネルのように大きな洞窟というわけでもない。気を抜いてはいけないが、それなりに肩の荷を降ろしておかないと後で潰れてしまう。

オツキミ山の洞窟に差し掛かると、観光スポットにもなっているのか入り口は比較的綺麗だった。萌えもんセンターで出会ったトレーナー達もいるし、入り口付近はまだまだ賑やかになりそうだ。

しかし一旦奥に入ると、明かり無しでは進みにくくなっていく。といっても地面は整備されており、時折人工の明かりが灯っている。その明かりを目印に進んでいけば、洞窟は抜けられそうだった。

道中出くわした萌えもんは、イシツブテにズバット、パラスの面々。ピッピという満月の日にしかお目にかかれない萌えもんもいるようだが、生憎と日中なために出くわさなかった。残念だ。

しかしうちの主力メンバーは加減を全くしてくれないため、出会う萌えもんを片っ端から倒してしまい、捕獲はついにゼロ。本当にトレーナーに優しくない萌えもん達だ。

と、そんなこんなで進んでいると、ハナダへ近づくにつれていかにもな奴らが見かけるようになってくる。

暗い洞窟内において、真っ黒な服を着ているという気合の入った迷彩に加え、何故だか赤いRのマーク。

噂には聞いた事があった。確か――

「ロケット団、だったか」

萌えもんを使い悪事を働く、所謂マフィアであるらしい。

マサラでは何も話を聞かなかったが、まさかここに来て実物を見
ると思わなかった。

オツキミ山は古い昔、隕石が落ちたことでも有名で、希少価値の
高い石が出土したりするらしい。奴らの狙いはそれか——はたまた
萌えもんか。

「……何よ」

傍らを歩くリウに視線をやる。

リウもまた、珍しい萌えもんに入る。必要とあればトレーナーの
持っている萌えもんすら奪う奴らのことだ。危険なのは間違いない。
「気をつけていかないとな」

「は？ 当たり前じゃない」

意味のわかっていないリウと一緒に洞窟内を進む。

途中、岩に挟まっていた道具を見つけ、拾い上げる。どうやら忘
れ物らしい。かなりの年月が経っているのか、錆ついているがまだ
使えそうだった。

「技マシン、か」

中身を調べてみると、メガトンパンチのようだった。これまた強
力な技だ。本来ならばリウに覚えさせたいところだが、既に同じく
らい強力で使い勝手のいい技を覚えている。

「……そうか」

しばし迷った後、コンに覚えさせることにした。
ハナダについたら頼み込むでしょう。

そう思い、俺が技マシンを仕舞った時だった。

「おい！」

洞窟内に響くほどの声で、そいつは現れた。

真っ黒い服に深紅のマーク。趣味の悪い帽子を被ったそいつは、
噂をすればのロケット団だった。

また面倒な奴に絡まれたもんだ。

「なんだよ」

わざわざ親切に明かりの下まで出てきてくれたそいつは、いかに

も悪党らしい笑みを浮かべて俺に向かって手を出した。

「その技マシンは俺が見つけたんだ。だから俺のだ。渡せ」

言葉は無茶苦茶だが、言っている意味はわかる。

つまり、さっさとこの技マシンを置いて去れって事だろう。

だけど俺、そんなに素直じゃないから……。

「知るか。これは俺が見つけたんだから俺のだ。お前のだと？ 落ちてたもんを拾ったんだから、お前のじゃなくて俺のだろ」

「な——おい、ガキ。落し物は警察に届けるもんだって教えてもらわなかったのか？」

ロケット団員は僅かに驚いた後、忌々しいとばかりに顔を歪めた。いかにもな悪党面だ。

そんな顔をされたら俺も負けてはいられない。

「いいか、良く聞け趣味悪い服の真っ黒野郎。これは俺のだ。俺が見つけたら俺のだ。お前のだったとしても俺のだ。例えお前が本来の持ち主であったとしても俺のだ。何故なら——」

口端を吊り上げて、笑ってやる。

「俺の物だと俺が決めたからだ」

「……どっちが悪党なんだかわからない」

リウが頭を抱えていたが気にしないことにした。俺は間違っていない。

「見上げた悪党だな、お前」

悪党に褒められた。

「しかも珍しい萌えもん連れてやがるじゃねえか」

へへ、とリウに気が付いたロケット団員は笑った。

「もしもし警察ですか。オツキミ山に幼女を見て厭らしく笑っている変態がいます」

「おい！」

通報しておいた。

「てめえ、さっきからふざけてんじゃねえぞ」

青筋を立ててロケット団員は怒っていた。

おかしい、あいつが怒っている理由が俺には検討がつかない。

「ぶっ殺してやるよ——ついでにその萌えもんもいただいでいくぜクソガキが！」

やれやれだ。

頭を抱えて嘆息する。こんなのが世に悪名名高いロケット団だとは。

「はっ、来いよ。チンピラ」

どうやらバトルは避けられそうにもない。

全く同時に萌えもんを展開。

こちらの一番手はシエル。洞窟の萌えもんには部類の強さを発揮する萌えもんだ。

そして相手が繰り出したのは、

「行け、ラッタ！」

コラッタの進化系であるラッタだ。なるほど、確かに強そうだ。

ラッタよりも伸びた歯が特徴で、より愛らしさを増している。甘噛みされたい衝動をぐっと堪えて指示を出す。

全体的な能力としてはラッタの方が上だ。その証拠か、ロケット団員は既に勝ち誇っている。

「必殺前歯、やっちまえ！」

ラッタが飛び出してくる。

喰らってしまえばこちらは一とたまりもないだろう。戦略を練り上げる。

「シエル、水鉄砲！」

「らじゃ」

しかしただの水鉄砲じゃない。

ここは洞窟だ。そこら中に落ちている岩を拾い上げ、水鉄砲に乗せて射出させる。

「な、なに！？」

勝利を確信していたロケット団員が声を上げると同時に、岩はラッタへと激突。こちらに咬みつくべく大きく開けていた口に岩が

ちょうど収まった。

しかしさすがラッタである。噛み砕こうと力を入れているのがわかる。俺はもう一度、シエルに指示を飛ばす。

「水鉄砲強化型！」

「おっけ！」

両手を重ね合わせ、威力が上がった水鉄砲を発射する。その勢いに飲まれ、ラッタは倒れた。

「ちっ、じゃあこいつだ！」

つづいてロケット団員が出したのはズバット。洞窟内で何度も見た萌えもんである。

「超音波だ、狂わせてやれ！」

ズバットが超音波を放つ。

萌えもんの平衡感覚を僅かの間奪い、混乱させてしまう技だが――

「シエル、籠れ！」

殻に籠ったシエルにはほとんど効果が無い。

「ぐ、ぐぬぬぬ」

こういったチンピラのような奴は決まって堪え性がない。無駄だとわかって続けていられるほど我慢強くないのがほとんどだ。

案の定、すぐに超音波を止めさせ、今度は吸血へと戦法を変えてくる。

しかし吸血をするためには当然、密着しなくてはいけないわけで。俺はさっそくシエルが新しく覚えた技を試すチャンスだと目を光らせる。

「オーロラビーム！」

ズバットが回避不能な距離に入ると同時、シエルに指示を飛ばす。オーロラビーム。氷タイプの技で、周囲を染め上げながら敵を撃つ攻撃だ。

ズバットは回避すらままならず、そのまま撃墜されて沈む。これで終わりだ。

「くそが……！」

しかしロケット団員は俺へと向かって拳を振り上げてくる。
本当に面倒くさい。

今度は持ち主をやってしまったという腹なのだろう。
明らかに喧嘩なれしていない動きだ。あまりにも直線的すぎる。
俺はロケット団員の拳を身をずらしてかわす。しかし男にとって
は予想通りだったのだろう。踏み込んだ膝で更に追撃を迫る。
が、

「甘えよ」

俺は蹴り上げられようとしていた右足を踏み抜いた。

「がっ」

呻きを上げるロケット団員の鳩尾に右拳をぶち込む。急所を攻め
られて息を吐くが、それじゃ止まらない。

くの字に折り曲げる身体を髪の毛を引っ張って起こす。

「おい、殴りかかってきたって事は喧嘩の覚悟があるって事だよな
？」

「ち、く」

何か言おうとしていたようなので殴って黙らせる。

再び下を向いたロケット団員をもう一度持ち上げる。

「なあ、どうなんだ？」

「ひっ」

せっかく優しく言ってやったのに酷い奴だ。

「酷いのはどっちよ！」

「ぶるあ！」

またしてもリウに叩きつけられ、俺は洞窟の壁をキスをした。仄
かに水分を含んでいたのがわかるくらい慣れてきているのが悔しい。
「まったく……」

ロケット団員はもう戦う気も失せたのか、ぐったりとしている。

リウは一息ついてから、俺の元へとやってくる。

「……さっきの何？」

「いや、昔を思い出して」

それでもやんちゃしてたんだい！

黒歴史を思い出しそうになったのを頭を振って追い出した。

そして念のために常備していたロープを取り出し、そそり立っていた岩にロケット団員を括り付けておいた。真っ黒な服だとわかりにくいから、少しでもわかりやすいように脱がしておいたら見つけやすくなった。黒い部分を除いたらパンツ一枚になってしまったが、これならすぐ見つけてもらえるだろう。警察には先に通報してあるし、ばっちりだ。俺って優しい。

「さ、行こうぜ」

「あんたの方がよっぽど悪党に見える」

リウの呟きは聞こえなかった事にした。

その後、オツキミ山でパンツ一丁の男が縛り上げられて息を荒げていたのが新聞の一面を飾ったのはまた別の話。

「よし、抜け出した！」

おおよそ半日ぶりに外の空気を吸った気がする。

大きく伸びをして目一杯吸い込んだ。空気が実に美味しい。

「で、そのハナダシティってのはどこ？」

洞窟内ではわからなかったが、リウも煤けている。早く身を清めたいのだろう。ハナダシティに連れて行けとうずうずしているようだった。

別にそのままそこの水場で清めてくれてもいいんだぞ、と言ったらぶっ飛ばされた。世の中は非情である。

「あのね、馬鹿な事言っていないで——」

「あそこだ」

オツキミ山から更に下った場所にハナダシティはある。山から流れる水の恩恵を受けた、水の町である。港町であるクチバシティとはまた違った趣のある町だ。

「さ、行こうぜ」

「うん」

リウとふたりで山を降りていく。

ハナダシテイまではもう少し。この町で俺は、
”強さ”の意味を
ひとつ、知ることになる。

【第七話】 ハナダー——向かい合う弱さ（前書き）

あの橋は日本語訳にするのはアウトだと思うんですね。マサキはギャグキャラクター。よ、ピッピ。

【第七話】ハナダ——向かい合う弱さ

「さて、と」

ハナダシティに着いた俺たちは、まずは疲弊した体を休めに萌えもんセンターへと立ち寄った。

リウ、シエル、コン。実質コンは戦闘要員ではなかったから、事実上はリウとシエルだけでオツキミ山を超えた事になる。疲労度を考えると、1日休んでおきたいところだった。

という事で、現在リウとシエルは萌えもんセンターで休んでいる。唯一戦っていないかったコンを連れて、俺はハナダの町を観光していた。

ハナダシティはニビとクチバを繋ぐ中間地点になる場所だ。また、近くには岩山トンネルや、大きな発電所まで可動している。町の北には巨大な川が流れており、その流れを辿ると町外れに存在している不気味な洞窟が見えてくる。そして川には大きな橋がかかっており、これが通称『ゴールデンボールブリッジ』、名前が実に卑猥である。

「はわぁ、人がいっぱいです」

ずっとボールの中つても辛いだろうとコンを外に出して一緒に歩いているのだが、コンは珍しいのか体を小さくしながらも興味深そうに町を眺めている。

道行く人達も、そんなコンを目を細めて見守っているようだった。まるで、小さい子の初めてのお使いを見ているかのように。

「つと、ここか」

そして一番大事な施設に到着する。

ハナダシティジム。水タイプの萌えもんを操るカスミの本拠地だ。中を覗いてみれば、水泳のスタジアムのように巨大なプールを中心に観客席が広がっている。

「……戦うんですか？」

「ああ」

「そですか」

俺の答えを聞いて俯いたコンの頭を撫でる。

「わふっ」

「気にすんな。なんとかするさ」

戦力となるのはリウとシエルだけ。足元が水である事を考えると、剛司以上の強敵になるのには間違いないだろう。

水タイプに有利な草タイプか電気タイプがいてくれれば良かったのだが、生憎とない。

さて、どうしたものか。

「――それにしても」

プールを見れば、ジムに所属しているトレーナー達が萌えもんたちと一緒に訓練をしていた。

トサキント、ヒトデマン、メノクラゲ――まだ出会った事の無い萌えもんばかりだ。

心の底から羨ましい。俺だってプールに入っと思う存分キャッキヤウフフしたい。

「あの、ご主人様……?」

「――はっ、いや、なんでもない。行くか」

いかん、このまま見ていたらただの変態として通報されかねない。俺はさっそくジムの扉を開けて中に入るとジム戦の手続きを終えた。

だが、肝心のカスミはいなかったようで、

「おそらく帰ってくるのは明日になるでしょう。それでもよろしいでしょうか?」

「ああ、頼む」

わかりました、と。

受付の姉ちゃんに受理してもらい、これで正式にジムリーダー戦にエントリー終了となった。

「じゃ、そろそろリウたちも戻ってるだろうし、帰るか」

言って歩き出す。

すると、

「あの！」

「……ん？」

珍しくコンが大きな声で俺を呼び止めていた。

振り返ってみると、コンは少しだけ悩んだのだろう、視線を左右に動かし、やがては大きく首を横に振った。

「な、何でもない、です」

それっきり口を噤んでしまい、俺には結局何なのかわからず仕舞いだった。

萌えもんセンターに戻るまで、コンはずっと俯いたままだった。

「遅い」

「ひでえ」

萌えもんセンターに戻った俺に浴びせられた第一声がそれだった。本当に容赦がないミニリュウである。

「で、どうだったの？」

どうだった、とはおそらくハナダジムの事だろう。

強くなりたいという意思の強いリュらしく、もうソワソワしているようだ。

「申し込んできた。今日はジムリーダーが出かけてるらしくてな。本番は明日だ」

「明日、か……」

しかしリュとしては勢いを削がれたと同じ事だろう。

出来れば俺も腕を試すためにも近くでトレーナーと戦っておきたいが……と、

「あの、さっきの橋はどうでしょうか？」

袖を引っ張ってそう言ったのは、さっきまで俯いていたコンだった。

橋——ゴールデンボールブリッツジカ。

あそこは確かにトレーナーも沢山いるようだったし、ハナダからそう離れるわけでもない。腕試しにはもってこいの場所だ。

「よし、行くか」

そうなると考えている時間も惜しい。俺はさっそく向かう事にした。

ハナダの北にあるゴールデンボールブリッジは、賑やかだった。

橋を渡ってくるトレーナーを出迎える奴らもいるようで、バトルが盛んに行われているようだ。

その橋の前で、おれはひとりのトレーナーに立ち塞がれた。

そいつは太陽を背にズサッと両足を広げ、腕を組んでいる。逆立った髪の毛は性格を現しているかのようにツンツンしており、格好をつけているようだ。身長と年齢が子供の遊びから抜け出ていなかった。

自信満々に俺を真っ直ぐに見つめるトレーナー。

もはや言うまでもなく

「よっ、シヨタグリーン」

「違えよ!」

グリーンだった。

相変わらず律儀に突っ込んでくれる幼馴染である。

「で、どうしたんだよ?」

「どうしたもこうしたもあるかよ」

グリーンは髪をかきあげ、ビシッと俺に向かって指を向け、宣言した。

「萌えもんトレーナーってのは、目が合ったらバトルだろうが!」

「はっ」

ああ、確かにそうだ。

「断る理由なんぞ、あるわけねえな!」

そうして俺たちは戦闘を開始した。

「いけ、オニドリル!」

グリーンの先鋒はオニドリル。トキワで対戦したオニスズメが成長したものだろう。猛禽類のように鋭くなった視線に睨みつけられただけで身が竦み上がってしまいそうだ。

対する俺はリウを。一度戦って勝っている相手だからこそ選んだ。
「ふんっ」

案の定、リウの中では勝率が跳ね上がっている事だろう。

先程のグリーンのように腕を組み、堂々と立っている。

だからこそ――

それが弱点になり得る。

「飛べ！」

オニドリルは飛行タイプだ。その真髄は空中にいる事で遺憾なく発揮される。

問題にするべきはその敏捷性。オニスズメとは格段に違うスピードと攻撃力でもって、相手を一撃で仕留めるハンターなのだ。

リウの弱点に関して言えば、そろそろ向かい合いたい。だが、今やればカスミ戦に支障をきたし兼ねない。

事の問題は非常に大きい。後回しすれば、リウ自身が大きな壁にいずれはぶち当たってしまう。

「ドリル嘴！」

上空を滑空していたオニドリルは、リウ目がけて猛スピードで突っ込んでくる。しかもオニドリル自身も過去にリウに負けた事は覚えていてようで、角度が浅くなっている。おそらく、外してもそのまま離脱出来るようにだろう。

軽く跳んだところで追尾の範囲内になってしまう。狙えば必殺とはこの事で、オニドリルは過去の経験を確実に活かしてきていた。
対する俺は――

「リウ、叩きつけろ！」

もう一度、同じ戦法を。俺の指示そのままに大きく跳んだリウはまさしく的確だった。

「えっ、ちょっと」

その頃になってようやくリウも気付いたのだろう。オニスズメの頃と比べての成長を。

オニドリルが迫る。もはや回避不能な距離へと入り込まれる。

「電磁波だ！」

「……くっ」

恐ろしいだろうに、それでも逃げずに真正面から電磁波を放つリウ。

ここが長所。どれだけ恐ろしいと感じても、持ち前の強気さで常に相手から目を逸らさない覚悟がリウにはある。

だからこそ、使える手も存在する。

「前と同じ手は食うかつての！ もう一度だオニドリル！」

こちらは一撃貫っている。大きく後退した位置に着地したリウは恨みがましい目で俺を睨んでいた。

オニドリルが上空を旋回している。もう一度さっきのを放つつもりなんだろう。そうなれば、こちらに勝機はない。

先ほどリウがダメージを受けながら放った電磁波はオニドリルに命中している。その証拠に動きが少しだけこちない。しかし万全とは言わないまでも、上空から舞い降りるオニドリルの速さ、威力たるや想像するのは難しくない。

「いけえ！」

オニドリルがこちらへと”真っ直ぐに”向かってくる。

そう、これこそが狙いだった。

今のオニドリルは初手と違い、その動きは制限されてしまっている。電磁波によって筋肉や器官がダメージを受けたためだ。ただでさえ空を滑空し更に目標目がけて襲いかかるという行為は細やかな動きが必要とされる。狩りと同じで、例えば自身が怪我を負ってしまえば、それが小さくても大きくても影響は出てしまうものだ。

だからこそ、オニドリルは真っ直ぐに標的へと向かうしか選択肢が無くなる。上手く飛べないのなら、最大効率で行動するのが当然。即ち、

「こっちにゃ的になるって事だ」

俺は真っ直ぐオニドリルを指差し、告げる。

「龍の息吹！」

即座に反応してくれたリウの一撃は、オニドリルを容易く呑み込む。後に残るのは、力尽きて落下するオニドリルだけだ。

「……マジかよ」

驚いていたグリーンだったが、すぐに気を取り直し次の萌えもんを繰り出す。

「いけ、フシギソウ！」

「ふしっ！ って言ってみたけど正直自分でも無いと思うんですよ」
自分でボケて自分で突っ込みながら登場したフシギソウ。こいつやりやがる。

こちらの手持ちはリウとシエル。疲弊したリウを下げても、残るのはシエルだけだ。

「……」

逡巡することしばし。

グリーンは当たり前のように質問を投げかけた。

「おい、そのロコンは使わないのかよ」

「ひっ」

身を竦ませたコンは俺の影に入ろうとし、何かに気がついたのか慌てて近くの草むらへ飛び込んでいった。

「……なんだあいつ」

「気にしないでやってくれ」

「あ、そ。ま、俺は別にどっちでもいいんだけどよ」

結局、こちらはリウのまま続投。

グリーンは勝機と踏んだのか、フシギソウに指示を下す。

「葉っぱカッター、やれ！」

「了解です。ところで、葉っぱより花びらの方が綺麗だと思いますせんか？ 私って咲いたら凄いんですよ」

フシギソウの頭に乗ったツボミの周囲から葉っぱが舞う。ひらひ

らと舞う中、唐突に生き物のように動きを見せ、

「じゃ、やっちゃいますね」

一斉にリウ目がけて殺到した。

リウも咄嗟に判断してか、回避行動に移る。

だが、遅い。間に合わない。

「くっ、こんなの！」

回避し損ねた数枚を浴びるが、何とか堪えてくれたようだ。

「あらら、まだ立ちますか」

もう一度同じ技を繰り返すのだろう。フシギソウの周囲に葉っぱが舞い始めた。

次の一撃を受ければ終わりだ。

——どうする？

高速に回転する思考の中、ひとつの光景が思い浮かぶ。

——そうか。

それは、上空から襲い来る鳥。重力を味方につけて敵を襲撃する狩人の姿だった。

「手はある、か」

リウならばおそらく後一撃は耐えられるはずだ。だが、そうなる
とさつき閃いた奇策が通じるかどうか怪しい。

迷っている時間は無い。

「フシギソウ！」

グリーンがもう一度指示を飛ばす。

仕掛けるなら、今しかない！

「リウ、下がれ！」

「——っ、諒解！」

しかし咄嗟に後ろに跳んでくれたのはありがたい。

代わりにフィールドに出たのはシエル。草タイプの相手をするに
はあまりにも心もとない。

「血迷ったかよ、フアアル！ 葉っぱカッターだ！」

「シエル、水鉄砲！」

「らじゃ！」

だが、シェルが狙うのはフシギソウではなく地面だ。噴射の勢いを使って空へと飛び上がる。

「ちょ、待て待て待て！」

標的を見失ったフシギソウの葉っぱが効力を失ってひらひらと待っている。

そして勢いの無くなったシェルはそのまま自由落下。だが、この時点で既にフシギソウへ狙いをつけていた。

「水鉄砲！」

「ほいさ」

更に補助として逆噴射。空中で更に勢いを乗せ、一直線にフシギソウへと突撃する。

「まだまだ、殻に籠れ！」

シェルの最大の長所、防御力さえ利用する。

落下のスピードに加え、水鉄砲で更に勢いをつけたのだ。その威力、フシギソウを一撃で仕留めるに足るだろう。

だが、グリーンはかかんにも迎撃を選ぶ。

「はっ、良い的じゃねえか！ もう一度葉っぱカッターだ！」

「あんまりお勧めはしませんが」

どうやらフシギソウにはわかっているらしい。

簡単な話だ。つまりは、葉っぱカッターの死角は上だったという事。

いくら強力であろうとも、当たらなければ意味がない。例えば地上では標的目がけて進むとしても、重力の不可が違う。水平にボールを投げるのと同じ力で上空に向かって投げてみれば――

「と、届かねえ！？」

「だから言ったのに」

そしてよしんば命中したとしても、殻に籠っているシェルへのダメージはほとんど無いと言ってもいい。つまり、

「あーれー」

「フシギソウ！」

こっちの目論見通りってわけだ！

それにしてもこのフシギソウ、なんて白々しい悲鳴なんだ。後ろに（棒）とか入りそうなレベルだったぞ、今のは。

「あーもー、畜生！ まだ終わるかよ！」

グリーンはフシギソウをボールに戻し、続けて萌えもんを繰り出した。

「いけ、ケーシィ！」

「ふあーい」

間延びした声で現れたのはケーシィ。エスパークタイプの萌えもんで、成長すればこちらの思考すらも読み取れるらしい凶悪な萌えもんだ。特に紳士諸君にとっては天敵にすらなり得る萌えもんである。だが、熟練者は脳内で辱める事で相手に恥じらわせるという高度な行為も出来るらしいから侮れない。

「では、いきまーす」

来るか。

ケーシィは「むんっ」と可愛い声と共に力を入れ、

「テレポート！」

何処かに消え去った。

「あ、あれ？ ケーシィ？」

俺はケーシィの飛び去ったであろう空を見上げながら呟いた。

「――勝った」

「えええええええっ!？」

リウが突っ込んでいたが気にしない。

グリーンは涙ながらにボールにケーシィを戻した。どうやらかなり遠くまで行っていたようで、時間がかかっていたが。

そして、徐に最後のボールを取り出すと、何かを思い出したか顔をしかめた。

「リウ、いいか？」

「こうたーい！」

「まあ、いいけど」

グリーンと同じようにこちらもリウと交代する。さて、何が出るか……。

「い、いけ！」

満を持してボールから出てきたのは――

「よし、いくぞお！」

元気良さだけはいっちょ前だが、その場で跳ねまくっているコイキングだった。

「う、うるさい、そんな目で見ろな！」

「そうだそうだ、あたいは最強！」

そして跳ねていた。

なんだろう、この脱力感。

だが俺は、例え相手が子供であろうと常に全力を出して勝つ大人。勝負の世界は厳しいのだ。

「リウ、叩きつけろ！」

「はいはい」

そしてコイキングは敗北した。

「畜生、やっちゃった！」

勝負の後、グリーンは終始その調子だった。

ぐったりと項垂れるその姿はどこか哀愁を漂わせていて、萌えもんセンターまで戻ってきたのはいいものの、あまり近付きたくはなかった。

「くそ、あいつめ……自分がいらなからってコイキングなんて押し付けやがって！」

「あん？」

グリーンは事のいきさつを話し始めた。

「ちよいとそこ行くグリーンさんや」

「ん？　なんだお前かよ」

「ひっひっひっ」

「ババアみたいな話し方がって」

「ちよっと誰がババアよ！」

「……面倒臭え」

「で、これじゃない？」

「何が『で』なのかさっぱりわからねえかど、何だそれ？」

「ふふふ、これぞ最強の萌えもん……に進化する予定の萌えもんよ！」

「何だと!？」

「……バカは最強って言葉に弱いつてのは本当みたいね」

「ん？ 何呟いてるんだ？」

「何でもない。どう、欲しい？」

「くれ！」

以上、回想終わり。

「って事があったんだ……最強だと信じていたのに、ただ跳ねるしか出来ないなんて！」

落ち込むグリーンの肩に、俺はそつと手をかけた。

「まあ待て。コイキングだろ？ こいつ、育てたら強くなるのは本当だぜ？」

グリーンが顔を上げる。

「ギャラドス——水タイプの萌えもんでも屈指の強さを誇る萌えもんだ。良かったじゃないか」

「ほ、本当なんだな!？」

がぼつと顔を上げて掴みかかってくるグリーン。顔が近いよお前。だが、涙で濡れた顔は輝いており、希望を見出した晴れ晴れとした顔だった。

ブルー、お前の悪戯でまたひとり人間不信になりそうな奴がいたけど助けてやったぞ、と心の中で言っておく。

「そうと決まればさっそくクチバだ！ 豪華客船にも乗ってやる！」

さっきまでの様子が嘘のように、グリーンは颯爽とクチバシティへと向かっていった。

「何あれ」

「思春期だからな」

適当にでっち上げておいた。

気を取り直した俺たちは、ゴールデンボールブリッジを破竹の勢いで突破した。

橋の最後には何やら強引に

「入りなよ」

「やだ」

「入らないの？」

「お断りだ」

「入ってよ！」

「頭を下げろ」

「入れよ！」

「さっさと景品くれよ」

「……断るって顔してんな」

「あのナゾノクサ、可愛いな。スリスリしたい」

「それなら……！ 無理矢理入れてやる！」

「うるせえ！」

何てやり取りの後、景品を雀りとったわけだが。

「しかし、こんな辺鄙な場所にマサキって奴がいるのか？」

橋を抜けた先は、ハナダのトレーナーが訓練している場所だった。森が広がり、草むらには萌えもんが生息し、川では萌えもんとトレーナーが遊んでいる。そんなのどかな風景だ。

そんな道をずっと進んでくと、やがてゴテゴテした家が見えてきた。

「何あれ」

「ゴテゴテしてるな」

「……うん」

何というか、そうとしか表現出来ない家だった。玄関はメカニカルに装飾され、どこに触れても静電気が迸りそうなデザインだし、家の両端からは何故か金属の煙突が飛び出ており、その先っぽにはパラボラアンテナのようなものがくると回っている。更に屋根には何か部屋でも後付したのか、不自然な程に6帖ほどの小さな家に取り付けられていた。

近くには橋もあり、川もあるのに何故か人だけがいなかった。当然である。こんな家がある場所の近くになんて誰も近付きたくない。

「ま、行くか」

「行くの？」

リウも不信感を顔にしていた。振り返ってみるととても嫌そうな顔だった。

俺は女子供には優しいのだ。例えそれが萌えもんであろうとも。

だから、

「ああ、楽しそうじゃないか」

「満面の笑顔で何言ってるのよ」

はあ、とため息をついたリウだったが、結局はついて来る事にしたようだった。

後ろから愚痴が頻繁に聞こえてくるが気にしない事にした。

「おい」

飛び鈴が見当たらなかったの、声と一緒にノックしてみた。

変な音が鳴った。擬音すればたぶん、ヒュォイン！？　ってのが一番近い。無性に帰りたくなった。

帰るか。

「賛成」

無言で踵を返した俺に、リウも頷いた。

「ちょ、待ちーや！」

「おでぶっ！」

勢い良く開いた扉によって背中を殴打した。痛え。

「なんでドアの音聞いただけで帰るねん！」

胡散臭いからに決まってるだろうが。

痛む背中をさすりながら顔を上げると、そこにはピッピがいた。

「夢ちゃうで？」

さぞかし俺は間抜けな顔をしていたに違いない。

ピッピが特徴的なイントネーションの人語を喋っていたからだ。

俺は無意識にケータイを取り出すと、

「もしもし警察ですか」

「ちょっと待てい！」

「何だよ、今いい所なんだよ」

「あんさん今通報しようとしたやろ！？」

「違う。警察に知り合いがいるんだ」

「ああ、何や、ならしゃあないな」

「だろ？　もしもし警察ですか。少し頭のイカれたピッピがいるんですが、人的被害が予想されるため、速やかに軍隊の派遣を」

「大事なな！」

「だろ？」

「ってちやうわ！　ちょっと頼まれごとあんねん。中入ってーや」
人語を話すピッピは扉を開けて俺を誘っていたが、俺にはその姿が獲物を待ち構えるウツボカズラにしか見えない。

「さあ！」

しかもこつちが入るものだと思て疑っていない目をしていた。
くそ、俺は見た目には……

「いいだろう、入る」

「さすがや！」

そうして魔窟を想像していた家に入り込んだわけだが……

「どういう事だ……人が住む家じゃねーか」

「人やつちゅーねん！」

「えっ」

「えっ」

「ピッピだろ？」

「マサキやで？」

「すげえな、新しい萌えもんかよ」

「マジか、どこや！」

「いや、ここに」

「わいか！　ってだからわいはマサキやって言っとなるやろが！」

「え、だからマサキっていう萌えもんなんだろう？」

「ちゃうわ！　っていうか兄さん遊んどるやろ」

「まあな」

俺は肩を竦めてみせる。

家は本当に一軒家といった様子だったが、その半分以上は何か良くわからない機械とケール類で埋め尽くされていた。

そして、一際存在感を出しているのが奥にある人が入れそうな大ききのポッドが2つ。

「いやー、実験中に失敗してしもてな。どうしようか悩んでたんやわ」

「実験って一体何の実験なんだ？」

戸棚から茶葉を取り出して湯を沸かす。

「ああ、それはな……ってちょっと待たんかい！」

「あん、何だよ？」

「自分何でそんな当たり前のように茶あ入れてんねん！」

「いや、だってお前そのままじゃ無理だろう？」

「あ、そやな。おおきに……ってそこやない！」

ビシッ、と器用にマサキは指を振った。

「腕や！」

「どっちでもいいだろ。ほい」

「ん、ありがと」

「何ナチュラルにお茶ふたりで飲んでんねん！」

「だってお前そのままじゃ無理だろう？」

「あ、せやな。ってアホかあ！」

ピッピは肩を怒らせている。

何がいいつをそんなに怒らせているのだろう。俺は首を傾げながら茶を啜った。

「まあええわ。元に戻るの手伝ってくれ」

「ええー」

「何でそこで嫌な顔すんねん」

「だってなあ」

「嫌そうに顔背けながら見えるように金の要求すんなや！」

「見間違えじゃねえの？ ほら、ピッピだし」

「元は夜行性やからな……っでもうええわ。わいがそのポッドに入るし」

「ああ、ポットを破壊すればいいんだな」

「そうそう。それでわいは目出度く萌えもん——」

「はは、そいつは面白そうだ！」

「何でテンション上がんねん！」

マサキは疲れたようにポッドの扉を開け、

「ほら、そのパソコン起動しとるやろ？」

「ああ」

スクリーンセーバーが起動していたパソコンに触る。そこには既に起動しているソフトがひとつあった。

「わいがポッドに入ったら、起動しとるソフトをダブルクリックしといてくれ」

「わかった。しかしお前、随分と過激な画像持つてるんだな」

「いやあああああ！ 見るなボケエエエエエ！」

逃げるようにしてマサキはポッドへと入っていった。

仕方ない。俺が一番過激なエロ画像を壁紙とスクリーンセーバーに設定してからソフトを実行させた。

すると機械の両方のポッドが光り輝き、数分後には収まっていた。「ふう、助かった」

マサキが入ったのとは別のポッドから人が出てくる。

そいつはやれやれと言ったように髪をかきあげ、
「すまん、兄さん。助かったわ」
そして俺が変更した壁紙を見て固まった。

「で、や」

落ち着いた後、マサキは俺と向かい合っていた。

「あんた何しに来たんや」

「お前を救うために」

「マジか！」

「きつとそういう運命に違いない」

「運命的やな……これがわいの転換期か」

「それはないな」

「ないんかい！」

「しかしお前、画像の趣味が酷いな」

「ここで言う事ちゃうやん！」

「良いサイト知ってるぜ？」

「親友よ！」

「その代わり、コレだ」

「露骨に金せびんなや！」

「不躰な奴だな……」

「あんたがな！」

ぜえぜえ、とマサキは肩で息をしている。忙しい奴だ。

「まあ、助かったのは事実やしな。ちよつと待っててや」

言って、マサキは何やらガラクタを漁り始めた。ここでもないし一心不乱に探しているようだが、そんな中から掘り出したもの貰っても嬉しくないのが本音だ。

「お前、片付けたらどうだ？」

「んん？ 何言ってるんねん、片付いてるやんけ」

どこがだよ。

生活スペース以外は工具やらガラクタやらで溢れかえっている光

景を目の当たりにしているととてもじゃないが思えない。

「ああ、あったあった。あ、ところでや」

十分ほどしてようやく見つけたのか、何やら薄っぺらいものを持ってきた。へそくりだろうか？

「あんた誰や？」

「ぶち殺す」

「ちゃうちゃう！　んな凄むなや……名前や名前」

「ああ……ピッピだったから忘れてた」

「ピッピ関係ないやん！？」

「フアルだ」

「ふうん……聞いた事ない名前やな」

「だろうな」

「ま、ええわ。助かったのはほんまやし。これ使ってーや」

マサキがくれたのは封筒だった。中を開けてみれば、招待券が一枚。

「サントアンヌ号？」

「せや。今クチバシティに停泊してる豪華客船やわ。世界中を回ってるらしくて、今しか乗れへんし見学でもしてきーな」

「いいのか、これ」

チケットには特別招待券と書かれている。どう考えてもVIP扱いなんだが、それをおいそれと見ず知らずの他人に渡していいものか。

だがマサキは特に気にした様子もなく、手を振った。

「ええねん。どうせ行くつもりあらへんかったし。行かへんのやつたら人にあげてもいっしょやろ？」

「まあな」

ま、本人がくれるってんなら貰うとするか。

「客船とか寄り道してていいの？」

「気晴らしにはなるだろ？」

「そのまま出発しちゃったとか嫌よ？」

「大丈夫だって」

本当？ と丸っ切り信じていない様子のリウを宥めていると、マサキが急に笑い出した。

機械が壊れてついにイカれたのかと思ったが、どうやらそうでもないらしい。

「いやー、すまんすまん。あんたら仲良えなって思ってたな。その娘、ミニリユウやろ？」

「ああ。わかるのか？」

「当たり前やん。萌えものの転送装置を作ったのもわいやで？ それくらいわかるっちゅーねん」

「なるほど、天才だな」

「せやろ？」

「まあ、どうでもいいんだが」

「ここ大事やからな！？」

こほん、とマサキは一度咳払いを。

「で、あんたは何でうちに来たんや？」

時計を見るとまだ夕方だった。どうせ明日までは暇なのだし、ゆっくりしていくか。

そう思って、事の顛末を話したのだった。

「ははー、なるほど。ま、あの姉ちゃんはいつもそんな感じやしな」

「そうなのか？」

「ああ。おまけに五月蠅いねん」

剛司とは正反対の性格っぽいな。

しかし性格と実力はまた別の話。手強い相手なのには変わらない。

「何や途端に良い目しよるやんけ」

「トレーナーだからな」

当然だろ？ と苦笑を返す。

マサキはしばらく顎に手を添えた後、

「決めた。明日見に行くわ。興味湧いたし」

「あん？ 別に構わねえがよ」

「あんたの試合が見たくなった。何や面白くなりそうな予感がすねん」

「はっ、楽しませてやるよ」

「期待してるで。ところで秘蔵の画像やけどな……」

「コレだな」

「だから金取るなや！」

いつの間にか日は落ち、夜が更けていく。

明日も良い日になりそうだ。たまには同じ年代の男と話すのも悪くない。そう思った一日だった。



フアアルとマサキの笑い声が聞こえる中、コンはひとり屋根の上で膝を抱えていた。

——自分では何の役にも立てない。

ニビでフアアルと出会い、最初に戦った時からずっとコンは震えていた。

ただただ、怖かった。元から人見知りの激しかったコンだった。群れでも馴染めず徐々に皆が離れていく中、コンはひとりきりになった。置いて行かれてしまったのだ。

そして、自覚しながらも自分では無理だと、群れの仲間達の迷惑になるからと思って身を引いた。それ以来、ずっとひとりで過ごしてきた。

寂しいと空を見上げて泣いた事もあった。いつか誰か迎えに来てくれると信じて涙を我慢した夜も多かった。萌えもんと一緒に戦っている人間達を見て、羨ましいと思った。共に喜び、楽しそうにしている彼らが羨ましかった。

でも、自分には無理だから。臆病で怖がりで、人一倍人見知りな自分には彼らのようにはなれないからと諦めた。

「御主人様……」

ファアルの姿を思い出す。自分を捕まえた人。コン、という渾名をくれた人。戦えない自分を認めてくれた人。

その人が大事な戦いに挑むのだという。

リウとシエルが強さは知っている。目の当たりにしたからこそ、コンにはその強さがわかった。それでも相手はもっと強いらしい。昼間に会った少年は言っていた。そのロコンは使わないのかよ、と。ファアルの影に隠れて怖がっていたコンを指さして呆れ顔で言っていた。

どうしてだろう。

それがたまらなく、嫌だった。思い返す度、ずきずきと胸が痛くなった。

「……わたしは」

誰も、何も教えてはくれない。震える身体を押し込めるように、リウは膝を強く抱えた。

「何してんのよ、あんた」

「ふえっ？」

だから、リウの存在にも気が付かなかった。

出っ張った部分を伝って登ってきたのだろう。屋根に軽く着地すると、リウはコンを見下ろした。

また怒られる。コンは思わず身を竦ませたが、返ってきたのは嘆息だけだった。

「あいつら、五月蠅いわね」

「え？ あ、はい。そうですね……」

男ふたりが楽しそうに話している。

ハナダから離れているためか、夜になると人はいなくなる。家と月明かりだけが頼りの中、ファアルとマサキの声が人の息遣いを感じさせている。

「でも、楽しそう」

コンはふたりの様子を想像してはにかんだ。

五月蠅いだけよ、とはリウ。コンから少しだけ離れ、月を見上げた。

「私はね、強くなりたいの」

「……強く、ですか？」

「そう、強く」

月へと向かって真っ直ぐに手を伸ばし、

「あの人に勝つために」

ぐっと月を握るかのように拳を作る。図らずもそれはファアルのようでもあった。

「――リウさんは凄いです。目標、あるんですから。戦う理由があるんですから」

自嘲を込めて。

自分には何も無いのだとコンは告げた。

言ってしまったから思う。どうして自分はこんなにも後悔しているのだろうか、と。

「ふん、そんなの持ってるの私だけよ。あのシェルにそんなの無いと思うけどね」

コンの内心を知ってか知らずか、リウは続ける。

「あいつは単純にファアルが好き。後、戦うのも好きみたいだからファアルの夢に乗っかってる。ま、子供だから仕方ないんだろうけど」

でも、と。

「あんたよりかは強い。そしてたぶん、”私よりも強い”」

リウが何を言いたいのかコンにはわからなかった。だが、リウも同じように苦しみ悩んでいるのだという事だけはわかった。

自分だけじゃない。きっと、ファアルだって同じなのだ。

コンは自分の頭に触れる。

戦わなくてもいい、と。ファアルはそう言って頭を撫でてくれた。ありがとう。何の役にも立たない、ただ隠れていただけだった自分に言ってくれたのだ。

「わたしは……」

怖い。ずっと逃げてきたコンにとって、それは何物にも代えがたい恐怖だった。

でも――

胸の内に小さく火が灯る。

それはとてもとても小さな火だったが――コンにとってはとてもなく大きな火だった。

「っていうかさそろそろ帰らないとね。ほら、あんたもさっさと行くわよ」

「は、はい！」

言うや否や颯爽と飛び降りたりウは扉を蹴破ったようだった。

家の中からマサキの嘆く声が聞こえる中、コンはもう一度月を見上げた。

白く大きな月は、コンを優しく見下ろしているかのようにだった。

コンは一度目を瞑り、大きく息を吸い込んで月に向かって鳴いた。遠く、遠く。空の彼方まで響くかのように。

【第八話】ハナダー——水を制し、己に打ち勝つモノ（前書き）

激戦、ハナダジム！ 序盤の鬼畜関門、カスミ戦です。レベルを上げて物理で投げればいい的な攻略は無理なので、思っていた以上に鬼畜でした。また、各技には個人的解釈が含まれておりますので、ご注意くださいませ。

【第八話】ハナダー——水を制し、己に打ち勝つモノ

——翌日。

日が中天に差し掛かる頃、俺は外にもざわめきが聞こえてくるハナダジムを見上げていた。

約束の時間まで幾ばくもない中、一度大きく深呼吸した後、頬を両手で叩いた。

「うわ、痛くないの？」

「大丈夫だ、リウのより痛くない」

「——へえ」

さて気合も入った事だし、相棒にぶっ飛ばされる前に行くとするか。

俺たちの戦いの場所へ——



「あのっ！」

それは俺がジムに挑む数時間前だった。

夜も明け、ようやく緊張してきた俺にコンが詰め寄ってきたのだ。

「あ、ああ。どうしたんだ？」

たった数日の付き合いだが、見た事もない勢いに少し面食らいながら姿勢を正す。

するとコンは何かを言おうと言葉につまり、やがて小さく俯いた後、勢いよく首を横に振った。

まるで、自分の中に浮かんだ甘い誘いを打ち消すかのように。

「……技を教えて欲しいんです」

「技を？」

「はい」

俺が思いついたのはひとつだけ。そう、オツキミ山で拾った古い

技マシンだ。一度使えば完全に壊れてしまうほど、ボロいものだが……。

「お、お願いしますっ!」

そうして、頼んできたコンは真っ直ぐに俺を見つめていた。

決意を宿した瞳で。顔を紅潮させながら、でも一度足りとも目を逸らしはせずに。

もちろん、俺としても拒む事はないのだが、

「それは別に構わねえ。でもな、覚えるためには何か代わりに忘れないと無理だぞ?」

「えっ?」

使用出来る技は4つまで。これはバトルを公平にするために定められてた規定でもある。

萌えもんは様々な技を覚えるので、全部使えるようにすれば決着がつかず、またルールを細分化出来ないためだ。

コンは既に登録してある。戦ってもらいかどうかはともかく、念のため登録しておいたのだ。棄権も認められている事だしな。

だからこそ、今覚えるとすればどれかの技を”忘れ”て新しく覚えなければならぬ。

今コンが使えるのは――

「火炎放射、吼える、噛み付く、尻尾を」

「吼えるでお願いします」

きっぱりと。

コンは迷う事無く忘れる技を告げた。

だがその技は、コンをずっと守ってきたもののはずだった。

何がコンを変えたのかはわからない。

だが、事ここに来てコンはもう戦っていた。何よりも強い敵と。自分も一歩進めるのかもしれない。

だから俺に出来る事はひとつだけだった。

「わかった」

コンの背中を押す事。トレーナーである俺に出来るのはそれだけ

だから。

「よろしく、お願いしますっ！」

技マシンをコンの頭にセットしながら思う。

絶対に負けられない、と。



受付で必要事項を確認した後、挑戦者は控え室へと通される。

備え付けられたテレビからは昨日見たハナダジムの光景が映し出されている。

恐ろしく簡単に言えば、ハナダジムはプールだった。ストレートにイメージを伝えようとするなら、競泳用のプール会場とでも言えはわかんと思う。

観客席から先はずっと水だ。水深がいくらあるのかはわからないが、立って足が着くような深さで無いのは間違いない。そして、会場から控え室へと繋がる扉から真っ直ぐにプールを縦に割るように人一人分の幅の通路がある。

ジムリーダーである香澄の扱う水タイプにとっては、有利すぎるバトルフィールド。シエル以外は文字通り水上戦に持ち込まなければ勝ち目は低いだろう。

「……嫌な地形ね」

「同感だ」

「たのしそー！」

両手を上げて楽しそうなのがひとりだけ。

「当てにしてるぜ」

はしゃぐシエルの頭を撫でる。

そして、

「……」

コンは黙って、テレビを見ていた。

もし戦えたとして、このフィールドで一番辛いのはコンだろう。

炎タイプはただでさえ水タイプに弱い。それに加え、足場も少ないのだ。考え得る限り最悪の相性だ。

だけど……コンの性格を考えると、やはり出せない。普通の戦闘でさえまともに戦えないのに、不利な条件ばかりの今回では分が悪いく所じゃない。はつきり言ってしまうえば、リウとシエルだけで勝ち進むくらいで考えていかなければならないだろう。

だが、それでもやらなければならない。

負けるためではなく、勝つために。

「それではこれより、ハナダシティジム戦を開始します。挑戦者の方は、ご入場下さい」

呼び出しと共に立ち上がる。

「――行くぜ」

リウ、シエル、そしてコン。

頼もしい仲間たちに声をかけ、控え室の扉を開ける。

さあ、行こうか。二つ目のバッジを手に入れる戦いに――。



扉を開くと、水の匂いが立ち込めていた。

広いプールの上に申し訳程度につけられた足場。俺の場合は控え室から、そしてジムリーダーの場合は俺のちょうど向かい側となる扉の前にトレーナーの陣地が設置されていた。

そして、その先は先ほどビデオで見たような作りだった。小柄な萌えもん2体が並んで通れるほどの通路だが、予想より不安定さは無いようだった。しっかりとプールの底まであるのか、プールに起こっている小さな波程度では微動だにしていない。

「さて、今回も始まったハナダジムリーダー戦！ 今日の挑戦者はただひとり――」

観客席近くに陣取った実況者が俺へと腕を向け、
「マサラタウン出身のファアルだ！ 昨日からマサラタウン出身者

が立て続けに戦いを挑んできている。それぞれが面白い戦いをして
いたが、果たして今回はどうなるか非常に楽しみだ！」

どうやらグリーンだけじゃなく、レッドやブルーもここを勝ち抜
けたらしい。まったく、俺も負けていられない。

そして――

「迎え撃つは我らがハナダシティジムリーダー」

颯爽とプールの中から跳び上がったのは、髪を頭の上で小さくま
とめた少女だった。俺より若いが、レッド達よりかは歳を取って
いる。しかしまだ少女と呼んでも差し支えない年齢の女の子だった。

ビキニ姿の少女は扉付近にかけてあったパーカーを羽織ると、マ
イクを持って俺へと真っ直ぐに指を指して宣言した。

「私はハナダシティジムリーダー、香澄！ あのね、貴方！」

真っ直ぐに俺の挑戦を受け止めて、堂々と胸を張っている。

「萌えもん育てるにも、ポリシーのある奴だけがプロになれるの！

貴方は萌えもん捕まえて育てる時、何を考えてる？」

バトルが始まる。

香澄の言葉を聞きながら、一度目を閉じて大きく息をつく。

「私のポリシーはね……」

ボールを手取る。最初に繰り出すのは決まっている。

「水タイプの萌えもんで、攻めて攻めて――攻めまくる事よ！」

行け――

「ハナダシティジムリーダー戦、」

「シエル！」

「アズマオウ！」

「開始！」

俺と香澄、2体の萌えもんが開始の合図と同時に解放される。

香澄が繰り出したのはアズマオウ。トサキントの進化系で、水中
での素早い動きと頭についた凶悪な角が特徴の萌えもんだ。水中に
特化した萌えもんのため、陸上に打ち上げてしまえば無力になるが、
そう簡単にはいくまい。

そしてこういう場合、まずは先手として――

「ふふん――お手並み拝見と行こうじゃない」

不敵に笑みを浮かべる香澄は予想通り、水中戦に持ち込む気のようだった。

「お、お？　おおお！」

対するシエルはといえば、久しぶりの水に期待しているようだった。

確かにここしばらくは水とは縁がない場所ばかりだったからな……。

しかし戦力として考えると、アズマオウの機動力にシエルが到底敵わないのは間違いない。いくら水タイプとはいえ、シエルは元々水中でも動きまわるタイプの萌えもんじゃない。アズマオウのような相手は同タイプといえど相性が悪いのだ。

「シエル、久しぶりの水だ！　楽しんで行こうぜ！」

「いいの、いいの？」

期待に目を輝かせるシエルにGOサインを出す。

すると、シエルは速攻で飛び込んだ。

さあ、本番はこれからだ。

どうやらこのジムは水中戦も想定しているようで、きつちりとモニターには水中の様子が映し出されている。

気泡を立たせながら潜るシエルと、自由自在に動きまわるアズマオウの姿が見える。

これが今の戦力差だ。絶対的不利な状態で勝つには、いくつかパターンがあるが……。

「さ、こっちから行くわよ。アズマオウ！」

どうやらどこかにスピーカーがつけられているのか、それとも俺たちの姿が見えるのか、アズマオウはカスミの指示に従ってそのスピードを上げていく。ともすれば、渦が起こってしまいそうな程に速い。

しかし俺の声やは届くのだろうか。

と、

「大丈夫よ。マイクとかモニターとか付けてあるから。ここはジム以外に競技用としても使ったりするからね。万全よ」

「ありがとよ」

ジムリーダーさんからお墨付きを貰った事だし、遠慮無く行くか。アズマオウは水中を縦横無尽に泳ぎ回っている。その速度は当然ながらシエルが捉えられる範疇を越えている。

だが、水中だからこそその動きは限られてくる。

地上では受ける事のない制限のために、自然とアズマオウの行動も予測しやすくなる。

つまり――

「つつきなさい、アズマオウ！」

角を使った愚直なまでの突進。相手より遥かに速さがあるアドバンテージを一番利用出来る攻撃方法といえば、それしか無い。

だからこそ、付け入る隙はある。

角でつつく。シンプルな攻撃だが、それに速さが加われば純粹な力として作用する。だが、逆にその攻撃は近付かなければ意味がなく、点の攻撃でしかない。

例えばどれだけ速く動いても、その一点だけは変わらない。

「シエル、殻に籠れ！」

俺の指示は無事に届いてくれたようだ。シエルは殻に籠ると、流れに乗って水中を移動していく。

シエルはまだ子供だ。いくら水の萌えもんといえど、元は海底で暮らす萌えもんだからこそ、水中での動きは緩慢になってしまう。だからこそ、アズマオウの起こした流れに乗る事が出来る。

そうになると、アズマオウも好奇心を逃す事になる。こうなれば持久戦だ。だが、それはこちらとて望む所じゃない。

俺が待ち望むのは――

「シエル、下方向、水鉄砲！」

俺の指示を聞き届けたシエルが画面に向かって僅かに殻を開く。

シェルが頷いたように見えた後、動きがあった。

「はんっ、水中でそんな技使うなんて焦れすぎでしょ、貴方。この勝負、いただくわ！」

突撃耐性に入るアズマオウ。向かう先は、シェルの僅かに開いた殻だ。

——かかった。

それこそが狙いだ。堅い殻に身を守られている獲物を狩るなら方法はふたつしかない。殻ごと破壊するか、殻の開いた瞬間を狙うか。香澄は良く仕掛けてくれたものだ。こうして一点で狙ってくれば、こちらも回避は出来る。

「い、たいけど、げっちゅー！」

シェルは僅かに身を動かし、アズマオウの一撃をかううじて交わす。が、それでもダメージは受けたようでモニターに表示されている体力が僅かに減った。

だが、全く動じずにシェルはアズマオウの身体を掴むのと同時に、最大出力で水鉄砲を発射した。元来からの水鉄砲の威力に加え、アズマオウのお陰で起こった水流も合わさり、シェルは一瞬にして水上へと踊り出る。だが、これで終わりじゃない。

更に高く。前列の観客席が見上げるほどの高さまでアズマオウと共に上昇する。

「な、何よあれ……」

香澄に告げるべく、更に指示を下す。

「シェル、アズマオウを放せ！ 次いで水鉄砲、上方向！」

上昇したシェルが飛び込んだのは通路のすぐ隣だった。僅かばかり流されたが、それでも通路の近くなのには変わりがない。

つまり、ここからなら狙える手段がある。

方法は一度試している。なら——

「更に、殻に籠れ！」

水流を利用して勢いをつけ、更に殻に籠ることでダメージを上乗せする。

「ぴぎゃっ」

「アズマオウ！」

アズマオウが悲鳴を上げるがもう遅い。スピードに乗ったシエルはアズマオウの上へ乗り、そのまま通路へと真っ直ぐに落ちていく。

「――1体目」

為す術なく叩き付けられるアズマオウ。水中戦に特化したが故に、何も出来ずに斃れ臥す。

「撃破――」

「げきはー」

ぴょん、と小さくジャンプしてシエルが通路へと降り立つ。後には、ぐつたりと倒れているアズマオウの姿のみ。モニターに映された体力も尽きてしまっている。

俺はシエルにサムズアップ。シエルもまた、「ぐゝ」と親指を立てて返してくれた。

「……嘘、何なのよ。あの戦い方――剛司の奴、とんでもないなんてレベルじゃないわよこれ」

香澄はアズマオウをボールに戻すと、次の萌えもんを繰り出すべくボールに手をかけた。

さあ、次は何が来るか……。

「はは、面白い試合しよるやんけ」

マサキは観客席から感嘆の声を漏らした。

シエルダーとアズマオウ。戦力としての差もそうだが、不利な水中での戦いでこうも見事に勝ちを攫っていくとはさすがに予想していなかった。

「予習がてらニビジムのも見ただけど……こりゃ面白いわ」

自分の家にいきなりやってきた珍妙なトレーナー。見に行くと約束した手前こうしてやってきたわけだが、なかなかどうしてマサキ

の予想を期待以上に裏切ってくれた。

「フアアル、か。今年の萌えもんリーグは荒れそうやな」

いち萌えもんファンとして。そして、萌えもん研究に携わる者としても、マサキは純粹に心が踊る。

「しかし香澄、昨日負けまくったせいかな、最初から容赦してないやんけ。あの布陣、四天王とかと戦う時のやん」

香澄が次に出した萌えもんを見て、マサキはため息をついた。

「お願いね。行け、カメール！」

次いで香澄が繰り出したのはカメール。ブルーでお馴染みゼニガメの進化系だ。

丸みを帯びた顔が成長して凛々しくなっており、より攻撃性を増した印象を受ける萌えもんである。

そしておそらくこのカメール、アズマオウとは違い陸上にも適応しているはずだ。一筋縄ではいかないだろう。

シエルの水中戦は先ほどのように期待は出来ない。カメールも水タイプだ。おそらくシエルよりかは動きは良いと予想出来る。

ここでリウとバトンタッチするか否か。

しばしの間思考し、

「一旦交代だ、シエル！」

「らじゃ！」

シエルを交代。代わりにリウを。

「ばっちり決めるわ」

「——リウ、気をつけろ。あのカメール、嫌な予感がする」

「……諒解」

俺の小声に頷いて、リウは前に出た。

「ミニリュウ、か。貴方珍しい萌えもん持ってるじゃないの」

「はっ、自慢の相棒だ」

しかし相手のカメールがどんな技を使うのかは未知数だ。水タイ

プの萌えもんは、総じて近いタイプの氷タイプの技を覚えられる。剛司のカブトのような技を出されれば、足場が少ないのを考えるとリウにとっては致命打になりかねない。

果たして。

「じゃ、今度はこっちが勝たせてもらうわ。カメール！」

俺の予想は当たった。

「冷凍ビーム！ やっちゃいなさい！」

やはり覚えていたか。

リウは迎え撃つ気満々のようだが、はっきり言って相手が悪すぎる。

弱点に加えてカメールというゼニガメの進化系だ。今の足場が悪い状態で相手をするには相性が悪すぎた。

「くらえーっ！」

カメールから冷凍ビームが繰り出される。瞬時にして凍結させる技は、水面とて例外ではないようだ。瞬時にして氷が張られ、まるでスケートのリングのようになっていく。

一直線に進む冷凍ビーム。回避出来る場所は……無い。

抜け出せる可能性は――

「イチかバチか、だな。納得してくれるかだが、背に腹は変えられないか」

俺はさっき前線してくれたもうひとりの相棒を手に取り、宣言する。

「リウ、シエルと交代だ！」

「えっ？」

「頼む、シエル！」

シエルはリウの前へと踊り出ると、冷凍ビームをその身に受けた。だが、水と氷タイプを持つシエルにはそれほどダメージは無いようだった。

「ちよっとどういふ事よ、私は！」

「――勝つためだ」

詰め寄ってきたリウにそれだけを告げる。

「……わかった」

わかってるさ。甘かったのは俺だ。戦う気で満ちていたリウを下げたのも俺の判断だ。

「もう少し、もう少しだけだ……挽回してみせるさ」

拳から血が出そうなほど握りしめる。

アズマオウにカメール。香澄の布陣を考えると、残り2体はより強力な萌えもんとなるだろう。この戦闘を無傷で切り抜けるくらいはしないと後に響く。

しかしさっきから頭がフル回転しているが、打開策はほとんど見い出せない。どれも綱渡り状態だ。

だが、やらなければならない。俺は、勝つためにここにいるのだから。

そんなファアルの後ろ姿を眺め、コンは呟いた。

「……御主人様」

後ろで見ていたからこそわかったから。

彼の戦いを――。

カメールは冷凍ビームの効果が薄いと判断するや、即座に肉弾戦に切り替えてきた。

「体当たりよ！ 進化した強さってのを見せてやりなさい！」

香澄の指示を受け、滑るように走るカメール。しかし亀は亀。その動きはやはり遅い。

周囲には冷気が満ちており、シエルのいる地点まで水面は凍り付いている。

「シエル、氷に乗れ！」

「らじゃ！」

通路から外れたシエルは氷の上へと。思った通り、シエルの体重では氷はビクともしない。

うつすらと冷気が漂う中、更に指示を下す。

「水鉄砲！」

立ち止まりこちらへと向きを変えたカメールに向かって水鉄砲を。当然、水タイプなのだから効果は薄い。

「はんっ、何よその苦し紛れ。カメール、冷凍ビーム！」

だがカメールは動きが遅い。加えて、氷の上に乗ってしまえば重さで割れてしまうだろう。即ち、遠距離攻撃しか方法が無い。

更に、冷凍ビームで水鉄砲を凍らせてしまえばシエルの動きを封じられると踏んだのだろう。もちろん、そんなのは剛士戦で学習済みだ。

「わわ、またー！」

シエルにしては二度目だろうが、慣れるようなもんでもないだろう。慌てる前に引っ込める。

「戻れ、シエル！ 更に交代、リウを！」

これで勝つ布陣は整った。ありがとうよ、香澄。狙い通りだ。

「その自慢の相棒、やっちゃうわよ！」

香澄は再び冷凍ビーム。こちらへと向き直ったカメールはリウへと向かって発射する。

当たれば負けは必須。

なら簡単だ。当たらなければいい。

オニスズメと同じように上へと逃げれば第二射でやられる。かといって、動かなければやられる。なら、自分で道を作ればいい。

予め来る攻撃がわかっているのなら、回避は容易い。

「リウ！」

俺は真横を指差し、

「叩きつけろ！」

振り下ろした。

リウも意図を汲みとってくれたのか、通路から水へ——いや、氷となった水面へと跳び、氷を叩き割った。更に、

「まだまだ！ 叩きつけろ！」

今度はカメールへと。

空中で体勢を立て直し、砕け散った氷をカメールへと向かって弾き飛ばす！

さしものカメールもこれには対処出来なかったらしい。

「あーもー、カメール、殻に籠もりなさい！」

殻にこもってやり過ぐすカメールを他所に、リウはさっき凍った水鉄砲の上に着地する。

隙は出来た。一瞬だが、見逃すわけにはいかない。

「叩きつける！」

今度はこっちの番だ。

自慢の身軽さで跳んだリウは一瞬にしてカメールとの距離をつめ、

「はあっ！」

俺の指示通りに、真横へと叩きつけた。

「は？」

これには香澄も目が点になった。

何しろ、本来誰もが使う「叩きつける」という技は、そのまま地面に叩きつける使い方がほとんどだからだ。

だが、カメールが殻に籠っている以上、一撃では沈まないのは予想出来た。加えて、相手はこちらを封じる術を持っている。

なら、間髪入れずに追撃しなければこちらが負けてしまう。

「リウ！」

「諒解！」

更にリウは跳ぶ。通常ならば追撃は不可能だった。何故ならば、通路以外は水面だからだ。だが、カメールの冷凍ビームの余波によって凍りついた水面は違う。一度だけなら――乗るのは無理でも追撃としてならば足場に出来る。

リウの脚力によって氷が割れる。

「2体目」

手を真横に勢い良く振り切る。

同時、カメールに肉薄したリウはカメールと壁へと向かって叩き

つけた。

「撃破」

叩きつけると更にプラスのダメージ。これでカメールは、
「なんと……カメールの体力、ゼロになりました……」

撃沈する。

ばしゃん、と水しぶきを上げて着水するリウ。しばらくしてから
水面に上がったリウは寒さで震えていた。

だが、そんな事よりも――

「素晴らしい――濡れた服が素肌に張り付いて実に」

「そのまま逝けえっ！」

「あらぬ！」

俺は扉とキスをした。

しかし、これで何とか半分だ。シエルの体力も少ないし、リウも
苦手な相手が多くなるだろう。

後ひとり、コンがいるが……現時点では何とも言えない。そもそも、
戦えるのかどうかすらわからない。

状況はどう考えても、不利だった。

倒れたカメールを戻して香澄は聞こえないように嘆息した。
自分の萌えもんぶっ飛ばされる姿を見ながら、思う。

「ほんっと、負けたくない！」

次のボールを取り出し、香澄は心を踊らせながら投げる。

さあ、次はどんな戦いが出来るのだろうか。

香澄は俺を見て楽しそうに笑っていた。

「くそ、笑うかよ、ここで」

だが、面白いのは確かだ。

これだけ不利な状況になってもまだ”諦める”なんてのを塵ひとつ
の可能性すら考えていない俺も大概なんだろう。

いいぜ、やってやる。弱点だらけのこの状況、ひっくり返してやるさ。

「ふふん、次行くわよ！」

言って、香澄が投げたボールから出てきたのは、

「行きなさい、ニヨロボン！」

ちょうどお腹の辺りに螺旋を描いたような服を纏い、手の先にはグローブのようなプロテクターをつけた萌えもん。水タイプでも屈指の格闘戦向きのニヨロボンだった。

ニヨロボンは両手拳を正面で打ちつけて、強敵の到来を楽しみにしているようだ。既にやる気充分と言った所。

相手が相手なだけにシエルでは分が悪すぎる。ここはこちらもインファ이터を出すしか選択肢は無い。

「続投、いけるか？」

「当然、誰に言ってるのよ」

「だな。頼むぜ」

「任せない。負けるわけにはいかないんだから！」

頼もしいもんだ。

だが、ニヨロボンはニヨロモ、そしてニヨロゾから更に進化した萌えもんだ。その強さ、技ともに全てこちらを上回っているだろう。そして恐れるべきはその格闘戦だ。おそらくこちらに対しての決定打となる技を持っているに違いない。まともに打ち合えばこちらの負けは必須だ。

正面からは愚策。正攻法で勝てる相手でもない、か。

「全力でいくわよ、ニヨロボン！ 冷凍パンチ！」

ニヨロボンはその大柄な身体からは想像出来ない俊敏さでリウとの距離を詰める。

振りかぶった拳からは冷氣が発せられており、的確にこちらの弱点をついてきている。

「リウ、正面から当たるなよ！ 回避、ついで電磁波！」

「わかってる！」

ニョロボンの体軀は小柄なりウから見れば威圧感と合わさって山のようになっているだろう。

だが持ち前の負けん気の強さで振じ伏せてくれているようだ。リウは後ろへと跳び、電磁波を放つ。

が、それだけだった。

例え電磁波が効いていたとしても、相手はこちらより遥かに格上なのだ。格闘戦を得意とする萌えもんの本領発揮はここからだ。振じ伏せなさい！」

まさしく重戦車だった。電磁波によって麻痺寸前の身体を無理矢理動かし、リウ目がけて渾身の力で拳を振り下ろしたのだ。

これにはさしものリウも驚いたようだった。

「くっ、この——！」

だがこちらに打開策があるわけでもない。咄嗟にガードしたリウだったが、勢いは殺せず後方へと吹っ飛んでいく。

「リウ！」

何とか体勢を立て直したリウは俺の近くで着地したが、ガードした部分は冷気を発していた。後ろに跳んでいたのが幸いしてかクリーンヒットではないが、それでもきつい一発を貰ったのは間違いない。

モニターに表示されるリウの体力もかなり減っている。

「大丈夫、まだやれる！」

リウは真正面を向いて告げる。

「私は勝つって言った。勝ち続けて強くなるの。だから、相手がどんなのだろうと、負けない、負けてたまるもんか」

それはまるで、自分に言い聞かせているようだった。

ともすれば、震えだしそうな膝を鼓舞するかのように。

「——リウさん」

コンはそんなリウの背中をじっと見つめている。

「……イチかバチか、乗るか？」

未だに光明は見出せていない。だが、それでも勝たねばならない。

万全を期して挑めないのならば、分の悪い賭けでも打つしか方法がない。当たれば逆転も可能だが――

「それやれば勝てるの？」

「勝てるかもしれない、だな。お前だってわかってるんだろ、相手の強さを」

「――まあね」

でも、と。

「あの手の相手ならまだ大丈夫よ。少しは慣れてるから」

一瞬だけこちらを見たリウは、覚悟を決めた瞳だった。

それはあの時――マサラで出会った時に見た瞳と同じだった。

強敵に打ち破れ、壁にぶち当たり――それでも尚負けたくない。立ち上がりたいと思っている強い目だ。

おーけー、上等だ。

「あいつに肉薄してくれ。一撃も貰わずに、だ。たぶん――」

「一発かわせば潜り込める、でしょ？」

「ああ」

「わかった。やってみる。……ううん、やってみせる」

リウが何のために強くなりたいと思っているのか。

俺にはまだわからない。リウの強くなりたいという願いの根源を俺はまだ知らない。

ただ、そんな俺でもわかる。ニヨロボンは、リウが超えるべき壁のひとつなのだ。

だからこそ、震えている身体を抑えつけて立つ。やがては自分が倒したい、乗り越えるべき存在へと追いつくために。

「作戦会議は終わった？」

香澄は腕を組んで真っ直ぐに俺を見ていた。

自信満々に。今度こそ撃ち砕く。そう意思を込めて。

「ああ、お陰様でな！」

リウはまだ動ける。勝つ意思がまだ灯っているのなら、どうにかするのが俺の戦いだ。

ニョロボンの攻撃は短調だ。おそらく香澄もそれをわかっているだろう。

だが、わかっていて押し通している。不利な足場を利用しての正面からの問答無用の一撃。回避する足場が限られている一本道の通路であるならば、これほどの驚異はなかなか無い。

加えて、格闘戦に秀でたニョロボンの突進力もある。並大抵の萌えもんでは、ニョロボンが立ち塞がるだけで萎縮してしまいうだろう。それほどのプレッシャーを持っている。

逃げたら勝てない。

なら、こちらに向かうだけだ。後退出来ないなら、前に進むしかない。元より、後退する気も無い。

「リウ、竜巻だ！ 四方に分散！ 集合！」

「諒解！」

剛司戦のプテラと同じ要領で竜巻を生み出す。都合4本。小規模だが、萌えもんを持ち上げるだけの力は持っている。

更に、

「前進！ 突っ込め！」

通路を挟む形で2本。更にニョロボンの後方へと大きく回る形で2本の竜巻が移動する。

「竜巻、か……当たれば厄介だけど」

香澄は即座に頭の中で判断する。

竜巻の威力。相手の作戦。そしてこちらの戦力。

「ま、結局はひとつしかないのよね」

香澄は自嘲の笑みを浮かべ、ニョロボンにもう一度冷凍パンチを命じる。

例え竜巻が来ようと地震が起ころうと雷が落ちようと、香澄の戦略は変わらない。

何故なら――

「私のポリシーは水タイプの萌えもんで攻めて攻めて……攻めまくる事なんだから！」

香澄の指示を受け、ニョロボンは突進する。

拳を振り上げ、向かい来るリウを今度こそ仕留めんと裂帛の視線を眼前の敵へと注いでいる。

だが、リウも止まらない。

竜巻を従えて、立ち塞がる壁へと真っ直ぐに立ち向かう。

「リウ、竜巻を先行！ 挟み込め！」

リウと並走していた竜巻をまずは当てる。

だが、この程度ではニョロボンの移動をかうじて抑えるだけだ。初めに当てた電磁波が効いているだろうが、それでも多少大きい岩にぶち当たった程度でしかないようだった。

「残二、竜巻を合流！」

そして背後へと回りこんだ竜巻をひとつにさせる。この時点で、リウは体力をかなり消耗してしまっている。これ以上の無茶は出来ない。

だが、まだだ。こんなのはまだ準備段階だ。

本領はただひとつ。イチかバチかの賭けは次の瞬間にこそかかっている。

「頼むぜ、リウ」

信頼する相棒の背に、俺は小さく呟く。

果たして。俺の言葉は届いたのだろうか。

「ニョロボン、決めちゃいなさい！」

竜巻で多少勢いが削がれたものの、それでも立ち止まらずニョロボンはリウへと迫る。

冷気を纏った拳が振り下ろされる。

当たれば負け。小柄なリウは弱点属性と相まって一撃で敗北となる。

だが、俺の信じる相棒は――

俺が信じたパートナーは――

「私は、負けない……!!」

リウが身を振る。あたかもそれは何度も何度も繰り返された動作のようだった。

ずっとずっと——それこそ何千何万と繰り返された愚直なまでの練習のように。

ニョロボンの拳は、リウの身体を避けるかのように外れていった。「っ、やった!」

だけど、終わりじゃない。

この瞬間を。

ニョロボンの懷に潜り込める瞬間を待っていたのだから。

「リウ!」

電磁波もほとんど効果が見られない。竜巻も振じ伏せるニョロボンに、物理攻撃が効くとはとてもじゃないが思えない。

なら、物理じゃないダメージを与えればいい。

即ち、

「龍の息吹!」

こちらにも、その無防備な土手っ腹に切り札を切らせてもらおう!

「な、ここで大技!?」

驚く香澄。だがまだだ。

何のために竜巻を背後へ回したと思っている。

「リウ、上だ!」

龍の息吹によって浮いた上体のニョロボンを後ろから迫っていた竜巻が搔っ攫う。

すぐに離脱していたリウは後退し、俺の指示通りに上を向く。

そして竜巻に飲み込まれたニョロボンは、竜巻の性質に従って上へ上へと上昇し、やがては解き放たれる。

その瞬間こそ、

「格好の狙い目って事だ!」

そう、ニョロボンは接近戦に重きを置いた萌えもんだ。それ故にウェイトもあり、だからこそ空中で咄嗟に動作が取れない。

俺は真っ直ぐに腕を上へと掲げ、告げる。

「龍の息吹！」

リウによって更に追撃を食らったニョロボンは、空中で黒い花火を咲かせる。

「――3体目」

ぽつりと。リウが小さく、だがその場にいた誰もが聞き取れる声で告げる。

「撃破だ！」

俺の宣言と共に、ニョロボンは倒れ伏した。

イワークですら一撃で沈めた大技を二発。それがニョロボンに対して支払った代償だった。

会場がどよめいた。

その響動きの中心にいる男を見て、マサキは笑みを隠せなかった。たった2体。手持ちのロコンはおそらく香澄にとって敵にすらなるまい。

だからこそ、会場内にいた誰もが驚いていた。

ハナダシティジムリーダー。香澄が普段挑戦者を相手に使う萌えもんとは遥かに強さが違うアズマオウ、カメール、そしてニョロボンをただ一体の敗北すらなく退けてみせたのだから。

しかし、

「さて、いよいよ最後の一体やけど……倒せるか、お前に」

なあ、ファアル。

盛り上がりを見せる会場の中、マサキは過去に見た光景を思い出す。

あの、まさしく切り札ともいえる萌えもんの存在を。

香澄がニョロボンをボールに戻すのを見送ってから、リウを下げ

させた。

ここまで何とか3体を撃破したが、こちらは満身創痍の状態だ。シエルもリウも、後1発貫えば落ちる。

それだけのダメージを受けてしまっている。

最後の1体。おそらく香澄にとってジョーカーとなるべき萌えもんに違いはない。

ともすればコンに頼ってしまいそうな自分に慌てて首を降る。コンは戦えない。もし戦おうとしてくれても、極度の緊張が支配するこの場所ではコンの精神が焼き切れてしまう。

リウ、シエル。こちらが使える萌えもんは2体だけだと考える方がいい。

弱音は吐かない。見せるわけにもいかない。

俺はトレーナーだ。だから、最後まで勝利を信じて、どれだけ確率が低かろうと手繰り寄せなければいけない。

「……御主人様」

コンに笑みを返し、頭を撫でる。

「勝つさ。見てろよ」

拳を握りしめる。気がつけば、汗でべっとりしていた。やれやれだ。

俺は気合を入れるために掌に拳を打ち付ける。

「よし、行くぜ」

こくりと頷いてくれるリウ。シエルもまた、ボールの中で頷いてくれたようだった。

「……正直、ここまでやるなんて思ってたわ」

そんな中、香澄が告げる。

最後のボールを持って。

「だけど」

いよいよ、ハナダシティジム、最後の戦いが始まる。

「勝つのは私よ！ 行きなさい、スターミー！」

香澄の切り札を持って。

ボールから出たスターミーはヒラヒラと服をはためかせ、音も無く着地した。

その自信に満ち溢れた笑みに、敗北の二文字は無い。

「ここに来てスターミーか」

スターミー。ヒトデマンから進化する萌えもんで、水とエスパータップを持つ萌えもんだ。

先程のニヨロボンが格闘戦に秀でていたのならば、スターミーは逆に中・遠距離を得意としている。加えて、香澄の育てた相棒だ。一癖も二癖もあるに違いない。

勝機があるとすれば、リウの近接戦闘なわけだが……そう簡単に距離を詰めさせてくれるのかどうか。

「――頼むぜ、シエル！」

時が待ってくれるわけでもない。

俺はシエルを出して様子を見る事にした。

「まだまだいけるー」

シエルも疲労が見え隠れしているが、それでも気力はばっちりあるようだった。

まずは様子見といきたいところだが、はっきり言ってこちらにも余裕はない。

――速攻しかない。

スターミーとの距離はかなり開いている。この距離を一気につめるのは不可能だ。だが、水に潜ってもスターミーの方が動きは速いはず。

真正面から挑むのは愚策。ならば、

「シエル、水鉄砲！ 飛べ！」

「りょーか――お、およよ？」

だが、それも終わる。

都合、おおよそ15メートル。その距離を、なんら詰める事無くスターミーは攻撃してみた。

「ふふ、サイコキネシス」

スターミーの両目が怪しく光る。

「貴方は確かに強い。正直、並大抵のトレーナーじゃない。でもね、何度だっていつてあげる」

香澄が真っ直ぐに、会場中に宣言するかのように右手を挙げる。

「わわ、うごけないー」

「シェル！」

まさか、サイコネシスで動きを封じられている？

シェルはまるで十字架に貼り付けられたかのように上空へと浮遊する。水鉄砲を出して抵抗するも、同じ水タイプのスターミーにダメージはほとんど無い。

「私は香澄。ハナダステイジムリーダーの香澄よ！ 貴方が全力で挑んでくるのなら」

そして、香澄は指示と共に掲げた右手を振り下ろす。

「全力で撃ち砕く！ それが私の戦い方よ！」

同時、閃光が走る。

「み、みぎゃああああああああっ！」

そのあまりの光量に思わず腕で目を覆ってしまった。

会場が地響きで揺れる。

「シェル！ おい、大丈夫か！」

閃光はすぐに納まったが、未だに定まらない視界で呼びかけると、まるで答えるかのようにしてゆっくりとシェルは降下してきた。

「じ、じびれだ〜」

ぷすぷすと煙を上げながら目を回している。

シェル、撃破。

激戦を戦い抜いてくれたシェルは、ここでリタイアとなった。

ボールに戻し、改めてスターミーを見やる。

立ち位置も何も変わっていない。シェルの水鉄砲で多少動いたただけで、数センチ程度の変化しかない。

「おまけに雷、かよ」

電気タイプの技でも最強クラスに属する技だ。それをいとも容易

く使用してみせた。おまけに、サイコキネシスで動きを封じた上での攻撃なのだから、こちらも回避しようがない。

まさしく最後を飾るに相応しい萌えもんだ。さっきのニヨロボンが可愛く見えてくる強さではないか。

「勝機はある？」

「……」

「だと思った」

はぁ、とリウは嘆息し、前に出る。

シエルの次は自分だと。

「あの――」

「私はね」

さっきの光景を見たからであろう。コンがリウを制止しようとしたのを遮り、リウは告げた。

「強くなりたいの。だから立ち止まりたくない。例え相手がどれだけ強くて、高い壁だったとしても」

果たしてそれは後悔だろうか。

リウと俺は違う。俺は挫折しかけ下を向いていたが、リウはそれでも何度も這い上がった。どれだけ抑えつけられても上を向き続けた。

だからこそ、本質的にリウは強い。単純な強さではなく、戦う事においての強さを持っている。

「私は、立ち向かい続ける。そりゃ悔しいけど、負けるくらいはいい。でも、自分にだけは負けたくないから」

そう言っ、リウは通路まで歩き、立ち止まった。

今から倒す。

無言で相手に告げながら。

「リウさん……」

「あいつ、強いだろ？」

「……はい」

でも、と。

コンは自分に足りないを知っている。リウの持っている強さこそ、自分が持っていない強さなのだとわかっている。

「いいんだ、コン」

「ふえっ？」

「強さ」なんての人それぞれだ。何が一番強かったのじゃないんだ。大切なのは、これだけは曲げられない。これだけは曲げちゃいけない。そう思えるものがあるって事だ」

俺もそうだ。ずっとくすぶり続けていた想い。幼い頃に夢見ていた背中を目指す夢だけは捨てたくなかった。だから、後生大事にこんな歳まで抱え込んでしまっている。

だが、それでいいと思う。

それぞれに、それぞれの想いがあるように。

俺たちに、俺たちの夢があるように。

絶対に負けられない戦いがあるのだから。

「コンにもあると思うぜ？ 見つけるのは、ちと難しいかもだけだな」

はは、と笑い、前を向く。

さあ、行くぜ相棒。

「……しかし、どうしたもんか」

厄介なのはやはりサイコネシスだ。あの技でシエルのように動きを封じられてしまっただけはこちらはとうしようもない。

しかも、まだ相手の手の内を完全に見れていない。サイコネシスに雷。どちらも必殺の一撃なのには変わらないが、まだ奥の手は持っているはずだ。間違いなく水タイプの技はあるとして……残りひとつは何だ。

もし。

もしそれが氷タイプの技ならば――

リウは満身創痍だ。カメールにニョロボン、共に弱点をつかれる戦いを強いられている。

相手の動きを封じた上で、必殺の一撃を見舞う。単純な戦法だが、

破れなければ敗北する。

だが、逆を言ってしまうえば、相手にこちらの攻撃を封じる手段は無いという事でもある。サイコキネシスも万能ではあるまい。何かしらの穴はあるはずだが。

見極められるか、俺に。

スターミーの一挙手一投足を見落とさないようにしなければなるまい。同時に、リウにどう立ちまわってもらおうか。

「来ないならこっちから行くわよ、ファアル！」

先手を取られるのはまずい。

「リウ、下方向、叩きつけろ！」

同時に、リウは跳ぶ。跳躍による移動。

サイコキネシスで見極めたいのはふたつ。

ひとつは、効果がどこまでの範囲に及ぶのか。これがもし俺の予想通りなら、勝機はある。

そしてもうひとつ。サイコキネシスが発動出来るタイミングだ。

こじ開けるための穴はどこかに必ずあるはずだ……！

「スターミー！」

一気に距離を詰めるリウに向かって、

「冷凍ビーム！」

やはりか！

通路は真っ直ぐだ。カメールのような回避の方法も難しい。

加えて、こちらが回避すればサイコキネシスの良い的になるだろう。

「――距離、か？」

ただ単に香澄がこちらをサイコキネシス以外の技で迎え撃ったという可能性もある。

だが、シエルより距離のあったリウに対して弱点を攻めるのを優先したというのは何か理由があると思いたい。

次にひとつ。

「リウ、下方向、叩きつけろ！ 次いで龍の息吹！」

「諒解！」

冷凍ビームを回避し、上空からスターミーへと向かって必殺の息吹を吹き出すリウ。

咄嗟に判断したスターミーは、しかしタイミングが合わなかったのか身を動かして回避し、水中へと着水した。

これでひとつ。

おそらく、ふたつの技を同時には繰り出せない。距離が近付いたのにも関わらずサイコキネシスが放てなかったという事は、技の最中は無防備になるのだろう。

加えて、

「リウ、電磁波だ！」

水中へと向かって電磁波を放つ。

地上とは違い、水中は伝播する。スターミーも無事ではいるまい。

「スターミー、水の波動！」

水中よりの奇襲。

電磁波を浴びたスターミーはそれでも止まらない。

突如として水面が泡だったかと思うと、小さな渦となって襲い来る。

「このっ！」

水中に落ちればこちらに勝ち目はない。

リウは後ろへと跳んで何とか回避すると、水から出てきたスターミーと再び向かい合った。

「これで揃ったか」

ひとつ。サイコキネシスは同時に発動出来ない。

ふたつ。スターミーの覚えている技は、サイコキネシス、雷、冷凍ビーム、水の波動の4つ。

そして不確定だが、サイコキネシスには距離がある。

だが、リウは近接戦闘型だ。さっきは接近しかけたが、今度も上手くは行くまい。

スターミーも電磁波による痺れがあるのか、動きが多少ぎこちな

く見えるが、それだけだ。

未だに与えられたダメージはシェルの水鉄砲のみ。ダメージなどほとんど無いと言っている。

「それで打開策、見つかったの？」

「――もう少しだ」

リウの息が上がりかけている。

香澄にも見抜いたのだろう。指を立てて宣言した。

「後1分よ。それでそのミニリュウ、撃破してあげるわ！」

得意気に告げる香澄に内心かき乱されるが、俺が慌てるわけにはいかない。

むしろ、今にもスターミーに飛びかかりそうになっているリウを制止しなくちゃいけない。

「落ち着けよ、相手の作戦だから」

「――そうしたいけど」

リウの体が震えている。

怒りを堪えているんだろう。元々プライドが高いから仕方ないのかもしれないが……ここで誘いに乗れば敗北は必須だ。

頼む、耐えてくれ。

しかし俺の願いも虚しく、

「所詮どれだけ頑張ってもミニリュウはミニリュウなのよ！ 私のスターミーの敵じゃないって事、教えてあげる！」

「この――！」

キレた。

リウは香澄の挑発に見事に乗り、スターミーへと突進する。

あの馬鹿が！

「リウ、待て！」

「待たない！」

そうして、リウはまんまとスターミーの”距離”へと足を踏み入れてしまう。

最も使われたくない技を香澄は告げる。

「サイコキネシス」

スターミーの目が光る。

やはり視線も重要だったか。

だが、今わかったとてもう遅い。

「くっ、この！」

リウは藻掻くも、身体はぴくりとも動かない。

そのまま上空へと持ち上げられていく。

「マズい……」

これではシエルの二の舞だ。

だが、それでも完全にこちらの動きを阻害するわけじゃない。まだ口は動く。

なら！

「リウ、龍の息吹！」

こちらを視線で射抜いているのなら、相手だって動けないのと同じだ。

「い、けええええええ！」

リウの口から敵を倒さんを放射される。

だが、それでもスターミーは動こうとしなかった。

「スターミー」

例え直撃しようとも、リウを空中に張り付けにしている。

それはまるで罪を犯した者を裁く裁判官のように。

香澄は冷酷に判決を下した。

「冷凍ビーム」

サイコキネシスの効力が切れる。

そして放たれた冷凍ビームは真っ直ぐにリウを射抜き――

「ああああああ――っ！」

「リウ！」

こちらの闘争心を根こそぎ凍てつかせるかのように、無慈悲な現実を突きつけた。

「ミニリユウ、撃破よ」

香澄の言葉と共にモニターに表示されるリウの体力もゼロへと。慌てて駆け寄ると、リウの意識はまだあった。

いや、それ以上に、

「……まだ、まだやれる」

立ち上がろうとしていた。

冷え切った身体で。戦うだけの力もう残っていないというのに。それでも、リウはまだ立ち上がろうとしていた。

目の前の壁を倒すために。

「リウ、もういいんだ」

これ以上の無理はさせられない。

残りは戦いを恐怖しているコンのみ。ジム戦に連れて行く事で少しでも慣れてもらおうかと思ったが、さすがに無理だ。

シエルもリウも戦闘不能。

悲しいが、これが現実だ。

「嫌、よ……絶対に、負けないんだから……わたし、は」

身体を抱えていた俺を押しつけようとしているが、普段の力なんてどこにもない。どこまでもか弱い力だった。

——棄権しかない。

俯き、俺が視線を上げたその時だった。

「……」

次は自分だと。

俺に背中を向けて、コンが立っていた。

「コン、お前……」

見れば、コンの身体は震えている。断じて、恐怖に打ち勝ったわけじゃない。

だけど、

「は？ 貴方それロコンじゃない。ほんと何で連れてきたのかわかんないけどさ、ひとつ簡単な事教えてあげようか？」

呆れた香澄の声、そして会場から溢れ出す失笑。

当然だ。香澄に言われなくても、誰にだってわかる自然の摂理だ。

そんなのは誰にだってわかる。
それでも、

「いい？ 炎タイプの萌えもんは水タイプの萌えもんには勝てないの。だってそうでしょ？ 火は水で消えるんだから」
失望の眼差しと悪意がざわめき出した会場の中で。

それら全てが自分へと向けられている中で。

コンは震える身体で、しかし俯く事無く真っ直ぐに前を向いていた。

いや、戦っていた。

「コン、あんた……」

突き刺さる視線でも、目の前にいる強敵とでもなく。

足が竦み、震えだし、逃げ出したいと思う自分自身と戦っていた。
一歩も退かずに、逃げて隠れ続けていた臆病だった自分と。

例え誰かに馬鹿にされようと。

例え誰かに認められなくても。

俺が——仲間でありトレーナーである俺が信じてやらないで、誰が信じるんだ。誰が、コンと一緒に歩もうと——戦おうというのだ。

「うるせえ、黙ってる！」

俺の声が会場中に響く。

ビクリと身を竦ませるコンの背中に、俺はたった一言告げる。

コンが一番欲しい言葉を。

コンの背中を押す言葉を。

「——勝つぞ」

「はいっ！」

叩き折れるなら折ってみろ。

叩き伏せられるなら叩き伏せてみろ。

俺たちが教えてやるよ。

「少し休んでくれ、リウ」

「……わかった」

俺と一緒に下がったりリウは、立ち止まりコンへと向かって、

「絶対に勝ちなさいよ、コン」

「勝ちます、必ず」

リウナリのエールを送った。

コンの声に震えはない。

これならいける。

シエルとリウが見出してくれたスターミーの弱点。

そして何よりも、勝てる策がひとつある。

「コン、火炎放射!」

「はい!」

大きく息を吸込み、コンは最大出力で火を吹き出す。急激な温度差で火炎放射の周囲が陽炎の如く揺れ動く。

だが、香澄は意に介したわけでもない。

「スターミー、水の波動!」

即座に火を打ち消した。

だが、シエルの使用する水鉄砲のように単純な威力はそれほど無いようだった。火炎放射を浴びて蒸発した水が、冷凍ビームの余波で冷え、湯気となって立ち込め始める。

決着を付けるぞ、香澄。

「怯むなよ、コン! まだまだ火炎放射!」

だが、火炎放射はこちらの決め手ではない。

噛み付くとメガトンパンチ。勝負を決めるのはこれらふたつの技になるだろう。特に、”噛み付く”はエスパertypeに効果があるが、狙うには距離をつめる必要がある。

「だから、無駄だって言ってるでしょ!」

次々と消されていく火炎放射。

だが、リウの電磁波の影響か、何度か打ち消せずにスターミーは被弾していき、ジワジワと削られていく。

立ち込める湯気。熱気を持った空気が俺の場所まで流れてくる。

「この、鬱陶しい! スターミー、サイコネシス!」

来たか。

「は、わわ！ う、動けないです！」

痺れを切らした香澄が虎の子を使用する。

浮き上がっていくコン。

視界が悪くなりつつある中で、未だサイコネシスは健在だ。

だが、

「……狙い通りだ」

コンにもう一度指示を下す。

「コン！ 火炎放射を最大出力！」

身体の動きが封じられても、吐息のように噴射する技が出せるのはわかつている。

スターミーの使用するサイコネシスはあくまでも対象の身動きを封じるためのものだ。何故なら、ハナダシティジムのフィールドはプールで、サイコネシスによって操るものなど何もないからだ。しかも唯一操れる固形物である氷は、コンの放った火炎放射の熱気によって既に溶けているし、よしんば残っていたとしてもコンに近付く前に溶かされてしまう。

即ち、スターミーの――いや、香澄の選択肢などひとつしかない。サイコネシスの後に、水の波動。

火は水に勝てない。その一点こそ、香澄が勝利を確信している部分だ。

加えて、コンが勝つにはスターミーに肉薄しなければならない。

絶対に封じられた距離。

その距離をこじ開けるには、無理矢理突き進むか、異表を突く他ない。

香住は勝利を確信している。その証拠に、腕を真っ直ぐに掲げ、今度こそ勝利を決めるために必殺の指示を下す。

「スターミー、水の波動！ 火が水に勝てないって事、思い知らせてやりなさい！」

放たれる必殺の一撃。

高熱の火と水とがぶつかりあり、猛烈な湯気を発生させながらせ

めぎ合う。

だが、それでもスターミーの勢いが強い。

そもそもコンの火炎放射は息だ。長時間放てる技ではない。

狭まる距離。

一瞬にして撃ち破れた均衡はコンを呑み込むべくひた走る。

「コン！」

だから、俺は告げる。

「自分自身に負けるな！」

しかし無情にも、スターミーの放った水は火炎放射もろともコンを呑み込んだ。

熱せられ蒸発した水が瞬時にして冷やされ、湯気となって上空に立ち込める。

即ちそれが、コンが撃ち負けた証でもあった。

見る間に減っていくコンの体力を見、香澄は高らかに宣言する。

「これでわかったでしょ？ タイプって重要なもの。水タイプに勝ちたいなら炎タイプじゃなくて、電気とか草とかにするのね。ま、それでも私は勝つけどね！」

事実上の勝利宣言だった。

会場の誰もが香澄の勝利を疑わなかった。スターミーでさえ、警戒と解いている。

だが。

俺だけは違った。

まさかこうまで作戦通りに展開してくれるとは思わなかった。

「ははは！ 確かにその通りだ。火は水で消える。ガキでもわかる当たり前の事だよなあ！」

だから俺は教えてやる。

単純に。

そんな道理を持って壁となって立ち塞がる奴に。

「――だがな、ひとつ教えてやるよ、水使い」

思い描いた自分になるために。

決意を持って自分と戦い続けるという意志を。

自分の足で立ち、自分の意志で向かい合う勇気を。
遙か遠い強さを追い続ける強さを。

「小学生でも学ぶ勉強だ。良く覚えておけ」
真っ直ぐに。

上を目指し続ける誇りを。

そいつは俺の十八番だ、香澄。

頂点を指差し、告げてやる。

「蒸発」――火が水を消すんだよ」

「なっ――」

上空から湯気を突き破る。

スターミーが慌ててコンへと向く。

だが――

「遅え、噛み付け！」

会心の一撃。

だが、まだ終わりじゃない。これではスターミーは沈まない。

即座に気を取り直した香澄がいる。

「くっ、スターミー、水の波動！」

「コン！」

コンがその場で身体を撚る。

スターミーは動かない。いや、動けない。

鉄壁だった戦略。

絶対に負けないはずだった布陣。

それらが崩れ去り、更にリウの電磁波によって身体も麻痺状態に
近い。

更に、

「――まさか、怯んで!？」

奇襲による一撃は怯ませるには充分だ。

「メガトン」

コンは更に一歩踏み出す。

内なる自分を倒すために。

恐怖に震える自分を目覚めさせるために。

渾身の力で。

「パンチだあああっ！」

「アアアアアアアア——！」

スターミーを殴り飛ばした。

腰を捻り、踏み込んだ理想とも言える姿勢はまるでコンの決意をそのまま乗せたかのように、凄まじい威力だった。

「スターミー！」

そしてスターミーはそのまま壁へと突き刺さり、

「——4体目」

「撃破、ですっ！」

俺とコンの宣言が、バトルの終了を告げた。



試合の後、俺と香澄は互いに向かい合っていた。

静寂に包まれる会場の中、香澄は右手を差し出した。俺はその右

手を握り返す。

「良いバトルだったわ」

「同感だ。さすがジムリーダー」

そうして俺たちは笑い合い、あっさりと手を離した。

「じー」

少しだけ名残り惜しかったが、どうにも背中中の視線がムズムズしたので考えない事にする。

「で、これが約束のバッジよ」

手渡されたバッジは、水のように綺麗に澄んだ色をしていた。

剛司のグレーバッジが岩を連想させるなら、まさしく水を連想さ

せるバッジだ。

「バッジを集めてるって事は萌えもんリーグを目指すんでしょ？」

「まあな」

その頂に、乗り越えたい男がいるのだから。

俺の夢は、その場所にこそあるのだから。

「期待してるわ。貴方がいれば今年の萌えもんリーグは面白くなりそうだから」

任せとけ。

そう言っただけはもう一度香澄と握手を交わし、背を向ける。

「さ、行こうぜ」

「はいっ」

元氣よく頷いたコンと、少し回復したのか自力で立ち上がったリウ。

リウは俺の手元をじっと見ていたが、やがて手を差し出してきた。

「バッジ、貸して」

「ん？ ああ」

リウにバッジを手渡す。

またグレーバッジのように付けるのだろうか、と思っていたらコンへと向かってバッジを差し出した。

「えっと」

戸惑うコンに恥ずかしいのかそっぽを向きながら、

「今回、勝てたのはあんたのお陰だしね。だから、あんたが付けなさい」

「は、はあ……」

コンは俺を一度見上げ、リウの様子に苦笑しながら俺が頷きを返すと恐る恐るといった様子でバッジを受け取り、胸につけた。

炎タイプの萌えもんに澄んだ色のブルーバッジ。

アンバランスに見えるが、それはまるでコンが一步進めたのを称えるかのようにも見えた。

「さ、行くか」

まずは萌えもんセンターで傷ついた身体を癒して。そして、次のジムを目指す。

だがそれよりも。まずは今の勝利に酔いしれよう。もっと強くなるために。

いつか、自分自身にも誇れる強さを手に入れるために。そのために、俺たちは前に進む。

「あの、リウさん！」

「何よ」

「ありがとうございます！」

「……ふんっ」

仲間たちと主に。一歩ずつ。

「はやくなおしてー」

あー、すまん、シエル。

【第九話】 クチバ——豪華客船と似非外人（前書き）

いろいろと脚色してあります。特に船長とか「この人誰？」レベルに違います。居合い切りイベントをバツサリ切ったら変な人になっていました。おかしい。

【第九話】クチバ——豪華客船と似非外人

激戦のハナダシティジムを後にし、萌えもんセンターで一日休息を取った俺たちは、一路クチバシティを目指す事にした。

本来ならハナダとクチバの間に位置しているヤマブキシティに行っておきたかったのだが、

「ま、せっかくくれたんだしな」

手にしたチケットの日にちがそろそろ切れそうだったから、先にクチバに決めたのだ。

くしゃくしゃになったチケットには、【サントアンヌ号】と書かれている。何やら聞いた話によると、世界一周している豪華客船らしく、今はクチバの港に寄港しているらしいのだ。

その間、こうしてチケットを持っている人間は自由に乗船が可能らしい。

らしい——というのは他でもなく、俺自信もさっき貰ったものだから実は全く把握していない。

「つたく、渡すだけ渡してすぐに消えやがって」

あのピッピ——間違えた、マサキは本当良くわからん。

普通なら飛びつくようなイベントだというのに。

「行くの？」

「おう」

こんな面白そうなイベント、逃すわけにはいかない。

何しろ豪華客船なんてこれからの人生、乗れる機会なんて無いだろうからな！

「……また寄り道？」

呆れ顔のリウを宥める。

あれだけ戦っておいてこの娘っこ、もう次のジムに行きたいらしい。

「寄り道も大事だぜ？ 英気を養うってな」

それに、どこに戦うためのヒントが転がっているかもわからないしな。

戦術のストックが豊富なのは強みになる。

「そのクチバシティって遠いの？」

「いや……」

頭に地図を思い浮かべる。

北から見れば、ハナダ、ヤマブキ、クチバという位置関係だが、確かハナダにはクチバと繋がっている地下通路があったはずだ。

そこを利用するのも悪くないだろう。

「半日あれば着く距離だろうな。行こうぜ」

「……はあ、わかった」

不承不承といった様子のリウ。俺が寄り道ばかりで慣れてしまった部分もあるのだろう。

けどな、リウ。人生、寄り道は大事なんだぜ？



リウを宥めてハナダシティからしばらく南へ進んでいると、ヤマブキシティへのゲート手前に、こじんまりとした建家が見えてくる。あまりにも貧相な作りに思わず山小屋を連想してしまうほどだが、これでもちゃんとした地下通路への入り口なのだから恐れ入る。

かつては頻繁に使用されていたらしいが、ヤマブキシティが栄え始めた結果、使用される事が少なくなっているらしい。

中に入ると、比較的掃除はされているのか綺麗だったが、人はいなかった。

「……こ、ここに入るの？」

「おう」

地下へと続く階段を降りると、予想以上に舗装されている地下通路だった。

等間隔に両端に灯りがあり、真っ直ぐに伸びている。

だが、薄暗いのは間違いなく、深夜にひとりで通るのは勘弁したいところだが……。

「あの一、リウさん？」

「な、なに？」

俺は上を見上げて相棒に語りかける。

「降りてこないのか？」

「お、降りるわよ！」

別に怒らんでも。

そうして、リウはゆっくりと階段を下りてくる。心なしか、動作がいつもよりぎこちないように見える。

んー、ひょっとして。

「怖いのか？」

「死ね！」

罵倒された。

やれやれと肩を竦め、俺は視線を再びクチバ方向へと戻した。

クチバシテイに行くならば、ジムにも寄っておきたい。クチバシテイジムは確か雷属性の萌えもんを扱った筈だ。ジムリーダーの名前はマチスだったか。

リウ、シエル、コン。

欲を言えば、後ひとり戦力が欲しい。

出来れば雷タイプに強い地面タイプが。

「どうしたもんか」

「何が？」

「いや、次のジム戦だよ」

「ふうん」

まあ、クチバシテイの近くにも野生の萌えもんはいる。戦力増強はその時に考えるところか。

ところで、だ。

「なあ、妙に左腕が重たいんだけど」

「気のせいじゃない？」

ふうん。

俺は視線を左隣にいるリウに落とす。

「特に袖の辺りが重たい気がするんだけど」

「き、気のせいでしょ？」

リウはぷいっと顔を逸らす。心なしか頬が赤いようにも見えた。つたく。

「疲れてるのかもしれないな。ああ、もしかしたら何かに取り憑か」

「さ、ささささささっささで行く！」

ずんずんと進んでいくリウに引っぱられながら悪態をつく。

ほんと、プライドの高い相棒だ。



地下通路を抜けるとそこは――

「おお！」

草むらだった。

なんとびつくり。クチバシティからだいぶ離れた距離に出口は作られていた。

――いや、もうちょつと近くに作ろうぜ、ほんと。

とは言っても、草むらがあるのはありがたい。見れば野生の萌えもんや、トレーナーもいる。クチバシティジムに挑む前哨戦にはちようにいいだろう。

「やるか？」

「もちろんよ」

地下通路までの殊勝な態度はどこへやら。いつもの調子を取り戻したリウは右腕をぐるりと回した。

ずんずんと進んでいくリウの後を追って俺も歩き出す。

「さて、どうしたもんかな」

やはり水と氷タイプのシェルでは相性が悪い。

ハナダジムではなんとか巻き返せたが、それでも毎回お世話にな

つていたシエルを封じられたとなると大きい。

その部分も含めて、考えていけないといけない。

欲を言えば地面タイプの間が欲しいが……そう簡単にはいくまい。

だがまあとりあえずは、

「おいお前、俺と勝負だ!」

虫取り少年に絡まれた相棒を助けに行きますかね。

何度かのバトルを経てクチバシティに着くと、潮風が俺たちを迎えてくれた。

海に面した港町であるクチバシティは、ここカントー地方において主要な交易の要でもある。そのため、人の出入りはカントー地方でも随一となっている。また、カントー以外の地方の住人も多い。様々な情報の交換場所としても有名なのである。

そんな中、目指すべき場所サントアンヌ号へと足を向ける。

地図を見ると、サントアンヌ号の停泊している港はジムの近くのようにだった。チケットを持っていると言っても、そのまま世界一周旅行に洒落込む気なんてないわけだし、ジムへの登録もついでに済ましてしまおう。

そうして俺が頭の中で行動計画を立てていると、

「兄貴!」

「ん?」

ちゃりん、と自転車のベルと共に見知った顔が自転車に乗ってやってきた。

「よう、レッド」

久しぶりに出会ったレッドは、ニビシティで会った時よりも一段階成長しているように見えた。

男子三日合わずに刮目して見よ。

なるほど、旅は男を成長させる。

「良い面構えじゃないか」

「ちょ、兄貴！」

レッドの頭を帽子越しにグリグリと撫でる。

「で、お前もジム戦か？」

まあね、と言って、レッドは視線をジムへと向けた。

クチバシティの港の外れにジムはある。ここからだ小さくて見えないが、確かにジムらしき建物はある。

「なるほどな。頑張れよ」

「うん」

レッドに向かって拳を突き出すと、合わせたようにレッドも拳を突き出した。

それで挨拶は終わり。

男の挨拶なんてこんなもんだ。

と、レッドは何かを思い出したのか急停止し、振り返った。

「あ、そうだ。兄貴、クチバには来たばかり？」

「ん、ああ。さっき着いたところだ」

「ふうん。じゃあさ、あそこに行ってみるといいよ」

言ってレッドが指したのは、ジムと同じくらい大きな建物だった。

好事家というか、金持ちが住んでいそうな建物で、おおよそ港町には似つかわしくない瀟洒なデザインをしている。

「幽霊でも出るのか？」

「――！」

びくつ、とりウが僅かに身を竦ませるのがわかったが、言わないでおく。記憶ごと力でもみ消されるに違いない。

「ああ、違うよ違う」

だが俺の予想は外れていたようで、レッドは苦笑しながら手を振る。

「何でも”萌えもん大好き倶楽部”って会らしいんだけど、兄貴と気が合いそうな会長さんだったから」

萌えもん大好き倶楽部だと！？

「話しかけたらもう止まらない会長さんでさ、ずっと萌えもんについて語ってくれるんだ」

ほほう。

「だから兄貴が行ったら楽しいんじゃないかなって」

「行こうじゃないか!」

酒を持参で語り明かそうじゃないか、まだ見ぬ同士よ!

と、そんな俺の心情を見越してか、

「ジム行くんでしょ?」

「もちろんだ」

だが語り明かしたい。

語り明かしたいんだ!

「行くんでしよう?」

「はい」

おかしいな、未来のビジョンが海の藻屑と化している俺の姿しか思い浮かばない。

「はは。ま、面白い人だから兄貴もきっと気に入ると思うよ」

またね、とレッドは自転車に乗ってジムへと向かっていった。

頑張れよ、レッド。

お前が負けるとは思っちゃいけないけど、な。

「よし、豪華客船に乗り込むとするか」

「はいはい。寄り道はそれだけにしてよね」

わかってるさ。

萌えもんについて語り明かすのはいつだって出来る。

でも、俺たちが目指すものの時間は限られてるんだから。

港に着いてみれば、すぐにわかった。

まさしく豪華客船の名に相応しい大きさと綺羅びやかさだった。

積荷の搬入をしているのか、船乗りや搬入業者が引っ切り無しに出入りしている。こりゃ出発時刻も近いかもしれない。

「出航される前に見て回るか」

「うん」

栈橋から船へと向かう。

途中、チケットを見せてくれと言われたのでクシヤクシヤになったチケットを見せると、案外あっさりと通してくれた。

いいのか、こんなボロボロでも。

俺たちがいぶかしがっているのを見かねたのか、チケットを見てくれた兄ちゃんは、

「ははは、いいんだよ。見たらわかるんだから！」

なんて説明になってるのかわからないのか良くわからん豪快な笑いで答えてくれた。

いくらなんでもザルすぎるだろう……。

まあ、入船出来たのならそれでいいわけだが。

「「う、わあ……」」

そして、俺たちはふたり並んで呆然としていた。

綺羅びやかな装飾。絨毯はまだ新しいのか毛が立っており、歩けば新雪のような弾力を返してくれる。

その場にいた乗客もそのほとんどが貴族というか綺羅びやかで、正直、俺たち場違い。

「って、呆けてる場合でもないな」

「う、うん。そうよね」

俺たちは気を取り直して、船内を見て回る事にした。何しろ世界一周の豪華客船だ。中に入れるなんて滅多に無いからな。

俺たちが物見遊山な田舎者であるのはすぐにわかるらしく、乗客からは笑われたり話しかけられたりしたが、それ以外は特に何もなかった。

豪華客船といっても、通常の船を長旅でもストレスの溜まりにくいうように改良した船、と言い換える方がわかりやすく、綺羅びやかな装飾も豪華な食事も、プールなどの施設も遊技性に溢れていて刺激してくれる。

「何だ、見て回ると大した事ないのね」

「ははは何を言ってるんだ。はしゃいでたじゃないか」

「——っ！」

次の瞬間、俺の意識は無くなった。

目を覚ますと俺は倒れていて、リウが不機嫌な顔で俺を見下ろしていたんだが、一体何があったんだかさっぱりわからない。

「で、これからどうするの？」

そうだなあ、と痛む身体を起こして考える。

船内はおおよそ見て回った。

プールで目の保養もしてきた。

美味いご飯も食べた。タッパにも詰めた。

うむ。

「する事が無いな。降りるか」
出るに限る。

「でも、一度見ると面白くなるわね」

「まあなあ」

「こういうのは”真新しさ”が大事だからな。一度見てしまうと、後は面白くなくなってしまふのは仕方がない。

ベールが剥がれると、後はただの船しか残らないのだから。

まあそれでも、一度くらいは旅行してみたいもんだとも思う。

こうして徒歩で世界を旅するのも悪くないけれど、船旅もそれはそれで楽しそうだ。

いつかゆっくり出来るようになったら、乗ってみるのもいいかもしれないな。

「……何？」

「いや——また乗れたらいいなってな」

「ふうん」

リウと一緒に、って言葉は言わないでおく。さすがに言えん。俺たちの旅がどこまで続くのかもわからないのだから。

「——先、か」

目指すべき目標は確かにある。だが、達成した後は？ 俺がチャ
ンピオンとして君臨するのだろうか。

考えられない。とてもじゃないが、俺はそんな器じゃない。
がむしゃらに目指す事だけを考えてきたけど、いつかその答えも
考えておかなければいけないのだろうか。俺自身のためにも。

「考え事？ 置いてくわよ？」

「ああ、ちよつと待っ、とと」

大きな振動が起こり、思わずつんのめる。

リウは咄嗟に手すりに捕まったようで、既に方向を見定めている
ようだった。

「今のは？」

「上みたい」

ばらばらと天井の壁紙が落ちてくる。

さつき探検したのだ。もちろん覚えている。

「甲板か」

俺とリウは頷き合って、甲板へと向かった。

振動の正体はすぐにわかった。

甲板に出た先、ツンツン頭金髪が豪快に叫んでいたからだ。

「ヘイ、ピカチュウ！ 電撃波！」

迷彩服を来た奇妙な男だ。だが、その実力は相当なものだという
のがわかる。

何故なら――

「草タイプに電気タイプなんて効果があるわけないだろ！ ナゾノ
クサ、葉っぱカッタ……えっ」

次の瞬間、ナゾノクサは電撃波によってプールまで吹き飛ばされ
ていた。

だがもちろん、それで終わりではない。

水こそが、雷タイプが最も得意とするフィールドでもある。

迷彩服の男はもう一度指示を下す。

「ピカチュウ！ 10万ボルトネ！」

目を焼く閃光と共に、プールに強大な電気が走る。

やがてそこには瀕死になったナゾノクサが浮かぶだけだった。

「ひゅー。やるねえ」

迷彩服の男だけじゃない。あのピカチュウも相当な手練だ。激戦を戦い抜いたような貫禄がある。

なるほど。

あの迷彩服の男が、

「マチス、か」

クチバシティジムのジムリーダー。電気タイプの萌えもんを主力に戦うトレーナーだ。

船乗りにも負けないほどのガタイと、勉強法を間違えたかのような言葉遣いに迷彩服。俺なら間違いなく通報しているレベルで怪しいが、貫禄はある。

と、俺の呟きを聞き届けたのか、マチスは振り向いた。

「ヘイ、ユー！」

ニツカリと、焼けた肌に清々しい笑顔を浮かべているが、傷跡のついた顔で笑われるとむしろ怖い。

だがマチスは気にした風もなく、俺を指差した。

それだけで伝わる。

かかってこい、と。

そりゃそうだ。トレーナー同士、目が合えばバトルするのが暗黙のルールなのだから。

「はっ、いいぜ。やろうじゃねえかジムリーダー！」

と俺が乗り気でいれば、

「やっぱりナシネ」

当の本人がいきなりやる気を無くしていた。

「おい！」

ずっこけた俺にリウはやれやれと肩を竦めている。このクールさ

んめ。

マチスは顎て手をやって、さも面白い事を考えたというように俺を見ている。

「んーフフ、ユーの事は知ってるネ。マサラタウンのフアアル。タケシやカスミから聞いているヨ」

あのジムリーダーどもめ。

「ユーが来るの楽しみにしてた。ジムで戦いたいサ」

「そうかよ。ま、こっちとしても賛成だけどな」

どうせやるならジムでやりたいってのは俺だって同じだ。

それに――

「そっちの方が戦い甲斐がありそうだ」

ニヤリ、とマチスに向かって笑みを返す。

「H A H A H A！ やっぱり聞いてた通りネ！」

一頻り笑い、マチスは自分の胸を指差し、

「いつでも来る。いつでも受け付けるヨ。でも、勝つのはミー」

「はっ」

言って、マチスはピカチュウをボールへと戻し、去って行った。

「変な奴」

「ま、ジムリーダーだからな」

自分で言って何だか納得できた。むしろマチスだからマチスなんだと言われても納得出来るくらいだ。

さて、特に何事もなかったわけだし、俺たちも出るか。

マチス戦への準備もしなければいけないし。

「なあ、あんた！」

と、踵を返したところに今度は俺が声をかけられた。何なんだ、まったく。

振り向くと、そいつはさっき戦っていた男だった。

「あんた、あのフアアルだろ？ 俺知ってるぜ。ジムリーダー戦の中継ずっと見てたんだ！」

「あ、ああ。そっか。ありがとよ」

予想外の熱意に驚いてたじろいでいると、リウが小突いてきた。

「良かったじゃない」

「いや、まあ」

嬉しいんだけど、予想外すぎて対処に困る。こう、むずがゆいというか……。

だけど男にわかるはずもなく、

「明日マチスと戦うんだよな！ 俺、見に行くよ！」
いやいや。

「この船、今日出航だろ？」

そう。サントアンヌ号は今日出航予定だったはずだ。だからこうして急いで見て回ったのだ。

だが、予想外の場所から答えは来た。

「では延ばそう。明日にしよう」

「軽っ！」

リウのツツコミも尤もだ。

甲板の奥から現れたのは、黒いスーツに身を包んだ老人だった。

髭を蓄え、ネクタイをしっかり締めて。総じて言ってしまうえば、紳士という言葉が一番しっくりくる出で立ちである。

その老人は、二度言った。

「出航は明日だ！ 船長決めた！」

「「ええーっ！」」

おかしくね？

おかしいよね！？

だが船長は優雅に杖を甲板に突き直し、

「というわけだ、ファアル君。明日はみんなで観戦に行こうじゃないか」

楽しみにしておるよ。

と意地の悪い顔で笑った。

クソジジイめ。

「……わかったよ。ただ、来るからには覚悟しろよ」

「ほお？」

びしっと船長を指さす。

「楽しませてやるよ。ずっと出航したくなくなるくらいにな」

そう、俺は萌えもんトレーナーだ。

もし観に来てくれる人がいるのなら、全力で楽しませるのもまたトレーナーの役割だ。

それに、

「つまらねえ戦いなんて出来るとは思えないしな」

マチスは強敵だろう。だが、だからこそ戦い甲斐があるってもんだ。

強くなる。

強くなって、目指す相手を打倒する。

「だろ？ リウ」

「そうね」

戦いの日は決まった。

それまでに俺が成すべきことは決まっている。

明日の勝負を勝利で飾るために。

俺の戦いは既に始まっている。

——やってやろうじゃねえか。

第十話 クチバ——痺れるほどに凄い奴 前編（前書き）

これまでで一番悩んだ戦闘かもしれません。自分でどれだけ縛るのかと後悔しましたが、何とかなっただしょうか。長いので前後編に分けちゃってます。

第十話 クチバー——痺れるほどに凄い奴 前編

「シエル、水鉄砲！ 飛べ！」

「りょーか——お、およろ？」

あれれっ？

体がうごかない。マスターの通りにやろうとおもったのに、うごかない。

うーん！

うでとか足とか力を入れてみても、ぜんぜんうごかない。

「ふふ、サイコネシス」

なんか、マスターのたたかってるひとがやってるみたい。

だけど負けるもんか。

じたばた、じたばた。

うごけ、うごけー。

でもうごかないや。

下にいる、すたーみーとかいう人の目がひかっている。こわいー。

「貴方は確かに強い。正直、並大抵のトレーナーじゃない。でもね、何度だっていつてあげる」

でも、がんばる。

こわいけど、がんばる。

だって、マスターといっしょにいるって決めたから。

「わわ、うごけないー」

「シエル！」

だから。

だから。

負けないもん！

「私は香澄。ハナダシティズムリーダーの香澄よ！ 貴方が全力で挑んでくるのなら」

きかない。ちよっとうごいたからがんばってみたけど、やっぱり

きいてない。

マスター。

マスター。

ふぁある。

わたし、こんどはがんばるから。

こんどはぜったい、ぜーったいかつから。

だから、

「全力で撃ち砕く！　それが私の戦い方よ！」

「み、みぎゃあああああああつ！」

——いつも、ごめんなさい。



クチバジム内部、受付を無事終わらせた俺たちは、控え室へと向かう途中、ただならぬ空気に包まれていた。

「おい、どうすんだよこれ」

ごくり、と唾を飲み込む。

汗が一筋流れ落ち、床に雫となって跳ねた。

「失敗はもう許されないんだからね？」

わかってるさ。

後ろで固唾を飲んで見守っているリウの視線を浴びながら、俺は一度目を閉じる。

大きく息を吸い、吐く。

何度となく繰り返した、おまじないだ。

今度こそは大丈夫。

そう信じ、俺はそっと手を伸ばし、成功してくれと祈りをこめる。万にも感じる時間。

だが、確実に時間は経つ。

俺の——いや、俺たちの祈りは天へと届いたのか、

ブブーッ

無慈悲にも宣告された。

「……すまん」

「……うん」

力なく項垂れる俺を、珍しくリウは責めなかった。
呆然とした瞳で見上げる。

上につけられたスピーカーからは機械的な女性の声で、

「プログラム解除コードは失効されました」

何度目になるかわからない結果を報告してくれた。

しかもだ。

「これで本日52回目の失敗となります。ざまあ！」

機械らしい平坦な声で言われると、普通に言われるより腹が立つ。

俺はゆっくりと扉へと向かって指を向け、

「龍の息吹」

「諒解」

ぶっ壊してやった。



俺とリウの頭脳のプレイで見事最初の関門を突破し、俺たちはようやく控え室へとたどり着いていた。

実に長かった。余裕を持って行った方がいいとレッドに言われてなかったら、遅刻じゃ済まないくらいだ。

だが、ここまでたどり着いた。

「ねえ、このジムは何のタイプが相手なの？」

「ん？ ああ」

俺は戦略会議として出していたリウ、シェル、コンの顔をそれぞれ見渡す。

香澄戦以来、コンもやる気ばっちりのようだ。弱気だった瞳に少しだけの強さを感じる。

「クチバシティジムのジムリーダー、マチスが使うのは電気タイプだ」

控え室に置かれているモニターを見ると、バトルフィールドが映っている。

一部僅かに地面があるのは、おそらく地面タイプの萌えもんを考慮してだろう。むき出しの地面がまず挑戦者からジムリーダーへと――ちようどハナダジムのように大きな道の如くひかれている。そして、地面の間に水たまりのようにコンクリートが存在し、また地面の周囲もコンクリートで固められている。注意すべきは、いくつもの避雷針が建てられている事である。

利用するなら一番使えそうであるが、さて……。

俺は画面を見ながら戦略を立てる。剛司や香澄と同じように、一筋縄ではいかないはずだ。

「雷、か」

呟いたリウが思い浮かべているのは、この間の香澄戦だろう。スターミーもまた、雷を使用していた。その威力たるや、弱点とするタイプであるのにも関わらずシェルを一撃で仕留めるほどだった。

香澄がコンを封じていたのなら、マチスはシェルを封じたも同じだ。香澄と同じように今回も切り抜けられるとは限らない。

それに――

「かみ、なり……？」

シェルは震えている。

どんな萌えもんにも物怖じしなかったシェルが、初めて震えている。

それほど、スターミーとの一戦はダメージが大きい。

「シェル、大丈夫か？」

放心しかけていたシェルだったが、俺の声が届いたのか、首を大きく横に振った。

「う、うん、だいじょーぶ」

いつもと変わらないように見える。

いや——変わらなさ過ぎた。

「なら、今回も頼むぜ」

「ばっち」

極力、温存はするけれどな。

シエルの頭を撫で、俺は再度告げる。

「相手は電気タイプだ。素早い動きに、身体まで痺れるおまけ付きだ」

だが、

「それでも結果は変わらねえ。

——絶対に勝つぞ！」

相手の手の内がわからない以上、下手に考えを巡らせて先入観に囚われるのも良くない。

俺には俺の戦いがあるように、仲間たちを信じるだけだ。

「行きましよう」

「ああ」

シエルとコンをボールに戻し、相棒と共に控え室の扉を開けた。

控え室から続く扉を開けると、熱気が俺を迎えてくれた。

バチバチと帯電している電気によって、室内温度は高い。熱気だけではない熱さがあった。

そんな中、腕を組んでいる迷彩服の男が、ニヤニヤと笑いながら俺を見下ろしていた。

クチバシティジムリーダー、マチス。元軍人だと聞くが、実力は昨日見たものより遥かに高いだろう。

モニターに俺とマチスの手持ちの数が表示される。俺が3、そしてマチスが5——数の上でも不利、か。

だが、数で負けているのはいつもの事だ。

「あー、あー」

マチスは備え付けてあるマイクをテストし、

「よく来たネ、マサラタウンのファアル！」

その顔に浮かべる不敵な笑みは、戦場で培われたものか。

「ミーは戦争でエレクトリックポケモン使って、生き延びたネ！」

だが、その笑みの根底には誰にも拭えない自信が伺える。

戦場で仕込み、手に入れた萌えもんと己の自信。

マチスを支えているモノは、少しぐらいの衝撃では揺るがないだろう。

「みんなビリビリシビレて動けナイイ！」

だから、俺が

「ユーも同じ道辿る違いナイイ！」

その自信を丸ごとぶっ潰す！

マチスがマイクを放り投げ、ボールを投げる。

行け――

「リウ！」

「GO！ マルマイン！」

先鋒はリウ。頼れる相棒の相手は、出来れば当たりたくない相手でもあった。

マチスが先鋒に選んだ萌えもんはマルマイン。電気タイプの萌えもんで、その素早さは全ての萌えもんから見てもトップクラスだ。シエルと同じように身体を丸め、転がる事やその素早さを活かして相手の懐に潜り込む事も可能とする。

だが、本当に恐ろしいのは他にある。大爆発、という自爆技を持っている事だ。使えば最後、自分は瀕死になるが相手を巻き込めば道連れにするかの如く大ダメージを与えるという大博打技だ。しかも持ち前の素早さもあり、相手の懐に飛び込んでという戦法が可能。な実に厄介な相手だ。

ここでいきなりリウは失いたくない。だが、マチスは確実に大爆

発を狙ってくるだろう。こちらの手持ちは3体、だがマチスの手持ちは5体だ。押し切られるのはマズい。

打開策は……思いつく限りでひとつだけある。

「マルマイン、雷ネ！」

マチスが素早く指示を下す。

やはり予想通りと言うべきか、大爆発だけでは終わらない。こちらの意識が博打技に向かうのをわかっていて、敢えて使用しないでいるのだろう。

なら、こちらは誘うだけだ。決め手の一発は俺たちの方にこそある。

「リウ、接近しろ！」

「諒解！」

走りだしたリウの背後に雷は落ちた。

やはりだ。スターミーが何故雷を使用する場合にサイコネシスで動きを封じていたのか疑問だったのだが、今ので合点がいった。

雷は視線を使う。つまり、視線の先に落ちる。そして発動までには若干ながらラグが存在している。だからこそ、スターミーはサイコネシスで相手の動きを封じ、雷を必中させる道を選んだ。

つまり、こちらが自由に動き回れる状態にいるのであれば、そう簡単には当たらなくなる。

「戦術ミスじゃないかね、ファアル！ マルマイン——」

マチスが更に指示を下す。

大爆発か否か。いずれにせよ、次の行動は決まっている。

「リウ、下方向、叩きつけろ！」

リウは地面を叩き付け、更に地面を蹴ってマルマインを飛び越えるような形で跳び込んでいく。

大爆発があってもこれならばダメージは少ない。

だが、それすらもマチスは読んでいた。

「ソニックブーム！」

どこぞのハウキ頭のような発音で下した指示は、大爆発ではなか

った。

空中かつ至近距離とあって、リウは直撃を食らうも大したダメージは無い。おそらく、牽制用なのだろう。

そして、こちらに隙が出来た時こそがマチスの狙っていたタイミングでもあったのだ。

「マルマイン、大爆は――」

「更に竜巻！」

そしてそのタイミングこそ、俺が狙っていた瞬間でもある。

大爆発に見られる自爆系の技は、自分が持っているエネルギーを暴発させる技だ。即ち、どれだけ準備をしていたとしても数秒なりのタイムラグは出来てしまう。

後は簡単だ。その間にこそこちらの攻める手段がある。

リウの起こした竜巻に飲み込まれ、マルマインは上空へと一瞬で上昇していく。

「……ノウ」

竜巻の中でマルマインが点滅していくのがわかる。

俺は高く腕を掲げ、告げる。

「一体目――」

さあ、始めようかマチス。

「――撃破」

最高に痺れる戦いつてやつを。

直後、マルマインが大爆発によって散り果てる。瀕死となって落下し、マチスによって回収された。

「ふう、余裕」

戻ってきたリウもまだまだ動けるようだ。

さて、次は何を出してくるか。

身構えた俺に向かって、マチスは軍人さながらの笑みを浮かべた。上等だ、来いよジムリーダー。

「GO！ エレブー！」

マチスの投げたボールから、黄色い縞々の模様がついた、雷を連

想させる萌えもん、エレブーが現れる。雷タイプの萌えもんの中ではスピードは遅いが、その破壊力と触れたら強制的に相手を痺れさせるほど帯電している電気は驚異でもある。

戦い方もおそらく、香澄のニョロボンと酷似しているだろう。ただし帯電している以上、こちらが麻痺する可能性は高い。格闘戦主体は不利だ。

なら――

「リウ、交代だ。頼むぜ、コン！」

格闘戦が無理なら、遠距離から倒すまでだ。

水タイプの技は覚えていないはずなので、コンの有効性は高い。

「はいっ！」

ボールから飛び出したコンは、怖じける事なくエレブーと対峙している。スターミー戦を切っ掛けに何かが吹っ切れてくれたのだろう。クチバシティへ向かう道中にも、頼もしい姿を見せてくれた。

もっとも、その信頼に答えるためにも俺がしっかりしなくちゃいけないわけだが。

「エレブー、雷！」

さすがクチバジム。雷系大技の大盤振る舞いだ。

「コン、動き回れ！」

即座に俺の指示に従ってコンは戦場を駆け回り始める。そうすると、自然雷はほぼ命中しなくなる。

加えて、視線がこちらに釘付けになるため、

「更に火炎放射！」

隙も生まれる。

だが、

「甘いネ、ファアル。雷パンチ！」

「なっ――！」

あろうことか、エレブーは自分の拳へと雷を直撃させ、生まれた電気を拳に纏わせ火炎放射の中に突っ込んだ。

「ひうっ」

捨て身覚悟の一撃。

だからこそ、最初に臆したコンが敗北するのは必然だった。炎の中から紫電が走る。

拳に乗せた雷はコンを捉えるには充分だった。

「あうっ！」

後方へと吹き飛ぶコン。

エレブーは煙を上げながら拳を振り抜いたまま立っている。

だから俺は、

「コン！」

未だ倒れていないコンへと向かって告げる。

「火炎放射！」

空中を舞いながらもエレブーを見据えていたコンは、即座に噴射する。

ギリギリの賭けではあったが、こちらが勝ったようだった。

そう、火傷である。火炎放射の中に突っ込んだのだ。いくらエレブーが強靱な一発屋とて、限度はある。全身を襲う火傷を前に全力の一撃など放てるはずもない。

「いっけエエエエー！」

咆哮と共に吐き出された火炎放射は瞬時にしてエレブーを呑み込む。

「エレブー！」

決着はついた。

身を焦がすような空気がこちらまで漂ってくる中、

「二体目——」

エレブーは仁王立ちのまま、気絶していた。

「——撃破、です！」

追いついたぞ、マチス。

さあ、ここからが本番だ。

「やはり強い！ 挑戦者ファアル、鮮やかにマチスの先鋒を二体撃破だあっ！」

観客の完成も一際大きくなる。

俺は彼らに右手を挙げて答え、戻ってきたコンの頭を撫でた。

「わ、わふっ」

「ありがとな」

くしゃくしゃと乱れない程度にすると、コンは小さく、

「い、いえ……」

頷いていた。

「ハハハ、面白くなってきたネ！　ここからが本番。マジでバトルだヨ！」

マチスはホルスターからボールを抜き取り、軽く放り投げてからキャッチする。

ジンクスだろうか。まるでその行為に祈りを込めているように見えた。

「これがバトルの真髄！　GO、ライチュウ！」

ピカチュウが黄色だとすれば、それは橙だった。まるで夕日のように見えるも、先程のエレブーとは違い、帯電していない。だが、離れたこちらでもピリピリと肌を指すような静電気が起こっている。間違いなく、マチスの切り札だ。

「……さて」

マルマイン、エレブー、そしてライチュウ。マチスの手持ち萌えもんはライチュウを入れて残り三体だ。雷タイプと限定すれば、重複していない限りそれほど多くはない。

俺はしばし迷い、もう一度コンを出すことに決めた。

幸いにしてドラゴンタイプであるリウは電気には耐性があるし、コンも弱点というわけではない。方法はまだある。

だが、そんな俺をマチスは封じ込めた。

「ライチュウ、雨乞いネ！」

マチスの指示の元、ライチュウが雨乞いをする、ジムの内部に雲が発生し雨が降りだした。雷雲立ち込めているのか、生み出された雲が時々光っている。

……マズい。

雨乞いという技は補助的な役割をもたらず技で、それ単体では何の攻撃力も無い。だが、雨乞いを行う事で一時的に気象を変更し、雷は発動までのタイムラグがほとんど無くなり、更に炎タイプの技も封じられる。当たり前だ。雨が降っていたら火は消える。

唯一救いなのが、広範囲に自然を歪めるほどの技故に効果時間はそれほど長くないという点だが、それでも今は致命傷に等しい。

どうするか……選択を迫られた俺に、マチスは更に追い打ちをかける。

「ライチュウからチェンジ！ レアコイル、GO！」

即座にライチュウを元に戻し、次に出してきたのはレアコイルだ。三人の小さいコイルが集まった萌えもんで、常に一緒に行動している。また、三体のコイルが行う攻撃ともなるので、電気の威力も単純に高い。

更に厄介なのが、鋼タイプだという点だ。防御に優れた属性で、一部属性以外はその硬さでダメージをほとんど寄せ付けないと言っている。

ドラゴンタイプのリウは鋼タイプに有利な技をひとつも持っていない。唯一弱点である炎タイプのコンは、雨乞いによって封じられてしまっているようなものだ。水タイプのシェルは言わずもがな。

「さあ、カモン！ ユーの実力、ミーに見せてヨ！」

「くっ……！」

シェルに続いて、炎タイプのコンまで封じられた。

残る戦力はリウのみ。

打開策を何一つとして見い出せないまま、俺は選択を迫られた。

〈後編へ続く〉

第十一話 クチバ——痺れる程に凄い奴 後編（前書き）

自分自身も追い詰められた後編です。ゲームの状態を実際に表現したらどうなるだろうと思って書いてみたらこうなりました。無理ゲー¹。

第十一話 クチバー——痺れる程に凄い奴 後編

雲が覆い、雨が降り、雷鳴轟く中——俺は前方で腕を組んでいる男、マチスを真っ直ぐに見ながら思考を走らせていた。

こちらが出しているのはコン。炎タイプの萌えもんで、雨の降りしきる中では思うようにダメージを与えられない。

反対にマチスがくり出したのはレアコイル。電気と鋼鉄タイプの萌えもんで、弱点は地面タイプと炎タイプのみ。

だが、俺の仲間には地面タイプの技を覚えていた萌えもんは無く、唯一の弱点タイプである炎タイプもこの雨乞いで事実上防がれてしまっている。

レアコイルの詳細なデータを思い浮かべる。

磁石萌えもん。複数のコイルが連結して、強力な磁力線と高電圧を放射する。

素晴らしい。一度で3体お得。

——そうじゃなくてだ。

レアコイルは磁場を操る。おそらく、コイル3体が集まっているがために単体では出来なかった出力面等がある程度自由に自分の意思で操作できるようになっているのだろう。また、高電圧も磁力によるものが大きいはず。磁力の生じる場所に電気は生じる。つまり、レアコイルはああして僅かに浮遊しながら上下することできさしく”コイル”と同じ働きを起こし、単体で電気を無尽蔵に生み出せるのだ。もちろん、限度はあるだろうが。

また、避雷針も曲者だ。

あの避雷針は確かにバトルフィールドに蓄積した電気を地面に逃す働きもあるだろうが、中にある銅線を利用してレアコイルが電気を生み出す手助けもしているはずだ。だが、銅線はアースとしての

役割も持っているため、迂闊に破壊することはかなわない。また、銅の融解温度も高いため、コンの炎で焼き切る事も不可能に近い。

更に——あくまでも可能性だが、レアコイルの特質上、もうひとつ見えないカラクリがあるはず。俺の予想通りならば、ではあるが取れる手段はふたつ。

リウの竜巻で上空の雲を吹き飛ばすか、搦め手を使うか。

「……いや」

だが、リウをここで出すのはマチスの思う壺のはずだ。

奴はおそらく、コンを封じる手段のひとつとして雨乞いを選択したはずだ。コンを引っ込めてしまうのは、相手の掌で踊る事を意味する。

状況が不利な以上、イニシアチブを取られるのは拙い。

なら——

「どうしたファアル！ ミーはいつでも準備オツケーネ！」

俺に残された道は搦め手のみ。

視線をフィールドに移す。

雨乞いによって地面はぬかるみ出し、等間隔に建設された避雷針が寂しく建っている。

いや、待て。

「——そうか」

まだ手はある。

俺は確信を持って告げる。

「頼むぜ、コン！」

コンはまさか続投だとは思っていなかったのだろう。驚いて俺を振り返ったが、俺が小さく笑い頷いてみせるとやがて決心したように頷いた。

炎タイプでは圧倒的に不利な状態だ。おそらくコンの火炎放射は、至近距離ならばレアコイルを一撃で追い込めるだけの實力を持っているはず。しかし近付かなければ炎は雨によって消火されてしまうだろう。

故に、問題はただひとつ。レアコイルへと近づく手段だ。

雨乞いのために雷は常時発生するものと考えた方がいいだろう。

コンはエレブーによって一撃を貰っている。さすがに雷に耐えられない。

となれば、いかに相手の隙をつくか。その一点にみ勝利がある。

「炎タイプ……ふっ、勝利はいただいたヨ、ファアル！」

マチスが腕を組み、告げる。

「レアコイル、雷ネ！」

マチスの戦略は非常にわかりやすい。自分の有利なフィールドに相手を引き込み、圧倒的な火力で押し通す。

単純だ。だが、それ故に強い。

「コン、右方向、飛び込め！」

そして、だからこそ読める。この瞬間、マチスの取れる最も有効な手段はただひとつに絞られてしまうのだから。

「はわわ……」

慌てて飛んだコンの背後に雷が落ちる。コンへと向かうかと思っただが、そうでもないらしい。

側撃雷は発生せず。当然だ。そんなものが発生すれば、今頃ジムは死屍累々となっている。

さすがだジムリーダー。だが、完璧な育成だからこそ——付け入る隙はある。

まずはその1だ。

「コン、火炎放射！」

まずは牽制用に火炎放射を放つ。

雨によって到達寸前で消されてしまうが、それでもレアコイルにとっては弱点だ。揺さぶる程度の効果はあるはず。

「コン、避雷針に向かって走れ！」

「は、はい！」

そしてその2に移行。

俺の読みが当たっていれば、レアコイル攻略の鍵は避雷針にこそ

あるはずだ。

どしゃ降りの中、コンが最も近い避雷針へと走る。だが、みすみす逃がすマチスではない。

「させないネ！ 雷！」

レアコイルがコンに視線を向ける。雷の合図だ。

「コン！」

「間に合ってえええっ！」

雷の性質として、高いものに落ちるというモノがある。

もちろん例外とていくつかあるのだが、今回に限っては例外にはならなかったらしい。

「シット！」

悔しがるマチスはさておいて、俺はある動きを見極めるべくレアコイルに視線を集中させていた。

すると、つつ、っとレアコイルがマチスの方向へと移動した。

——なるほど。

すぐに止まったが、その動きはまるで俺から逃げているかのようにも見える。視姦されて逃げているように感じて少し傷ついた。

レアコイルは僅かに浮遊している。それは先にも言ったように電気を生み出すためだ。

反面、浮いているからこそ制限もある。

例えば——ふんばりが効かないからこそ、受ける力の影響をすぐに相殺出来ない、とかな。

「コン、火炎放射！」

こちらの手札は揃った。

後は、確実に勝てるフィールドに引きずりこむだけだ。

「ハッ、レアコイル、影分身！」

影分身。

残像のように影を作り出し、あたかもそこに自分がいるかのように見せる技だ。

増えたのは3体。本体を入れれば4体のレアコイルがフィールド

に出現した事になる。

だが、この影分身はあくまでもダミーだ。ダメージは食らわないし、攻撃も出来ない。良く似たカカシだと思えばいいだろう。

コンは――

「ふ、増えたけど……だい、大丈夫！」

まあ、やってくれるだろう。

方法としてはふたつ。影分身が攻撃を受けないのなら、本体は攻撃を受けるという事だ。

突き詰めてしまえば、こんなに簡単な打ち破り方はない。

「コン！」

そして、俺たちが当てにする技も、たったひとつだ。

「火炎放射！ 左から右に薙ぎ払え！」

「What's!？」

俺の指示にマチスが驚きの声を上げる。

コンが火炎放射を文字通り薙ぎ払う。その威力は一点に浴びせるよりももちろん弱い。だが、今回に限っての狙いはダメージではない。

レアコイルがブレる。炎の残滓を浴び、立ち上った水蒸気を浴び、火炎放射を浴び、影分身によって生み出された幻像は揺らめく。

その中で、一点だけが微動だにしなかった。

そしてこのタイミングこそが、

「コン！」

「雷！」

俺の狙っていた時でもある。

「右斜め前方に跳べ！」

「はいっ！」

コンが俺の指示を受けて飛ぶ。

レアコイルによって生み出される雷も、雷本来にかかっていたラグがほぼ消失してしまっているだけで、必ず当たるというものではない。雷が視点を軸として攻撃する技である以上、咄嗟に動けば当

たらない。

更に、コンが跳びこんだ先には――

「しまっ――まさかファアル、ユーの狙いは――！」

そういうこった！

「ゼロ距離火炎放射、ぶっ放せえっ！」

これこそが浮遊しているレアコイルの弱点だ。磁力は電気を発生させる。そしてそのために必要なパーツである銅線は避雷針の中にある。だからこそ、レアコイルは無限とも思える量の電気を生み出せる。

電磁誘導という法則がある。詳しくは省くが、磁力の間に電流が流れる事によって生じる力の事である。

先ほど、レアコイルは避雷針に雷が落ちた後、移動した。

あれは俺から逃げたわけではなく、生じた力によって動いてしまったのだろうと予想を立てた。

レアコイルは単体で磁力を持ち、生み出せる。だというのにレアコイルは力の影響を受けてしまった。そこから導き出せる結論はひとつだけ。

「いっ」

自分に向かって漂ってきたレアコイル本体を掴み、コンが至近距離で口を開く。

「けえっ！」

この距離ならば、例え雨が降っていても関係ない。

瞬時にしてレアコイルを呑み込んだ炎は、一撃の元にその体力を奪っていった。

俺はレアコイルが雨によって冷やされる音を聞きながら告げる。

「――三体目、撃破だ」

コンの火炎放射を直に受け、沈む。

これで半分以上。勝負の本番はこれからだ。気は抜けない。

次に出てくる萌えもんは何かと予想を立てながら、俺は傍らに立つ相棒をしっかりと見据え、頷いた。

斃れたレアコイルをボールへと戻し、マチスはモニターを見た。
5体の内、今ので半分を超える3体が破れた。

雨乞い、そして雷でのコンボはマチスにとって最高の戦場だ。なのに、相手を一体も斃せずにこちらがやられた。

「……やるネ、ファアル」

レアコイルもさる事ながら、電気がある程度制御するためにジムのフィールドの端には磁場を発生させるための装置が組み込まれている。

それはマチスを有利にするためでは決してなく、見に来た観客や自分を含めた挑戦者を守るためでもあった。レアコイルはあくまでもその結果生まれた余剰効果にすぎない。

だが、ファアルはそれすらも利用した。それも、一度だけ見たレアコイルの動きでだ。

おそらく何度も繰り返し返せば自分の狙いがバレルだろうとの算段かなのだろうが、それでもたった一度だけ見、それを実行に移すだけの豪胆さと思い切りの良さには内心ながら舌を巻いていた。

以前としてフィールドはマチスにとっての最高の環境だ。

だが、油断は出来ない。

相手はその油断すらも確実に勝機へと変えてくると実感できる。

だからこそ——見事自分に打ち勝ってみせろと。

心からそう思い始めた自分に内心苦笑を浮かべた。

善戦してくれたコンを戻す。

帰ってきたコンは疲れた様子だったが、それでも気力だけは充分に持ってくれていた。

「ありがとな」

「い、いえ！」

いつものように謙遜していたコンの頭を撫で、リウに告げる。

「頼むぜ」

「任せなさいって」

リウも戦意は充分だ。むしろ全く衰えないのがリウの強みでもある。

残る萌えもんはライチュウともう一体。マチスが雷系の萌えもんを使うのならば、おそらく――

「GO！ サンダース！」

サンダース。イーブイの進化系のひとつで、雷属性の萌えもん。全身から針のような毛が逆立っており、一節には帯電しているために引き起こってしまう現象らしい。

マチスの扱うサンダースも例に漏れず、青白い光を帯電している。「ふん、今度は私の番よ」

考えられる戦法としては、やはり先ほどまでの雷主体の攻撃だろうが、

「そう簡単にはさせてくれそうにないな」

リウはドラゴンタイプだ。雷タイプの攻撃には耐性がある。だからこそ、可能な限り温存していたのだが……。

マチスも当然、その程度の腹は読んでいるだろう。

相手の狙いを看破すべく、サンダースを見る。

すると、まるでクラウチングスタートのように身を屈めていた。

イーブイから進化する萌えもんには特徴がある。それは進化の過程で受け継がれてしまう部分でもあるが、獣のように移動する事も可能だという事だ。

つまり、純粹に2本の足で立っているリウとサンダース、どちらが速いかなど比べるべくもない。

「サンダース、10万ボルトォ！」

帯電していた身体から、幾筋もの電気が射出される。

それぞれがまるで網のようになって絡まり合い、フィールドを飲み込みながらリウを襲う。

だが、それも耐えられるレベルだろうし、身体の小さなリウならば間を回避する事も可能だ。

相手の狙いがわからない以上、迂闊に動くべきではないが――

「サンダース！」

相手は攻守のどちらかを選ぶのなら攻を選ぶマチスだ。その隙さえも攻撃の決め手へと変貌させる。

マチスはリウを真っ直ぐに指し、サンダースに告げる。

「突進！ GO！」

サンダースが帯電しながら走る。

――速い！

コンやシエル、そしてリウの誰よりも速い。

サンダースはこのぬかるみの中、一気にリウへと距離をつめる。

眼の前には自身が放った電気が帯を引いているが、気にせずに、むしろリウごと飲み込まん突っ込んだ。

こちらの逃げる範囲は狭まっている。今行動しなければ敗北は必須だ。

俺はリウに――

「サンダース、電磁波！ ビリビリネ！」

なっ――！？

「う、くっ……！」

いつも世話になっていた技を食らい、リウが一瞬止まる。

そしてその隙を逃す相手でも無かった。

「う、らぁっ！」

掛け声一発。サンダースがリウを捉え、勢いを全く殺さずにそのまま壁へとひた走る。

そして、リウは叩きつけられ衝撃時の振動がこちらまで伝わってくる。さながら、香澄戦でのカメールのように。

だが、ここで終わりではなかった。

動けないリウに対し、

「10万ボルト！」

接敵した状態で更に追撃を加えたのだ。

「う、ああああアアアア――ッ！」

「リウ！」

至近距離での放電となると、いくら耐性があるといっても切り捨てられはしない。

突進、10万ボルトとコンボを食らい、モニターに表示されるリウの体力は瞬く間に減っていく。

どうする……。

俺は状況を打開すべく、リウを見る。

——まだやれる。

電撃の中、苦しい中でリウの動かした唇は確かにそう言っているように見えた。

——そうだな。お前はそういう奴だよ、リウ。

剛司の時だって、香澄の時だって、いつだって真正面から挑んで勝ってきた。

相手が強いのは当たり前だ。だからどうしたんだ。

ああ、そうだとも。勝つのは俺たちだ！

「——リウ！」

壁とサンダースに挟まれているリウに激を飛ばす。

これだけ距離が近ければ、戦略も何もない。

出せる力全てを持って退けるだけだ。

「龍の息吹！ ゼロ距離放て！」

「っん、のおおおおおっ！」

自分ですらもダメージを食らいかねない距離で発射された龍の息吹は、牽制するには充分だった。それどころか、咄嗟に後退したサンダース僅かながらのダメージを与えてくれた。

だが、こちらの損耗も大きい。まさか一発であれだけ持って行かれるとは思わなかった。

「はあ、つく……よし！」

未だ痺れが残るであろう身体を起き上がらせ、戦意を一欠片も失

わずに目の前の敵へと視線を向けるリウ。

さっきのコンボを後一撃でも食わうけにはいかない。しかし相手のサンダースもまた、こちらの攻撃でダメージはある。

勝機が全くないわけじゃない。

「雨、か……」

雨雲を見上げ、次いで地面を見る。

なるほど、使えない手じゃない。

問題はひとつ。マチスに見破られるかどうかだ。

そのためには――

「リウ、龍の息吹！ さっきのコンミたいに出来るか!？」

「ちよっと痺れてるけど、問題ない！」

言って、リウは右足を軸にまるでバッターのように大きく振りかぶる動作の後、前方に向かって扇形に噴射した。

「ワオ……」

これでサンダースの視界と行動を潰す事が出来る。

取れる選択肢は更に狭まっていく。

「サンダース！」

次の選択肢はふたつ。突っ込むか、跳び上がるか。

マチスは

「ジャンプ！ そして雷ネ！」

跳び上がった。

この瞬間、更に選択肢が狭まる。

しかしリウも動ける。痺れているからこそその行動を取る。

「リウ、前に跳べ！」

「つく、諒解！」

がくん、と一瞬動きが鈍るが、それでもリウはすぐに跳んでくれた。回避は成功。だが、この瞬間にリウは無防備になる。

「サンダース！」

そして、サンダースの背にはアースが設置されている。

体力が減っているとはいえ、さすがに雷はまだ耐えられる可能性

がある。なら、マチスが選ぶ戦法は何か。

答えはひとつしかない。

「突進！」

雷撃をまよっての突進。アースを蹴り上げ、電撃作戦の名に相應しい、さながら流星のように一直線にリウへと向かってくる。

倒すお膳立ては整った。

「リウ、無理矢理でもいい、着地しろ！ 後、こっちにパンツ見せて転べ！」

欲望のままに戦略を口にする。

が、当然のように

「――は？ ちょっと何言っ――あ、きゃあっ！」

俺に気を取られたリウは、泥濘と水たまりに足を囚われて転んでしまう。

そして、サンダースはリウの目の前に着地する。雷を纏ったまま、本来ならリウがいるべきはずの場所へと。

「狙い通りだ！ リウ、龍の息吹！」

「りよ、諒解！」

しかしマチスとて黙ってはいない。

「サンダース、10万ボルト！」

至近距離で放たれるふたつの大技。

リウは10万ボルトを。サンダースは龍の息吹を。

それぞれ直撃を貰い、双方共に体力がなくなってしまう。即ち、

「引き分け、か」

綺麗に四体目撃破、とまではいかなかったか。

自分のだらしなさを悔やみながら、リウをボールに戻す。

と、すぐにボールが展開し、

「どう、なったの……？」

リウが出てきた。

よっぽどボールの中が嫌いなのか、それとも勝敗が気になるのか。

俺はモニターを指出し告げた。

「引き分け、だ。相打ちだった」

「――そう」

がつくりと肩を落とす。

香澄の時もそうだったが、また勝たせてやれなかった。強くなる。そう約束したのにこの体たらくだ。

「……すまん」

小さく呟いた声に、しかし反応する声は無かった。

その代わり、

「これがラストバトルになりそうネ、ファアル」

マチスがボールを真っ直ぐに俺に突きつけていた。

ライチュウ。

剛司のイワーク、そして香澄のスターミー。これまで戦ってきたジムリーダー達を象徴するかのような萌えもん達は、そのどれもが一筋縄で行くような相手では無かった。

ライチュウとて、例外にはなるまい。

こちらの戦力はコンとシエルのみ。

シエルも新しい技を覚えはしたが、電気タイプが相手では最初から分が悪い。

――しかしもし、可能性があるとすれば。

シエルの新技にこそ勝機がある。

だが、弱点だからこそ出せない。一発逆転が出来るかもしれないが、それが可能なのはただ一度きりだ。やるならば、こちらが確実に勝てる状態を作り出さねばなるまい。

「シエル、もしかしたら」

「……あい」

ずっと黙って戦闘を見ていたシエルは、いつもの元気も無く、ただそれだけ呟いた。

本能から怯えているのか、もしくは香澄戦が原因か。

いや、両方か。

「わふっ」

俺はシェルの頭を優しく叩くように撫で、

「きついだろうけど頼む、コン」

「はいっ」

コンにしても残り体力は僅かだ。未だ雨が降り続いている中、どうやって勝利を導いたものか。

思考を回転させながら、フィールドを見る。

既にフィールドは豪雨によって大きな水溜りがいくつも出来ている。雨乞いの効果もそろそろ終わると思いたいが、いつ終わるかどうかわからないものに期待はあまり持たない方がいい。

「GO！ ライチユウ！」

マチスが切り札をくり出す。ただそれだけで、フィールドの空気が変わった。

先ほどまでレアコイルやサンダースの影響でぴりぴり感じていた空気が一瞬で消えた。代わりに静寂が周囲を包む。

ただそれだけで相手の力量がわかった。

コンが火炎放射以外に使えるのは、“噛み付く”と“メガトンパンチ”のふたつの近距離技のみ。しかしあのライチュウ、おそらくこちらが肉弾戦に持ち込めば、容赦なく溜め込んでいる電気を放つだろう。即ち、強制的に麻痺状態にさせられる恐れがある。

となれば、事実上頼れるのは火炎放射のみとなる。それもレアコイルのように磁力の影響を受けたりもしない。雨によって火炎放射の距離が縮められている以上、距離をつめなければならぬ。

——どうするか。

悩む俺に、コンは一步前に出て振り返った。

「ご主人様」

「ん？」

「シェルスさん」

「——ほえ？」

「リウさん」

その顔は、笑っていた。これから勝機の少ない戦いに挑むというのに笑っていた。

「勝ちましょうね！」

心からそう信じていて。

俺と——今は立てないシエルに向かって、勝とうと言ったのだ。自分も辛いのに。そしてきつと、俺にではなくコンが本当に伝えなかったのは、

「怖いです、私。今でも怖いです。でも——」

コンはシエルとリウと、そして俺を見て、

「みんななら勝てるって信じてます。私、リウさんみたいな目標とが無いですけど、それでも勝ちたいって思います。だって——」

一度目を瞑る。

それは何かを思い出しているかのようでもある。

「逃げたいって思う自分にはもう負けたくないんです。切っ掛けをくれた人に申し訳ないですし、何より自分自身にだけは負けたくありませんから」

きつと、コンが見つけた強さなのだろう。

あのスターミーとの——いや、それ以前からずっとコンの中にあつた強さなんだ。

——馬鹿だな、俺は。

そんなコンの心情すら汲まず、まだ恐れていると決め付けていたのだから。

何のことはない。恐れているのはコンが一番わかっている。その上で戦っていたのだ。

コンはもう充分に、立ち上がれる頼もしい仲間となってくれていたのだから。

「強さ、か」

リウはコンの言葉に自嘲気味に呟き、下を向いた。誰よりも強さに拘っているリウだからこそ、胸に響いた部分もあったのだろう。そしてシエルもまた、驚いたかのようにコンを見ていた。

「コン、つよい。つよくなった」

そんな事ありませんよ、とコンは頭を振る。

「私よりシエルさんの方が強いですよ」

「ううん、わたしは」

コンは穏やかに首を横に振る。

「だって、真っ直ぐにたったひとりの人を見てるじゃないですか」

「――っ！」

はっとなるシエル。

「ご主人様、いきましよう」

「ああ」

こちらに背を向け、ライチュウと対峙するコン。その背に向かつて、俺は告げる。

「ありがとうな、コン」

コンは何も答えなかったが、擦ったがっているような空気だけは伝わってきた。

俺もこいつらの信頼を裏切るわけにはいかない。俺の期待以上に答えてくれるのなら、絶対に裏切ってはいけない。

勝つ。

その意味も込めて、両頬を勢い良く叩く。

「行くぜ、マチス！」

一筋縄でいかないのはいつもの事だ。不利な状況を打開してこそ、萌えもんトレーナーの真価なのから。

「ライチュウ！」

こちらの準備が整ったのを見て取ったのか、マチスが指示を下す。ライチュウが覚えている技で今のところ判明しているのは雨乞いのみ。だが、状況から言えば雷は確実に覚えているだろう。

ルール上では残り2つ。一体何の技を扱えるのか。

「驚いたヨ、ファアル。正直、ここまでファイトするとは思ってなかったネ。でも」

マチスは勝ち誇る。

そう、それはまるで香澄のような――

「勝つのはミーさ！ 波乗り！」

な、んだと――。

マチスの声と共に、雨乞いによって作り出された水溜りが一瞬にして集まりだす。いや、それどころか上空からも集い、巨大な水の壁を生み出し始める。

その幅、フィールドを丸ごと飲み込む程だ。

「あ、あう……」

その頂点、中央部分にはライチュウが居座っている。腕を組み、こちらを見下ろしている。

香澄戦でも見られなかった水の質量に、コンは身が引けてしまっている。

当たり前だ。そもそもの時点で、逃げ場が存在していないのだから。リウならまだ竜巻に乗るという荒業も可能だったが、そのリウは既に戦線離脱。リウほどに機動力がないコンにとっては事実上の詰みだ。

――だが。

だがもし、あの水の壁を利用できるとするならば。

そしてそのためには――

「ますたー」

俺の袖を引く声に振り向けば、シエルが真っ直ぐに俺を見ていた。そして、頷いた。

「シエル、お前」

シエルは水の壁を指差し、

「コンまけるとおもう」

あっさりとコンの敗北を告げた。

おいおいおい。

しかしシエルは続けて、

「でも、わたしならかてる」

だって――

「ますたーがいるから」

俺はそのシエルの答えに、一瞬ぼかんとってしまふ。

やがてすぐに笑いがこみ上げ、

「く、ははは！ ああ、なるほど。ははっ、シエルらしいな！」

そしてボールを取り出し、シエルを戻した。

切り札は揃った。

脳裏を巡るのは、ひとつの光景だ。剛司、香澄と使用され苦戦したあの技。

今度はこちらが利用する番だ。

以前として雨が降り続けている。止む気配のない雨は、雷の精度を上げ、水タイプを有利なものとし、炎タイプを封じてしまふ。

「コン、シエルと交代だ。戻れ！」

最初から決まっていたのだ。

このフィールドに最も適していたのは——主役なのはひとりしかないって。

つまり、

「行け！ 勝って来い、シエル！」

雨が降り続き、水がとめどなく溢れる場所に相応しい水タイプだったって事だ。

「うっし！ やるぞー！」

気合充分。さっきまでのしなだれはどこ吹く風といった様子のシエルが、やる気まんまんて目の前に聳え立つ水の壁を相手に生き生きとはしゃぎだす。

だが、これにはさすがに会場もざわつきだす。それもそうだろう、事この場面でマチスにとって最も相性の良いタイプの萌えもんを繰り出したのだから。

「水タイプ——確かに波乗りは防げるかもだけど、それだけネ。水は電気を通す。ユーの判断は間違いないヨ！」

そう、水は電気を通す。

火が水を消すのと同じように。

電気が地面に逃げるのと同じように。

水は電気を伝えてしまうのだ。

だからこそ、水タイプは電気技に弱い。元々電気を通しやすい体質になっているからだ。

だがな――

「教えてやるよ、雷使い」

これまでだって、いつだって。

俺達はそういう状況を乗り越えてきた。

「こいつはな――」

トレーナーとして、一緒に旅をする仲間としてこれだけは言える。
リウもシエルもコンも、

「お前の雷より、よっぽど痺れる奴らなんだよ！」

見せてやれ、シエル。

「ライチュウ、波乗りネ！」

波が近づいてくる。

そして同時に、

「更に電磁波！」

マチスは戦場出身だ。だからこそ、確実にこちらを仕留める方法を取る。それは雨乞いの後に雷を連発したからこそわかる。

故に、認めた相手には堅実なまでの戦法を取る。

電磁波、そして波乗り。シエルにとって波乗りは怖くない。ライチュウの決め手は、波乗りに飲まれた直後に落とす雷のはずだ。そうすれば、電磁波で痺れて動けないシエルを確実に倒すことが可能だ。

「ますたー！」

「ああ！」

勝機は一点しかない。

電磁波を喰らいながら、シエルは波へと呑み込まれる。

その寸前、

「シエル、冷凍ビーム！」

「ばっち！」

まさかここで使うとは思ってもいなかった技を選択する。

冷凍ビーム。剛司のカブトや香澄のカメールに苦戦させられた技だ。効果は簡単。その場にある水を一瞬で凍らせる事が出来る。

だが、今この瞬間において効果はそれだけではない。

「ハハ、面白いネ！」

しかしマチスもライチュウもそれだけで動じたりはしない。元よりそんな弱っちい精神なんて持つちゃいない。

何しろ一撃で勝負を決める決め球を持っているのだから。

「ライチュウ、雷！」

だから、俺は冷凍ビームを使用した。

飲み込まれる波をシエルを中心にして、シエルを呑み込んで広大な範囲で凍らせたのだ。さしずめ、鎧のように。

ライチュウの雷が炸裂する。

通常ならば一撃で敗北するはずの雷はしかし、

「What's!？」

「へへっ」

シエルに届く前に氷の壁に阻まれて終わった。

水は電気を通す。当たり前の理屈だ。水は純粋ならば電気は通さないが、普通は水に含まれるイオン等の”不純物”によって電気が伝わる。だが、氷は違う。水は氷になることで不純物を外に出す。つまり、

氷は電気を通さない。

「シエル！」

そして、氷の中のシエルが動く。

決め手を失ったライチュウへと向かい、

「水鉄砲、最大出力！ いけエエエエ——！」

氷は水で溶ける。剛司戦と同じだ。

一部さえ解けてしまえばいい。そうすれば、こちらは盾ごとライチュウを吹き飛ばせる。

「ライチュウ！」

シエルの水鉄砲によって雨雲を突き破り、氷に乗ったままライチュウが持ち上げられる。

ライチュウの視線は定まらない。

雨雲に覆われた場所から明るい場所に急に出たのだ。視界が定まるまで若干ながら時間がかかるのは俺達と同じだ。

その瞬間に、

「シエル！ 下がれ！」

「らじゃ！」

ライチュウを支えていた水鉄砲は消える。

つまり、氷ごとライチュウは落下を始める。

更に雨乞いの効果はまだ続いている。

空いた空間に鬨ぎ寄る雨雲によって、ライチュウは眼下の様子をつかめない。雷は——封印された。

だが、まだだ。これだけで斃れるライチュウではない。

「シエル！ 水鉄砲！」

俺は真っ直ぐに、雨雲を指し示す。

「まだネ！ 終わらない、ライチュウ！ 雷！」

雨雲から落下してきたライチュウは、水鉄砲によって生じた豪雨にも似た水しぶきの中、多少のズレはあったが体勢を立て直していた。自分が持ち上げられた方向とシエルが下がった場所を予想し、いつでも攻撃態勢に入れるように準備したのだろう。

だが、それよりも俺達の方が速い！

「ライチュウより上、冷凍ビーム！」

「ら、じゃー！」

放たれた冷凍ビームは、周囲に降り注ぐ雨を凍らせながらライチュウの上空へと吸い込まれ――

「まさか……！」

シエルによって一部だけ豪雨のようになっていた空間を丸ごと氷の礫へと変えた。

何千何億の粒が氷となってライチュウを襲う。雨ならばまだ構わないが、固体となつてはライチュウとて無視は出来ない。その証拠に、ライチュウが空中で身悶えている。

「シエル！」

「はいな！」

俺は真っ直ぐに手を伸ばす。

「水鉄砲、最大出力！」

「ぼっちお任せ！」

シエルの最大出力の水鉄砲が落下してきたライチュウを呑み込み、そのままジムの壁へと突き刺さる。

決めてやれ、シエル！

「冷凍ビーム！」

ライチュウを飲み込んだ水鉄砲ごと凍らせる。

急激な温度低下によって、ドライアイスのように氷の湯気が発生し出す中、現れたのは氷に呑み込まれたライチュウの姿だ。

「oh……」

勝負は決した。

愕然とするマチスに向かって告げる。

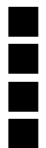
「――五体目、撃破だ」

「げきはー！」

雨乞いによって生じていた雲が消え始める。雲間から差し込む光は、さながら祝福の光のようですらある。

「ナイスファイト、ファアル」

こうして、クチバシティジムの戦いは幕を下ろした。



空が、青いな――。

クチバシティジムから出てまず最初に思ったのが、それだった。
途中からずっと雨雲の中にいたのもあって、余計に空気が美味く
感じてしまう。

「やったな、シエル」

「うんっ」

何かを乗り越えたのだろう。シエルは今までの元気を取り戻して
いた。

そして、

「……はあ」

元気が無いのが我が相棒である。

「どうしたんだよ」

「――ちよっと、ね」

俯いたリウについているグレーバッジも心なしかくすんでいるよ
うに見える。

確かに、今回負けたのはリウだけだった。

いつかわした約束を全然守れていない。俺は――まだまだだ。

「リウ、そのな」

「ファアル！ 良いファイトだったヨ！」

と、空気を讀まずに迷彩服のごつい男が現れる。

先ほどまで激戦を繰り広げていた男は、豪快に笑っている。まるで
十年來の友のようなその様子に、話の腰を折られたというのに俺
も自然と笑みがこぼれてきてしまう。陽気な奴ってのはこれだから
困る。

「ああ、ナイスファイト、ジムリーダー」

そして、握手を交わす。大柄な体格のマチスの手は、やはり大き

かった。

「後、ミーに勝利した証ダヨ」

差し出されたのはオレンジバッジ。クチバシティジムを勝ち抜いたトレーナーに与えられるバッジだ。

これで通算3個目となる。

俺はそのバッジをシエルに渡す。

「ほえ？」

「お前のだよ」

いいの？

首を傾げているシエルに頷いて返すと、ぱあっとシエルが華やいだ。

「やたー！」

バッジを持ってとび跳ねるシエルを見ると、マチスがヤマブキ方面を指さした。

「今、ヤマブキで少しだけ事件が起こってるネ。出入口は封鎖されてるから、イワヤマトンネルを突っ切るのがベターだヨ」
なるほど。

イワヤマトンネルか……ヤマブキシティが出来る前に利用されていた天然の洞窟だったはずだ。

こりゃまた、準備が必要そうだ。

「わかった。気を付けるよ」

少しだけ遠回りになるが、仕方ない。

俺はマチスに踵を返し、そして呼び止められる。

「ファアル。ユーなら気付いていると思うケド」

その語尾は、言いにくそうに消えていった。

何だ？

俺が問いかける前に、

「――気にしないでいいヨ。またバトル、OK？」

「ああ！」

マチスの中で決着がついたらしい。

釈然としないものを感じながら、マチスに背を向ける。

コンにつけてもらったのか、シエルの胸にはオレンジバッジが輝いている。

そして――

「……私は」

そんなシエル達を見て立ちすくんでいる相棒がひとり。

俺はリウに歩み寄り、

「何？」

「いや」

いつものように不機嫌な様子で振り向いたリウに言葉を濁した。

強く、か。

残るバッジは5つ。

「強くなるうぜ」

「――うん」

答えた声は、どこか遠く感じた。

こうして、クチバシティジムの戦いは終わった。

次の目的地はイワヤマトンネル。カントー地方でも屈指のトンネルに俺は挑む事になったのだった。

〈続く〉

第十二話 イワヤマ——中は真っ暗、お先も真っ暗（前書き）

イワヤマトンネルはその昔、フラッシュ無しでも画面の光量を調節すれば通れるようになるという裏技が……！ まあ、道覚えたら真っ暗でもみんな進めるようになったっちゃうんですけれども。

第十二話 イワヤマ——中は真っ暗、お先も真っ暗

クチバシテイでの戦いを終え、俺たちは再びハナダシティへと戻ってきてきた。理由は簡単、シオンタウンへと繋がる天然の洞窟である岩山トンネルへと向かうためだ。

本来ならばヤマブキシテイに行く予定だったのが、どうやらロケツト団が何か騒ぎを起こす情報があったらしく、警備が厳重で入れなかった。ヤマブキとの連絡通路に入ってみたら本当に入れないどころか隣のリウを見て怪訝な目をされた後に捕まりかけた。何故だ。

「ふーん、ちゃんと道はあるのね」

「ああ。一応今でもちゃんと使われてるしな」

岩山トンネルの近くには発電所もあったはずだ。そういった施設のためにも道はきちんと舗装されている。

地図を広げてみると岩山トンネルの前には萌えもんセンターもあるらしい。まずはそこを目指すでしょう。

俺たちはさっそくハナダシティで洞窟を抜けるために必要な道具を買い揃え、岩山トンネルへと足を向けた。

「それにしても……」

「何かピリピリしてるわね」

「だな。何かあったのか？」

途中出会ったトレーナー達と戦っていると、彼らがどうにも殺気立っているというか緊張している空気を感じ取れた。何がというわけじゃなく、例えるならジムリーダーと戦うかのような肌が焼け付くかのような緊張感だ。

そして何度目かのバトルの後、岩山トンネルの入り口近くにある川沿いまで来た時だった。

「ちっ、どいつもこいつも雑魚ばかりか、クソが」

「あん？」

舌打ちと共にガラの悪い言葉を吐き捨てていた男がいた。

黒一色の服にセンスの悪いベレー帽のような帽子に、真ん中にかでかと書かれた『R』の文字。俺以上に捕まりやすい格好は忘れるはずもない。

「――何泣いてるのよ」

「いや、少し古傷をな」

「あ、そ」

そんな事を言っていたからだろうか、ガラの悪い男は俺たちに気付いたようだった。

ポケットに手をつ突っ込み、猫背で足を引きずりながら歩いて来る。どこのチンピラだよ。

「おい、てめえ」

「ああ？」

メンチを切ってやる。

「あんたの方がよっぽどチンピラじゃない」

片眉を吊り上げて、下方から睨みつけるようにして顔を上げる。

「んだコラ。センスの悪い服着やがって」

「そこは関係ねーだろ！」

「自分でもダセェって思わねえのか？」

「……う、うるせえ！」

なんだ、凶星だったのか。脱ぎ散らかせばいいのに。

チンピラ（仮）は俺の隣にいるリウを見て、

「おい、そいつ寄越せ」

「断る」

「ちっ、テメエみたいなチンピラが持っても使えねえだろうが」

「知るか」

もう一度男は舌打ちする。

ったく、これだから空気の読めない似非チンピラ風情は……。

リウをちらりと見やると、チンピラ（仮）と俺とを交互に視線を彷徨わせていた。

「やるとかやらないじゃねえんだよ、チンピラ。いいか」

バシッ、と効果音付きで指を向けて告げてやる。

「こいつは俺の相棒だ！ これまでもこれからもお前のもんじゃ無えんだよ！」

「――ふえ？」

何か隣でリウが素っ頓狂な声を上げていたけど、まあいいか。

「はっ、くだらねえ」

チンピラ（仮）がベルトからボールを取り出す。

「萌えもんってのはモノだろうが！ 人間様に良いように使われてりゃいいんだよ！」

ボールが投げられる。

チンピラ（仮）のボールから飛び出してきたのはニドラン♂だ。目を吊り上げて俺を睨みつけている。

「リウ、いけるか？」

ここまでされて黙ってるわけにはいかない。絶対にボコって身包み剥いで川にぶち込んでやる。

が、いつもなら自信満々で返ってくるはずの言葉もなく、

「――リウ？」

「相棒……相棒……あいぼー」

両手を頬に当ててぶつぶつと呟いていた。

たぶん、さっきの言葉が何かに触れてトリップしたらしい。珍しいもんだけど。

仕方ない。

「シエル、頼む！」

「あいさー！」

ニドランは雄と雌共に毒針がある。双方共に近接技が多いため、こちらにも近付いて攻撃するのは毒を受ける事を意味する。

対するシエルは水と氷、両方の遠距離攻撃を備えている。

「いけえ、ニドラン♂！ 毒針だ！」

が、

「わかってんだって」

狙いは最初から俺にしか無いのもわかってる。

こっちへと真っ直ぐに走ってくるニドラン♂。その速度は俺が走って逃げるより余程早い。半分獣みたいなもんだしな。

「シエル、地面に水鉄砲！」

「あいさ！」

すぐに理解してくれたシエルは、俺とニドラン♂との間に水鉄砲を放射してくれる。

「あん？ バカにしてやがんのか？」

いや――

「裸にしてやるのさ」

ニドラン♂が水に濡れた地面へと突入する。

「シエル、冷凍ビーム！」

そして為す術なく足元を凍らされ、つんのめる。それどころか、水たまりに足を踏み入れていたせいか、がっちり固定されてしまっている。

だが所詮は即興で作ったトラップだ。もがけば時間はない。

「水鉄砲、最大出力！」

シエルをニドラン♂と一直線に重なるような位置へと導き、氷もろともにニドラン♂を呑み込む。いや、それだけじゃなく、後ろにいたチンピラ（仮）も一緒に吹っ飛ばしてやった。

「ついでに冷凍ビーム！」

そしてチンピラ達は仲良く凍りづけになった。実に寒そうだ。

「ありがとな、シエル」

「ういういー」

ボールに戻し、改めて振り返る。

冷たい風に当たったためかどうかわからないが、ようやくこっち側に戻ってきてくれたようだ。

「はっ、さっきの奴は！？」

答える代わりに無言で指さす。

両手両足を開き、驚愕の表情で氷漬けされている姿は実に無様だ

った。

さすがにこれは可哀想だと主犯である俺でも思う。

「ふむ……」

岩山トンネルに近いのか、川はすぐ側にある。

リウに目配せし、

「その氷を丸ごと川にぶち込めないか？」

「出来るけど……え、やるの？」

「このままだといいつ風引くだろう？」

リウはしばし半眼で俺を見つめ、

「あんたの方がよっぽど悪の組織みたい」

「とか言いながらやるんだからー」

「ふんっ」

さっきのモノ発言でリウも少しばかり苛々していたのは確かなんだろう。凍らされた氷を丸ごと、川へと向かってふっ飛ばしていた。

出来の悪いオブジェのように凍った団員が浮かび上がる。

良き旅を。

俺はチンピラ（仮）の新たな旅立ちに敬礼を捧げ、トンネル入口付近にある萌えもんセンターへと向かった。

その様子を物陰から見ている瞳があった。

「じーっ」

わざわざ風下に陣取り、気配も出来る限りけしてその影はファアルの行動をずっと見、やがて岩山トンネルへと消えて行く姿を確認してから後に続くようにその影も後を消した。



萌えもんセンターのドアを潜ると警察がいっぱいた。

思わず回れ右しそうになったのを堪え、その場に踏みとどまると

入ってきた俺に視線が一気に集中した。

何だろう、このアウェイ感。

「な、何だ？」

そして俺を見て仕事に戻ったのが全体の8割。訝しそうに目を潜めたのが1割。近付いてきたのが1割。

何が面倒って、その近付いてきた割がどう見ても確信しているかのような視線だった事だ。

「よう、クソガキ。久しぶりじゃないか」

「んげっ、やっぱあんたか」

出会えばギャラドスですら目を逸らしそうな程イカツイ顔をしたおっさんが人懐っこい笑み（自称）を浮かべて近付いてくる。この時点で既に逃げ出したいが、後ろを向くと何かしらの理由をつけて拘束してくるからたまったもんじゃない。

一緒に入ってきたリウは露骨に嫌そうな目で俺を見上げ、「知り合い？」と否定してくれと言わんばかりだったが、生憎と俺が答える前に両手がカシャリと冷たい輪っかに包まれた。

「……おい」

「幼女誘拐の現行犯で逮捕だな」

「ちげえよ！」

「犯罪者はみんなそう言うんだ、フアアル」

「いかにも残念ぶった声音のくせに顔が満面の笑みじゃねーか！」

「まあ、そう言うな。詳しくは奥で聞こう。な？」

こっちの言う事になぞ耳を傾けずに強引に連れ去っていかうとする熊オヤジこと熊澤警部。見た目通りの体格の良さからくる力が俺をつかんで離さないし離してくれないから実に困った。

「お嬢ちゃん、もう大丈夫からな」

「えっ、と……」

リウはしばらく俺と熊オヤジとを間に視線をうろつかせ、

「私は別に誘拐されたわけじゃ——」

「フアアル！」

「な、なんだよ」

ようやく間違いに気付いたか。

熊オヤジは俺に感心したような褒めるかのような視線を向け、

「どうやって調教したんだ！俺にも教えてくれ！」

「――リウ」

「うん」

叩きつけろ

熊オヤジが正気に戻ったのは、それからしばらくしての事だった。



萌えもんセンターから徐々に警官がいなくなり、数人になった所で熊沢警部は目を覚ました。

指揮系統はちゃんとなっているようで、このおっさんがいなくても何とかなるらしい。

……大丈夫なのか、この組織。

「いっつつ、あん？どこだここ」

リウによって傷めつけられた腰をさすりながら目を覚ました熊沢警部は、また取り乱すのかと思いきやすぐに仕事モードに入った。

近くにいた部下の警官をひとり呼びつけ、肩を叩いてから何やら耳打ちしている。

俺はといえば熊沢警部が倒れている間に準備を整えていたため後には出発するだけなのだが、ロケット団も気になる。ヤマブキシティの件と無関係とは思えないし、注意をしていきたいしな。

すると話し終えた熊沢警部が俺の方へと改めて向き直り、

「ま、冗談はさておいてだ。ヤマブキが通行規制かかっているのは知ってるか？」

「ああ。マチスに聞いた。何かあったのか？」

「いや——」

守秘義務というのものもある。偶然熊澤警部と知り合いだから少し踏み入って聞けるだけで、俺だって本来はただの一般人だ。おいそれと話すわけにもいかないのくらいはわかる。

「俺から振っておいてなんだが、詳しい事は言えん。ただ、ロケット団の活動が活発になってきているのは確かだ。特に——」

熊澤警部は一度萌えもんセンターの外——岩山トンネルの方へと視線を向け、

「あそこは暗いからな。気をつけてくれ」

故郷であるマサラタウンに帰ってくるまでの短い間だが、熊澤警部には世話になった。今はもう成長して無茶をしなくなったとは言え、忠告はありがたく聞いておこう。

「ああ、わかった。ありがとな」

「やめろ、お前に感謝されると気持ちが悪いぞクソガキ」

「うるせえ」

これ以上はもう言い合いにしかならなさそうだ。俺もさっさと出発するとしてよう。

そう思って俺が背を向けた時だった。

「待って！」

引き止めたのは誰でもない、リウだった。

珍しく大声を上げたもんだから珍しいなと思っていたら、リウは真っ直ぐに熊澤警部を見つめていた。

「ロケット団って何なの？」

「あ——」

熊澤警部は「自分でも気が付かなかった」とでも言うように禿げかけている頭をかきながら俺へと視線を向けてくる。どうする、と視線で訊いてきているのがわかったんで、頷いておいた。

仕方ない、と呟き話を始める。

「ロケット団ってのはここ三年くらいで急に力をつけてきた組織だ。

奴らは力こそ萌えもんの存在意義って思ってたやがって、トレーナーから力づくで萌えもんを奪って自分たちの戦力にしたり、道具のように扱って使い潰したりしている。そこらのチンピラよりよっぽど悪い、犯罪者集団だ」

「……力が存在意義」

それは儚くも、俺やリウと似ている気がしていた。目的や手段そのものは違うが、求めているものはきつと同じなのだとわかる。

だからこそ、俺はロケット団を認めるわけにはいかない。力を求めるからこそ、奴らのやり方を認めてはならない。

「あんたも気をつけろ。こう言っちゃなんだが、あんたは珍しい萌えもんだからな。狙われないとも限らない」

リウは熊澤警部の忠告も聞こえていないようだった。

「……リウ」

強くなる。

そのために戦い続けているリウにとって、もしかしたら――

「いや、」

湧き上がった憶測を否定する。そんな事はないと思いつむ。

俯き、何か思考し始めているリウの背を見るにはそうする他なかった――。



岩山トンネルはまさしく天然の洞窟、という印象だった。

お月見山と比べると岩肌が顕になっっている場所は多く、人の手が全く入っていない。そのため珍しい萌えもんも多く、イワークやゴローンといった岩や地面タイプが見られやすい。

マチス戦は何とか勝利出来たが、やはり地面タイプは戦力として是非とも欲しい。リウ、シェル、コン――みんな仲間として頼もしいが、それだけでは勝てない闘いはやはりあるし、これから先に挑

むジムリーダー達もこれまでと同じように一筋縄ではいかないのは間違いない。

戦力増強は必須なわけなのだが……

「暗っ！ 先が見えねえ！」

真っ暗だった。一寸先も見えないくらい真っ暗だった。

入り口付近はまだ日光が差し込むだけの余裕があったのだが、中は完全に洞窟と化してしまっているためか、どこをどう見ても暗い。暗いのしか見えない。

だが待てよ。これだけ暗いと合法的にお触り出来るんじゃないかなろうか？

考えれば考えるほど素晴らしいのだが、さすがにやるとお縄を頂戴するのは間違いない。血涙を流して断念する。

「コン、これに火をつけてくれるか？」

「はい？ これですか？」

コンの声がどこから聞こえてくる。「それぞれ」と俺が相槌を打つと、次の瞬間には俺が火だるまになっていた。明るいね。

「うわあっちゃちゃっ！（ごろごろ）」

地面を転がりまくって火を消した後にはシエルを出せば良かったと後悔したがもう遅かった。

とりあえず安全策のために入り口付近まで戻り、必死に謝ってくるコンにもう一度お願いしてランタンに火をつけてもらおう。持ってきて良かった。

火をつけて改めて中に入ると淡い光によって洞窟内が見える程度にはなった。

天然の岩肌が露出し、人の手もほとんど入っていないのか歩きにくそうだ。ただ、その中でもトレーナーの影がチラチラ見えるのでバトルになるのは間違い無いだろう。

「――！」

ただ、明かりに照らされる影を見て毎回肩をびくつかせているリウを見ていると、驚かしたくなってくる。

やるかやらないか。

その狭間で俺が悩んでいた時だった。

「そこのお前！」

「きゃあああああ——っ！」

洞窟内で反響する声に隣を歩いていたりウが驚き、悲鳴を聞いた
と思っただけ何故だから俺は暗闇に放り出されていた。

うむ、恐怖でぶっ飛ばされたらしい。

あー、ランタンどうすっかなー。

放物線を描いて（おそらく）宙を舞っている俺が最後に見たのは、
腰に手を当てて俺へと向けて武器を向けている萌えものの姿だった。



気が付けば真っ暗でした。

案の定というか当たり前のようにランタンは壊れていたもので、替
えのランタンを取り出してもう一度コンに火をつけてもらう。

すると、目の前に申し訳なさそうな顔のリウが立っており、ちら
ちらと視線を彷徨わせながら俺を見ていた。

「俺なら大丈夫だって」

「……う、うん」

頭に手を置くと振り払われなかった。やっぱり不安みたいだ。

「で、さっきの奴は？」

ランタンを掲げて周囲を照らしてみると、さっきと同じ場所で石
化でもしたかのように律儀に同じ格好で萌えもんが立っていた。

用はきつと……あるんだろうなあ。だって俺をガン見してらっし
やるんだもの。

元々が暗いためか判別はつきにくいが、手にした武器で予想はつ
いた。

カラカラ——地面タイプの萌えもんだ。骨のヘルメットをばっち

り被っており、どこか過ぎ去った痛い時期を彷彿とさせてくれる。
しかし愛らしい姿とは裏腹に、骨を使った個性的な技を主体に戦う
ファイターでもある。

そのカラカラが俺へと向かって武器を向け、

「成敗してくれる！」

何やら格好いいセリフを吐いていた。

が、俺としては成敗される謂れなんて全くないほど清廉潔白で紳
士的な生活を送っているので

「人違いです」

当然のようにきっぱりと答えるしかない。

「嘘つけ！」

俺の心はたった一撃でズタボロにされた、なう。

「間違っていないじゃない？」

「えっ」

真顔で振り返ったら信じられないという顔をされた。世の中は理
不尽だ。

が、それが致命的な隙になったらしい。

「覚悟！　ちよあああああっ！」

「ごぶるあ！」

骨を投擲され、当然のように気を取られていた俺は為す術もなく
命中し、吹っ飛んだ。本日二度目、もう寝たい。

暗い中で岩肌とキスをかまし、地面に崩れ落ちた俺へと勝ち誇つ
た笑い声が響く。

「あははは！　これに懲りたらお墓を荒らすのはもう止めるんだな
！」

「あ、こらっ！」

リウの声も虚しく、どうやらカラカラはどこかに走り去っていっ
たようだった。

砂利の混ざった唾を吐き捨て俺が起き上がると、途中手放したラ
ンタンをキャッチしてくれたリウが駆け寄ってきてくれた。

「大丈夫なの？」

「い、てて……何とかな」

心配そうな表情に向かって強がりの笑みを浮かべ、立ち上がる。喧嘩に明け暮れた黒歴史に比べれば、この程度別にどうってことはない。

「先に進もうぜ。そろそろ日光が浴びたくなってきた」

「うん、同感」

さっきのカラカラも気になるが、今は洞窟を抜けなければ。

——それにしても、お墓、か。

カラカラの言葉に引っかけがないと言えば嘘になる。

おそらく人違いだと思うが、萌えもんの墓を荒らした事など生まれて以来一度もない。あのカラカラは野生のようだったし、知らずに墓を踏みつけていた可能性もあるにはあるのだが……。

「どちらにせよ今は関係ない、か」

ふと岩山トンネルの先にあるシオンタウンを思い出したが、頭を振って忘れる。聞いた話では萌えもんのお墓があったと思うのだが、用事がない俺には関係無いだろうしな。

「さっきのあいつ？」

「まあな。一度狙われたわけだし、次が無いとも言えないだろう？」

「心当たりとかないの？」

「見ず知らずの萌えもんに成敗される覚えなんかないって」

「ふうん」

「何でリウさんは半眼で俺を見ているんですかね？」

なんて言い合いながらトレーナーを倒しつつ進んでいく。

しかし奇妙なのが、道中に出くわした萌えもんがほとんどいなかった事だ。まるで隠れているかのように、息遣いのようなものは感じるのが一向に出会えない。

——隠れなきゃいけない奴らでもいるのか？

ふと思いついたのが問いへの答えは、出口付近にまで踏破した時に訪れた。

「放せ、貴様ら！」

洞窟内で反響して耳まで届いたのは、忘れるわけもない俺をぶっ飛ばしてくれたカラカラの声だ。

明かりで照らしてみたが、視界に入っている中にはいないようだ。

「こ、の！ お前らなんか——ひゃう！」

足掻くような声と一緒に何か叩かれるような音も反響する。心なしかトンネル内がざわついた。

「リウ」

「……わかってる」

さすがに放ってもおけない。

俺とリウは頷き合って出口付近へと向かって走りだした。



出口付近まで行くと見覚えのあるシルエットがもみ合っていた。

ひとりはカラカラ。自慢の骨で俺をぶっ飛ばしてくれた奴だ。忘れるわけがない。

そしてもうふたり。カラカラを後ろと前から掴みかかっているのは黒くてダサい服を着ている噂の奴ら。

「誰がお前ら何かと一緒に行くか！」

必死に抵抗しているのが見て取れるが、相手は大の大人がふたり。いくら萌えもんでもさすがに分が悪い。身体も小さいし、二人がかりで力づくになられると不利になるのは当たり前だ。自慢の骨をあっさりと奪いとられ、地面へと叩きつけられる。

「あ……」

その骨を見て呆然とするカラカラ。

ロケット団はそれが大事な物だとわかったのだろう。嗜虐的な笑みを浮かべ、カラカラの前で大きく足を振り上げる。

「や、やめてっ！」

後ろから掴んでいた男を振り払い、骨と足の間に身体を滑り込ませるとカラカラの背中に容赦無く足が叩きこまれた。

「――ごほっ」

むせるカラカラの様子から、それが手加減無しの一撃だったのは見て取れる。

しかしカラカラは怯む事なく男へと視線を向ける。それがなお一層、男の嗜虐的な精神を刺激したようだ。

「はっ、いつまで耐えられるんだア？」

「う、ぐっ……！」

よっぽど大切な骨なのか。

ただ一方的に攻撃されただけの俺にはさっぱりわからない。

わからない。が――

「行くぞ」

「行くわよ」

期せずとも、俺とリウは同じ事を思っていた。

手加減無しにぶっ飛ばす。

俺とリウは同時に止めていた足を動かし、飛び出した。

「リウ！」

「任せて！」

敵はふたり。俺とリウは別々の相手を目指して距離を詰める。

最初に気付いたのはカラカラの背を抑えていた男だ。蹴られているカラカラを見ていたようだったが、いち早くこちらへと気がついた。

だが、遅い。

その瞬間には既にリウの距離だ。

「ちっ、何だお前ら！」

ロケット団その2がボールへと手を回す。だがそれよりも早くリウが捉え、叩きつける。手にしていたボールが男の手からこぼれ落ちる。為す術なくリウに吹っ飛ばされた男は洞窟の壁面へと突き刺さった。

「後よろしく！」

洞窟に反響するように声を張り上げる。すると、心なしかざわつきが大きく一度波打ったように感じた。

はっ、悪くない。

「あんだ？」

カラカラを踏みつけていた男はまだ反応出来ていない。あれじゃダメだ、全然ダメだ。

自分より弱い奴をいたぶりすぎて、何も反応できちゃいない。

「正義の紳士様だ、覚えとけ」

近付いてくる足音に振り返ったその横っ面に、思いっきり拳を叩きこんでやった。

「があっ！」

獣のような声と一緒に男の体が一瞬浮いた。その隙に――

「幼女は虐めるもんじゃない、愛でるもんだ。覚えとけ！」

無防備な横腹を膝で蹴り上げる。更に勢いを利用してもう一度右拳を叩きつける。今度は地面のオマケ付きだ。

「ご、ふっ」

体重丸ごとかけて地面に叩きこんでやったおかげか、男は白目を向いて気絶した。

なんだ、弱っちいなこいつ。

「うし、こんなもんか」

バッグから縄を取り出し、亀甲縛りにして放置する。いつか使うかもしれないと思って練習していた縛り方がまさかこんな場所で使えるなんて、現実はずくづくわからない。

更にリウにぶっ飛ばされた後に野生の萌えもん達によって引っかけ傷やら何やらつけられまくったロケット団員を向き合うように縛り上げ、仲良くさせてからボールを遠く離れた場所に置いておいた。警察が来るまで暗がりの中で仲良くしてもらっておこう。

で、だ。

「あっ、お前……」

まだ痛むのだろう。声も絶え絶えといった様子だった。

「よう、無事か？」

そんなカラカラの前へにどかっと座ると、びくっと肩を震わせた。

「う、うん。大丈夫」

「そうか、そりゃ良かった」

何があったのかはわからないが、通りすがりのトレーナーとしてはこれでいいだろう。

大切に抱えている骨が守れて良かった。

俺は一度だけカラカラの仮面を軽く叩いてから立ち上がる。

出口はすぐそこだ。シオンタウンで連絡してロケット団を引きとってもらわないとな。

「あっ……」

ここは洞窟だ。

だからこそ、小さな眩きだって反響し反響する。

カラカラの消え入りそうな声は俺の耳まで届き、足を止めて振り返るには充分な程、涙に包まれていた。

「す、すまない！ 頼みがあるのだ！」

カラカラはその仮面の下に決意を込めていた。

いたぶられても決して折れない心を持っていた。

そんなカラカラが四つん這いになり、額を地面にこするかの如く下げ——土下座で俺に向かって懇願したのだ。

「ボクの母様を——助けてくれ！」

それはシオンタウンの風と共に、新たな波乱も運んでくる言葉だった。

〈続く〉

第十三話 シオン——迷う者と道を歩む者（前書き）

シオンタウンです。が、ストーリーの都合により今回はあまり関わりません。心理描写多めです。

第十三話 シオン——迷う者と道を歩む者

岩山トンネルを無事に通り抜け、最後に何やら爆弾発言を受けたりはしたが無事にシオンタウンへと到着した。

到着してすぐに警察へと連絡を入れたので、今頃はさっきのロケット団員達はお縄についている頃だろう。

連絡の後、俺はその足で萌えもんセンターへと向かい、シエルやコン、そしてリウの傷を癒してもらっている間、岩山トンネルから同行してくれているカラカラと対面に座っていた。

治療を頑なに拒んだカラカラは、無料だから受けておけという俺の言葉に耳も貸さず、さもロケット団員から受けた傷が勲章だと言わんばかりだった。

俺はやれやれと諦めのため息をついて、

「な、何をする！」

強引に腕を引っ張って受付の姉ちゃんに引き渡した。

ったく、少しは体に気を使え。

リウ達を含めて治療には少し時間がかかるらしいので、その間に町で聞き込みでもしてみよう。

「ボクの母様を——助けてくれ！」

母親を助けてくれと頭を下げられて、はいそうですかと無視出来るほど人でなしじゃない。それに、どうしてだか嫌な予感が拭えない。まるで何か自分にとっても大事な事であるかのように感じてしまうのだ。家族環境がどうかではなく、純粹に勘のようなのが小さな骨として刺さっている程度の違和感ではあるのだが……。

果たしてそれが何なのか今の俺にはさっぱりわからないが、それでも出来る事はしておきたい。

シオンタウンから一番近いのはヤマブキシティ、次いでタمامシ

シティだが――ハナダとクチバの両方から通れなかったのを考えれば、シオンとタمامシからも通行規制がかかっていると考えていいだろう。

すると、次の目的地は地下通路でヤマブキの下を抜けられるタمامシティかシオンタウンより南にあるセキチクシティとなる。

タمامシティはカントー地方でも有数の大都会だ。巨大なショッピングセンターがあり、人の出入りも激しい。セキチクシティは逆に人里離れた海に面した田舎だが、サファリパークという野生の珍しい萌えもんが生息している大きな公園がある。どちらにもジムがあり、避けては通れない道ではあるが……。

「タمامシティジムは草タイプ、セキチクシティジムは毒タイプがメインだしな。どうしたもんか」

現在の戦力を考えると、草タイプに有利な炎タイプのコンと氷タイプの技を持つシエル、そして万能タイプなりウがいるため自ずと目的地は決まってくるだろう。

――タمامシティ。

次なる目的地が決まったと同時に、俺は大きくため息をついてしまう。

個人的な理由で出来ればあまり寄りたくは無かったんだが……仕方ないか。

ふと巨大な影の中で立ち止まり空を見上げると、そこには巨大なタワーが建っていた。

ここシオンタウンの名所でありカントー地方で一番悲しい場所でもある。

萌えもんタワー。人と共に生きた萌えもんが死ぬと、ここに埋葬される事が多い。萌えもんの墓場とも揶揄されているが、長年共に生きた相棒が眠る場所とあってか人々の出入りは毎日あるようだ。

「――永遠じゃない、か。当たり前なんだけどな」

独り言ち、背を向ける。

そろそろ治療も終わった頃だろう。

買い溜めた荷物を背負い直し、俺は萌えもんセンターへと足を向けた。



「貴様、どういうつもりだ！」
萌えもんセンターに戻った俺に突き付けられたのはそんな言葉だった。

周囲の視線が集まる中、俺はきよろきよると周囲を見渡し、

「誰もいないぞ？」

「お前だよ！」

「えっ」

「えっ（。㇏。） じゃない！」

仮面を脱ぎ捨てた可愛い顔でカラカラは俺に骨先を向ける。変な言葉だ。何だ骨先って。

「ボクはここが大嫌いなんだ！ 身体中を弄られるし、撫でられるし、変な機械の中に入れられるし！」

「なっ——！」

身体中を弄られる、だと……？

「お姉さん、ここに就職するにはどうしたら——」

「言うと思ったわ！」

さすがと言うべきか。俺の言動を読んでいたリウは一瞬で懷に詰め、俺の意識は刈り取られた。

「さて、それでなんだが」

「何事も無かったように始めた……」

リウが何か言っているが気にしない事にする。

治療したてのシェルとコンも交えてこれからを相談してみるか。

「シェル、コン。大体の経緯はわかってるか？」

「おっけー」

「はい。リウさんから聞きました」

「ふむ……」

となると話が早い。

さっき買い物をしながら考えていたプランは俺たちとしてはアリなのだが、

「……やはり、無理なのか？」

カラカラにとってはそうじゃない。

目を伏せて、やはり駄目だった、と諦めの息をついた。

俺にはそれが何度も何度も繰り返した自嘲に見えた。

「当たり前でしょ。あんたには悪いけど」

「いや」

「私たちにも大事な用事が――えっ？」

リウの言葉を遮り、俺は言葉を続ける。

「手伝わないなんて言ってない。何があったのか教えてくれ」

「お前……」

そんなキラキラした目で見詰めないでくれ。困る。

「~~~~っ！ いつもいつも……勝手にしてなさいよ！」

しかしリウは気に入らないのか、席を立つとそのまま背を向け歩いて行ってしまふ。

「……リウ」

「うるさい！」

そして外へと出ていってしまった。

「参ったな……」

クチバシティジムから少しずつリウの様子がおかしいのはわかってはいたが、どうしたものかと頭をかきむしる。

寝る間を惜しんで考えても、気持ちの問題だ。こればかりは良い案が出てこない。

強くなる、というリウの願いを叶えるためにはまず俺が強くなる
なくてはいけないのだが――今の所、実践できているとはとてもじ
やないが言えない。

「いいのか？ 何ならボクは席を外すけど」

「……いや」

逡巡した後、首を降る。リウと少し距離を置きたかった。
頭を冷やすべきはきっと俺だろうから。

カラカラはそれ以上何も言わず、そっかただけ呟いた。
代わりにコンが当然のように立ち上がり、

「じゃあ私行ってきますね」

「――悪い、頼む」

後を任せて、俺はカラカラと改めて向かい合う。

「それで、お前のお袋さんに何があったんだ？」

「実は――」

そうしてカラカラは語り出した。



「はあ」

勢い込んで飛び出したのはいいけど、冷静になってくると馬鹿み
たいだった。

これじゃ、私ひとりが我侭言ってるみたい。

ううん、違う。

「私は悪くなんか……」

無いはずだ。

あいつとの旅は確かに経験になるし、トレーナーの萌えもんと戦
っていても自分が強くなっているのはわかる。

だけど、ジムリーダー戦にはほとんど活躍できてない。自分の強
さをまるで実感出来ない。

私には――自分がどれだけ強くなれているのかはつきりとわからない。

あの人に勝つにはどれほど強くなればいいのか。いつか見返してやると思ったあの姿にはいつになれば追いつくのだろうか。

「はあ」

私はもう一度ため息をつく。

そうすればこんな気持ちもどこか吹き飛んでしまうような気がして。

例えば気のせいだとしても、少しは気が紛れるんじゃないかと思つて。

「くすっ、リウさんでもため息なんてつくんですね」
だけとお節介は放っておいてくれなかったみたい。
いつか私がそうしたように。

コンは私の隣に並ぶ。

「旅に出てから苦勞ばかりよ」

このままじゃ駄目だ。

そう思つて里から逃げて。

気がついたら知らない天井だった。

側には人間がいて、どうしてだか私には同じに見えた。

まるで私と同じように――ううん、それ以上に深い深い場所に沈み込んでいるように見えてしまった。

何か切っ掛けになるかもしれない。

今でもわからないけど、そう思ってしまったのだから仕方が無い。
一緒に強くなろうって旅を始めて、随分と遠くまで来てしまった。
「? どうしたんですか?」

「何でもない」

コンは、ハナダシティよりもずっと強くなっている。

前を向いてしっかりと地に足をついて立っている。何かを乗り越えられたのだろう。

以前、コンに私は言った。

シエルは私よりも強い、と。今ではこうも思う。コンもまた、私より強いと。

クチバシテイで感じた。

一途なまでに主人の役に立とうとする姿を。

そのどれもが――強さだった。

シエルやコン達が強くなっている一方で、私の強さは――私の強さだけは――

「……私は」

「リウさん」

コンの視線を感じ、私は頭を振る。

「ちゃんと戻る。今はあいつの所に戻ってて」

「でも」

「大丈夫。ちゃんとひとりで……戻れるから」

何が大丈夫なのか。

何が戻れるのか。

言ってから胸中で自嘲の笑みを浮かべる。

「……わかりました。待ってますからね。でも、あんまり遅いと――迎えに行きますから」

言って、コンは自分の信じる主の元へと小走りに戻っていった。

誰もいなくなって、空を見上げる。

「私の強さは……私だけの強さは」

どこにあるのだろうか。

答えを見つけられぬまま、私はただ空を見上げ続けた。

遥か高みにいるあの人を重ねながら。



カラカラの話が終わり、周囲は無言の空間に包まれた。

話を直に聞いていた俺達だけじゃなく、周囲にいたトレーナーや旅人達も一様に黙りこんでしまっていたためだ。

「……なるほど。またあいつらか」

母様を助けて欲しい。

カラカラにとって、ここは敵地にも等しい場所であるのにも関わらず、頭を下げた意味がようやくわかった。

「これは俺の予想なんだが、いいか？」

「うん。何かわかるのか!？」

話によれば、カラカラが見た姿はひとつ。

黒ずくめの帽子をかぶった奴ら。即ち、岩山トンネルで喧嘩を売っていた奴らに他ならない。

「ああ。ロケット団——言ってるかわからねえけど、マフィアだよ」

「まふいあ？」

「なんつーかな……力で悪い事をする奴ら、って事だな。弱いものいじめしたり、平気で暴力振るったりする奴らの事だ」

「む、それは悪だな」

「だろ？」

しかし、やっているのは俺たちだって同じだ。

ただ、そこに本人の意思があるかないか。

——いや、違う。何もかもが善人じゃない。人がそうであるように、萌えもんだって同じだ。

他人を痛みつけ、屈服させる事に優越感を覚えるのは誰にだってある。

だけどその強さは——間違っている。

「それで、お前の母ちゃんはどこにいるのかとかわかるか？」

俺の問いに、カラカラは力なく首を横に振った。

「……わからない。ただ」

「ただ？」

「塔に連れて行く——そう聞いたんだ。母様が庇ってくれたけど、

怪我のせいでその後すぐにボク気絶しちゃって」

「塔、か」

聞けば、カラカラは岩山トンネルに住んでいたらしい。そして襲われ、母親は連れ去られ、カラカラ自身は咄嗟に身を呈して庇ってくれた母親によって難を逃れたがその時に受けた傷で意識を失ってしまったようで詳しい場所まではわからないようだった。

「うん。でもボクにはみんな塔に見えて……」

だろうな。

カラカラの身長はリウと同じくらい——俺の腰あたりまでしかない。人間で言えば小学校に入るか入らないかくらいの大きさだ。その高さなら、二階建ての家だってまるで塔のように変貌する。

だが、人間である俺の基準で考えてしまえば塔と言われて連想されるのは三箇所だ。ここ、シオンタウンの萌えもんタワー、タマムシシティに聳えるビル群のどれか、そしてヤマブキシティのシルフカンパニー本社。状況的に見れば萌えもんタワーから当たるのが一番なのだが……。

「詳しい場所まではわからない、か」

「……うん」

肩を落とすカラカラを横目に、俺は思考の中へと入り込む。

偶然という可能性ももちろんある。ロケット団というのはそういう組織だ。だから、今更萌えもんが誘拐されたところで怪しむ部分は何もない。

——だが。

どうしてか、熊澤警部の言葉が引っかかっていた。それに、マチスの言っていたヤマブキシティへの犯行予告。どれも関係の無い事象だとはどうしても思えなかった。

情報が必要だ。

カラカラを救うにしても助けるにしても俺には圧倒的に情報が足りていない。

しかしこれ以上寄り道もあまり出来ないのも事実だ。

時間的に余裕はあっても、リウには余裕がない。強くなる事に焦っている――俺にはそう感じられる。

となれば……

「タمامシシティしかない、か」

萌えもんタワーはきちんと管理人もいる、人の手で管理されている塔だ。ロケット団のような特徴的な人間がアジトにしたというのは正直考えにくい。

また、消去法でヤマブキシティも選択肢としては考えにくい。厳重な警備の中、カラカラの母親と共に潜入するのは厳しいだろうからだ。もつとも、ボールに入れてしまえば問題はないのだろう。そして現状最も可能性として高いのは残りタمامシシティとなる。あの街なら人も多いし、情報も手に入りやすいはずだ。シオンタウンは小さな町だから情報は即座に人の口から耳へと駆けま巡る。情報があればすぐに噂好きによって広められ、住人のだれかが知っているはずなのだ。

しかし買い物ついでにおばちゃん達と話してみたものの有益な情報は何一つとしてなく、強いて言えば萌えもんタワー管理人の藤老人がここしばらく帰っていないというものだけだった。藤老人は時々萌えもんタワーに登っては数日間に渡るメンテナンスや供養を行い、帰ってくるそうだ。そのため、今回もそうした理由で家を空けているのだろう。

「――そうだな、タمامシに行くか」

リウのためにも。

胸中で付け足して、俺は腰を上げる。

ずっと座っていたためか、思い出したように骨が小気味良い音を立てた。

「たまむし……?」

「ああ」

俺は頷いて告げる。

「ここから西に行ったら見えてくる大きな街だ。そこならきつとお

袋さんの情報も見つかるはずだ」

「……でも」

カラカラは迷っているようだった。

無理もない。助けてくれと頼った相手が別の街に行こうと言い出しているのだから。

こいつも同じなんじゃないか？

そう思われてしまわないだけまだマシなのかもしれない。

「人が多い街だ。ここよりもずっと多い。……大丈夫か？」

カラカラは人間不信になっている。

もちろん野生の萌えもんは警戒心をむき出しにしているが、カラカラの場合は人為的に植えつけられた人に対する恐怖だ。

だからこそ人の行動で容易く決れる。もっと傷口を深めてしまう。

「例えついてこなくても、俺はタマムシでお前のお袋さんの情報を探してここに帰ってくる。無理はしなくていいんだぞ」

俺の言葉を聞いて、カラカラは僅かに考えこみやがては首を横に振った。

「ごめん。やっぱりボクは」

人を信じられない。

人が怖い。

自分の目の前でロケット団を倒してくれたからこそ俺とは話してくれているのだろうが、それでも辛いのだろう。

「わかった。じゃあ、頼みがある」

「えっ」

もしカラカラがシオンタウンに残ってくれるのなら。

ひとつだけ提案があった。

「ここシオンタウンで情報を集めてくれ。ほら、塔もちょうどあるんだしょ」

今は見えないが、塔が見える方に向かって顔を向ける。

「二手に別れて調べよう。そうすりゃ手間は半分で効果は倍だ。だろ？」

タマムシシティなら少しくらいはわかる。それに……ひょっとしたら協力してくれそうな人間にもひとり心当たりがあった。

だからこそその二手。

萌えもんタワーもちろん気になるが、リウの事も気がかりだった。

どこかで自信——いや、強さに繋がる何かを見つけない。旅立ちを決めたあの日からずっと俺を支えてきてくれたリウを今度こそ俺が支えたい。シエルが加わり、コンも加わって賑やかになったが、今でも俺の隣を歩いているのはリウだ。どんな絶望的な状況でも、跳ね返してくれたのはリウなのだ。

「……報いなくちゃな」

決意を新たに行動を起こす。

カラカラも理解してくれたようで、シオンタウンは任せてくれと胸を叩いていた。

道は決まった。

しかしこうして歩みだした道は——やがて大きく俺へと襲いかかってくるのだった。

＞続く＜

【第十四話】タマムシ——向かい合えない弱さ（前書き）

タマムシシテイです。が、今回もジムには挑まず。みんなのエリカ様は次回になります。そろそろ彼らがメインで絡み出します。

【第十四話】タmamシ——向かい合えない弱さ

カラカラと別れて、俺たちは一路タmamシシティへと向かった。

シオンタウンから西へ続く八番道路を歩いていけばすぐに地下通路が見えてくる。地上を真っ直ぐ更に西へと行けばそのままヤマブキシティへと入れるが、現在は封鎖されていて入れない。なので、俺たちは迷う事なく地下通路を選んだ。

知っている道なので迷わず進む俺に、隣を黙って歩いていたリウは呟いた。

「何かいつもより迷わず進んでる」

「まあな」

俺とは目を合わせようとしていないが、俺が前を向くとチラチラと視線を向けられているのが何となくわかる。

気まずい気持ちはわかるので、俺は努めて普通の声音と態度を保つ。

「昔……って言ってもほんの一年程前だけだな。この辺りにいたんだ」

若き日の青春ってやつだろうか。

当時を思い出すと忘れたいとなると同時に笑みが浮かぶ。今なら昔を懐かしむ老人の気持ちが少ないかもしれない。

「岩山トンネルの前で会ったゴツいおっさんいただろ？ あの人とも知り合ったのがタmamシだ」

「ふうん」

それっきりリウは前を向いたようだった。

しばらく無言の時間が過ぎ、言うか言うべきか迷っていた俺は、結局口に出す事にする。

「昔はさ、俺も荒れてたんだよ」

「は？ 今もじゃないの？」

「昔は！」

嘘つけと俺を半睨みしているリウの視線が訴えてくる。

おかしいなー、今は紳士なお兄さんなのにおかしーなー。

「あー、それでだ。何していいのか全然わかんなくてよ、でも何かしなくちゃって想いばかりあってな」

だけど。

そんな俺をつなぎ止めていたのはたった一言だった。

あの時、あの場所で――言われた言葉を俺は生涯忘れないだろう。

「お前にトレーナーは無理だ。向いてない」

出来るだけ似せたと思った声音は、自分で聞いていると酷いものだった。レッド達と同じ年くらいの時に面と向かって言われたのだ。

これから夢を目指そうって思ってる子供にとってショックなはずが無かった。

はっとして振り返ったリウに苦笑を浮かべて告げる。

「そう言ったのは爺さんだ。お前も知ってるだろ？ マサラタウンで助けてくれた、オオキドの爺さんだよ」

思えば、夢ばかり見ていた俺が一番最初にぶち当たった壁だ。

そして今でもまだその壁は乗り越えられていない。ずっと……ずっとしこりのように張り付いたまま錆びる事無く俺の胸を貫いている。

「うん、何となく覚えてる」

何となくだってよ、爺さん。泣くな、涙拭けよ。

「でも俺は――諦められなかった。憧れていた人は俺にとって大切は人だったから」

今でも目を潰れば鮮やかに思い出せる。

沸き起こる歓声の中、大きく手を振る姿が。

人なつっこい笑みを浮かべてまだ小さかった俺を抱き上げ、誇らしく立っていた姿を。

「だから俺は諦めない。何度壁にぶつかろうとぶっ壊してやる。どれだけ長い間立ち止まっても、また進んでやる。馬鹿な事繰り返し

てその度に怒られて——で、ようやくわかった理由なんだ、これが」
夢を見るのに若いなんて無い。

夢を追いかけるのに遅いなんて無い。

ただ——追いかけるのを諦める事はしたくない。

俺の胸にあるのはそれだけだった。

チャンピオンになりたいわけでも、萌えもんトレーナーのトップ
になりたいわけでもない。

ただ、倒したい。

胸にある想いを突きつけてしまえば、そんな単純な願いだった。

俺はどうしようもなく馬鹿で——本当に全くどこまでも男だった
のだ。

親父を乗り越えたいと。

あの日夢見た大きな背中に自分も追いつき、追い越したいと——
そんな男なら誰もが一度は願う事を今でも願っているのだから、こ
れが馬鹿と言わずして何と言うのだろう。

「……その願いに」

リウは再び前を向き、

「私達——ううん、私を利用してるの？」

「……ああ」

そうだ。

俺はリウを利用している。

シエルもコンも……出会った仲間たちは大切だけど、俺自信の夢
のために利用しているのだ。

俺にはリウの言葉を否定は出来なかった。

「私は強くなりたい」

「ああ」

「強くなって勝たなくちゃいけない人がいる」

「……ああ」

「でも——」

その後続く言葉は無かった。

ただ、リウは一度大きく深呼吸し、胸からグレーバッジを取り外した。

——強くなれない。

バッジを手に背を向けるリウの姿からは、そんな言葉が聞こえた気がした。

「リウ……」

「返す」

リウはその場所から動かない。

俺より前で背中を向け、バッジを手にした左腕を真っ直ぐに横へと伸ばし、俺が受け取るのを待っている。

ほんの数歩。俺が二・三步進めば近付ける距離だ。

だけど、その極僅かな距離が絶望的なまでに遠い気がした。感じてしまった。

情けない事にリウからバッジを受け取る事さえも出来なかったのだ。

「——俺には受け取れない」

何故なら、そのバッジこそは絆だったから。

俺達が初めて挑んだジム戦でもぎ取った勝利だから。

まるで——受け取ってしまえば俺とリウの繋がりが消えて無くなってしまうようで。

「わかった」

そうして、リウは握っていた掌を広げる。

「あっ……」

握られていたバッジは重力に従って落下し、乾いた音を立てて地下通路に転がった。

通路内に反響する音から逃げるようにして、リウは歩き出す。

「お、おい！」

「……先に言ってる」

それだけ答えて進んでいくリウの背中を前に、俺はただバッジを拾う。

手に取れば、まだニビシティジムでの戦いが思い浮かぶ。立ち上る土煙も、イワークをド派手にやつけたリウの姿も。

「強く、か」

バッジを握りしめ、歩き出す。

俺はリウの信頼に答えられなかったのだろうか。

リウが答えてくれた信頼を返せなかったのだろうか。いくら自問しても答えは出ない。

そうして答えの出ないまま、俺たちは――



地下通路を抜けると、そこはもうタمامシティの目の前だった。しばらく弱い光量が続いていたためか太陽の光を強く感じるが、それもしばらくすれば治まっていく。

俺とリウは互いに無言なままタمامシティへと足を踏み入れる。……久しぶりだな」

大きな門の後、見えたのは見上げるほど聳え立つビル群と人々の群れだった。

忙しそうに行き交う人や、友達と一緒にあるく学生やら……萌えもんと遊んでいる子供たちの姿も見えた。

「凄い……これが街なの……？」

圧倒されているリウだったが、それも当然だろう。

ここまでの人が集まるのはカントー地方でもタمامシティだけだ。ゲームセンターやショッピングセンターなど、遊ぶための施設が多いのもその理由のひとつ。大きな娯楽施設がある街は人を引き付けやすいのだ。

「さて、まずはジム戦行くか？」

「――勝てるの？」

リウの問いに目を閉じてしばし思考し、
「わかん」

はあ、とため息をついたリウはひとりで歩き出す。

「お、おい！」

「準備、するんでしょ？」

言葉に覇気は感じられない。

何かが致命的にずれているよな気がしたが、やっぱりその正体がわからない。

わからないから、俺はただ頷くしかなかった。

「そうだな、がちり準備しないとな」

となると目指すは一箇所。カントーでも一番品揃えのあるショッピングセンターしかない。

リウに追いついて、先導する形で目的地へと向かう。

「昔、ここにいたのよね？」

「まあな。いやー、あの頃はやんちゃしと」

「そんなのどうでもいい」

「……しくしく」

「何か良い店とかないの？ 強くなる道具とか売ってる場所」

「あー」

強くなる道具。確かにある。が、所詮はドーピングだ。一時的なものではなく、資本となるような強さではない。

しかし言い淀んだ俺の態度が気になったのか、リウはギロリと視線を向けてくる。

「あるっちゃある」

「じゃあ」

「だが、一時的なもんだ。効果があるのはせいぜい数分程度だったはずだしな。それに身体にかかる負担も大きいぞ？ 連続して投与すりゃー最後には廃人だ」

お手上げだ、と両手を上げてアピールするとリウも俺の言わんとする事がわかったのか、

「あ、そ」

と肩を少し落としていた。

「……」

レベルが上がっていきなり強くなって——そんなチートでも使わない限り一瞬で強くなるなんて不可能だ。俺たちはゲームの世界にいるわけではないのだから、地道に一步步強くなっていくしか方法が無い。

もちろんリウにだってわかっていているのだろう。だからこそ、自分が強くなっているという自覚が得られなくて焦ってしまっている。

俺には仲間がいる。リウやシエル、コンという頼もしい仲間たちがいるからこそ、自分の強さを知る事が出来る。

けどリウには——まだ”仲間”がいない。たったひとり、孤独に戦っている。おそらく俺ですら——リウの近くにはいないのではないだろうか。

目的の人に勝つために。自分が強くなるためだけに敢えて孤立の道を選んでいるのだとしたら、それはとても悲しくて——強い意志だ。他人を近寄せない程の苛烈な意志は往々にして自分を孤立させ、意固地にさせてしまう。

まるで——昔の俺のようだった。

「はっ」

今更だ。

ふてくされ、勝手に腐ったのは俺自身の責任ではないか。

熊澤のオッサン含めてお節介は沢山いた。構わず手を差し伸べ、近くにいてくれた人がいた。

「——何やってんだ俺は」

だからこそ、ここにいないのではないか。

あの時俺に差し伸べてくれた人がいるように。俺も手を差し伸べればいい。

たったそれだけの事なのだ。

「リウ、こっちだ」

遠いなら近付けばいい。

離れようとするなら自分をもっと近付けばいい。

そうして、

「あっ、ちよっと……！」

離されないように手を握ればいい。

リウの手は小さかった。

俺の掌にすっぽりと収まってしまうほど小さく——儂かった。

でも、ずっと頑張ってくれていた。

綺麗な手にはマメの後が残っていて、握っていてもわかるくらいに訓練していたのがわかる。

そうまでして駆り立てる相手に嫉妬すると共に——まだまだ敵わないと思ひ知る。

俺はリウの足元にも及ばない。目指して敵わないと知って尚、何度も挑み続ける強さを俺は知らない。

だから——

「ひ、ひとりで歩けるってば！」

「……俺もいつか同じ場所に立てたらいんだけどな」

「この、いいかげ——えっ？」

「いや、何でもない」

吐露した言葉を頭を振って打ち消す。

「ただ、目標がふたつ出来ただけだ」

そのために強くあろう。

いつか壁にぶつかった時、迷わずにいられるように。

「何それ」

だけどリウが握り返してくれることは無く——ただ力なく引っ張られているだけだった。

どうしてか俺にはとても悲しく思えたのだった。



ようやく見えてきた目的の巨大なショッピングセンター近くを通

りかかった時だった。

「妙に警察が多いな」

さながら警備員かの如く定位置に立って街を警備していた。

おそらく私服警官も加えれば相当な数の人員が配備されているに違いない。

「ヤマブキの件、か？」

隣接している街だし、当然といえば当然なのかもしれない。

木を隠すなら森とも言うのだし、タマムシシティほど人が多ければその分隠れやすいと考えるのは当たり前だ。

「な、何よ」

繋いだ手の先——リウに視線を向ける。

ぶつきらぼうに吐き捨てて不機嫌そうに顔を背けられたが、心なしかさつきより穏やかになっている気がする。

——注意しないとな。

身近すぎて忘れてしまいそうになるが、リウはミニリュウだ。萌えもんの中ではかなり珍しい部類に入る。お月見山や岩山トンネルでは切り抜けられたが、ロケット団に目をつけられる可能性は充分にある。

まあ、これだけ大ぴろげに警戒されてるのだし、路地裏に入らない限りまず大丈夫——

「こっち来るな！ へんたい！」

思った矢先の事だった。

すぐ近く——聳え立つマンションの裏手辺りから悲鳴が反響した。周囲を見してみるが、悲鳴を聞きつけて立ち止まった人は僅か。その僅かな中で騒然としている人ばかりですぐ近くに警官はいないようだった。

くそっ！ タイミングが悪いな畜生！

舌打ちをして棒立ちになってるサラリーマンの兄ちゃんに「さっさと警察読呼んでこい！」と喚いてから走り出す。

「仕方ねえ！ 行くぞ、リウ！」

繋いでいた手に力を籠める。

「……うん！」

程無くして返された頷きと握り返される感触に喜びを感じながら、俺は声のした路地へと突入する。

高層マンションに囲まれた路地裏を駆ける。狭い路地の中、捨てられてそのままになっているゴミ袋を蹴飛ばし、そこから勢い良く飛び出た空き缶をひとつ掴みとる。

「そんな物、何に使うのよ」

いつの間にか並走していたリウにニヤリと笑みを返し、

「ちよっとした喧嘩のやり方さ」

路地はT字路になっており、俺達が突入した路地から左右に向かつて枝分かれしていた。

どっちだ？　と思った矢先、また悲鳴が上がる。

「この娘は絶対にわたさないんだから！」

言葉足らずな声が左側の路地から聞こえる。

萌えもんかもしくは、まだ幼い少女か——何れにしてもこのまま回れ右は出来なくなったわけだが。

「さーて」

T字路の手前で立ち止まり、缶を放り投げる。

「——あのなあ、嬢ちゃん。その萌えもんは嬢ちゃんなんかが持つていいもんじゃないんだ。な？」

真っ直ぐ上に放り投げた缶は頂点へと達すると、重力に従って落下し始める。

「やだ！　だってこの娘けがしてるもん！」

立ち止まってくれたリウに目配せする。

「だからおじちゃん達がちゃんと萌えもんセンターに連れて行くって言うてるじゃないか」

「やめて！　その娘にさわらないで！　おじさんは怖いからいいもん！」

右足を大きく振りかぶる。身体を僅かに逸らし、起動修正をかけ

る。

「ちっ、鬱陶しいガキだな」

そして、全力で蹴った。

空き缶は真っ直ぐに跳び、壁へとぶつかった路地へと吸い込まれていく。

「あん？」

派手な音を立てて来襲したであろう空き缶は必ず意識を逸らす。どれだけ神経が図太くても、自分の近くに空き缶が飛んでくれば誰でも気が逸れる。

路地の状況はわからない。ここからだと思認出来ないのだから当たり前だ。

だから、空き缶を僅かに上へと向かって蹴った。少女にしろ萌えもんにしろ、俺の身長くらいの高さには至らないだろう。

「頼むぜ、リウ！」

「任せて！」

声を後にしてリウは路地裏へと飛び出す。

俺もホルスターからボールを取り出して後に続く。

路地に飛び込んだ俺が見た光景は、傷ついた萌えもんを必死でかばっている女の子と、無理矢理に攫おうとしている男ふたり——ロケット団の姿だった。

「んだてめえ！」

空き缶に反応したのは傍観していた方の男なのだろう。僅かに上へと向けられていた視線が俺を捉える。

年齢的には俺と同じか少し上くらいか……チンピラのように眉を潜め威嚇してきている。

だが飛び込んできたリウに対処出来てない時点で駄目だ。

それに——

「はっ、この街で俺を知らないってか！」

準備していたボールをふたつ投げる。

即座に展開し、シェルとコンが現れる。

「いいか、相手は幼女誘拐に加えて婦女暴行の現行犯だ！ 手加減せずにやっちまえ！」

「はい！」

「らじゃー！」

「身に覚えの無い罪状があるんですけど！？」

抗議の声を上げるも遅い。

距離を詰められた若いロケット団員はリウの一撃によって気絶させられる。

残ったもうひとりもコンとシエルによって女の子から距離を開けざるを得ない状況へととなっていた。

「――ちっ」

男は分が悪いと悟ったのかすぐに背を向け逃げ出した。

影が見えなくなってからようやくやく一息つき、女の子へと向き直る。

「良く頑張ったな」

頭を撫でると、くすぐったそうに目を細める。

そうしていると通報を聞いてかサイレンの音が表通りから聞こえてきた。

とりあえずは安心して良さそうだ。

「この路地ですね！？」

「は、はい！ さっき若い人が入って行きました！」

ドタバタとし出した路地の中、嬉しがる女の子と彼女に抱かれて小さく敵意の瞳を向けている萌えもんが印象的だった。



「で、またお前かファアル」

「そりゃこっちの台詞だっつーの」

駆けつけてきた警官のひとりに気絶していた若いロケット団を任せ、女の子と一緒に路地を出た俺を待っていたのは熊澤警部だった。いつか見た表情と全く同じように、呆れ顔で熊澤警部は嘆息した。

「ま、今回もお手柄だったみたいだしな」

連行されていくロケット団員に視線を送る。

何やら喚きながらパトカーに押し込まれていく姿を見送ってから、熊澤警部は続けた。

「一応事情聴取つてのがあってな。そこの嬢ちゃんも含めて話を聞きたいんだが」

言って、俺の後ろに隠れている女の子に視線を向ける警部。

傷ついている萌えもんの治療もある。俺には頷く以外の選択肢など無かった。

「わかってるさ」

熊澤警部に向かって頷いてから、屈み込んで女の子と視線を合わせる。

「ごめんな。あの怖い熊みたいなおじさんが君の話を聞きたいらしいんだ。いいかな？」

「おい、誰が熊だ！」

女の子は俺と熊澤警部へと視線を何度か往復させ、最後にリウを見てから頷いた。

「うん。あ、でもこの娘のけがを」

しかし言葉が終わる前に女の子の軽い身体は宙へと投げ出されていた。

悲鳴すら上げられずにいた女の子を咄嗟にキャッチしたのはリウだった。

「――わぷっ！ あ、ありがとう」

「別にいいけど」

照れくさいのか、顔を逸らすリウを横目に女の子を突き飛ばした萌えもんを追う。

が、すぐに路地裏へと消えて姿が見えなくなってしまった。

「あー、くそ！ 見失った。

……大丈夫か？」

「あ、あい！ お姉ちゃんのおかげでだいじょうぶです！」

お姉ちゃん、ねえ。

「……何よ」

「いんやー。悪いな。ジムには少し遅れそうだ」

「――別にいいわよ。仕方ないんだし」

しかし気になったのは、どうして女の子が庇っていた萌えもんが攻撃をしてきたのか、だ。

確か人からもらったたりした萌えもんは言う事を聞かない場合が往々にしてあるありがたいが……。

「ううん、あの娘とはさっき初めて会ったんだよ」

女の子は何一つ気にした風もなく、首を振ってみせた。

ロケット団のような怖い大人に囲まれても気丈に振舞っていた女の子は、やはり当たり前のように告げる。

「でもけがしてたから放っておけなかったの」

突き飛ばされた箇所が痛むのだろう。それでも自分のした事は間違っていないと。

胸を張って笑っていた。

「――おやっさん、病院頼むわ」

「あいよ」

すぐに返ってくる頼もしい返事を背に、俺は立ち上がる。

さて、行ってくるか。

「余計なお世話だと思うけどね。この娘も――感謝されたくてやったわけじゃないだろうし」

そうだろうなと思う。

屈託の無い笑みを見ればわかる。

女の子は純粹に――ただの好意と優しさだけで間違っている大人に立ち向かったのだ。

小さな身体で恐怖を飲み込んで、真っ直ぐに。

俺にはどうしてもその姿がリウと重なってしまった。ひとりで踏ん張ってひとりで立ち向かって――ただ自分を信じて戦っている姿が似すぎていたのだ。

はいそうですかと納得など――放っておけるわけがなかった。

「お節焼きだからな、俺は」

路地は左右に別れていたが、右側の路地はまだ警察が詰めている。つまり逃げ道はひとつしかないはずだ。

「……わかった。さっさと行きましょう」

渋々頷いたリウに「悪いな」と頷きを返し、もう一度路地へと戻る。

怪我をしていたのもあるし、遠くへは逃げていないはずだ。近くにいてくれるものだと思いたい……。

「わかってるの？ 手負いは人間でも私たちでも危険なのよ？」

「もちろんだ」

警察の人に話を聞くと、やはり俺たちがいた路地とは反対の路地に入っていたようだった。

路地はやはり薄暗く、高いビルに囲まれているため闇に紛れるにはもってこいだろう。事実、覗いているだけだとさっぱりわからない。

「おーい、いるかー？」

反応は無いだろうと思って声をかけてみるが、案の定物音ひとつ返ってはこない。

視線を上げてみれば、路地はどうやら折れ曲がっているようだった。

俺とリウは頷き合って歩を路地へと踏み入った。

周囲――とりわけ影になっている部分に注意を払いながら進むも、何も出ず。もしかしたら走り去ってしまったのだろうかと思った矢先、それはいた。

ちょうどL字で路地が形成されている先。視界には絶対に入っていない場所に、目的の萌えもんは蹲っていた。

「何なんだお前ら！」

ふーっ、とさながら猫のように威嚇してくるが、背も小さいので迫力はほとんどない。身長としてはリウより少し小さいくらいだろ

う。

元は綺麗な茶の毛色だったのだろうか。泥や埃で汚れた今となつては影に隠れるとわからなくなるくらいに判別がつきにくくなつてしまっている。

ピンと立った耳はボロボロで血が出ている箇所もあり、更に良く見ると体の至る所に傷があった。どう考えても見過ごせるような状態ではなかった。

しかし怪我していてもこちらには警戒している辺り、女の子の言うように野生であるようだ。

「いや、ちよつと心配になつてな」

俺の言葉に萌えもんは鼻を鳴らして答え、

「別にいい。わっちは貴様らの手など絶対に借りん。あの小娘にもそう伝えろ」

踵を返した。

「なあ、さっきの娘を何で突き放したんだ？」

そのまま去ろうとする背に問いを投げかけると、たった一言「知らん」とだけ返してくる。

だが、思い出したように一度足を止め、

「……救おうとしてくれた気持ちには感謝している」

と、ぶっきらぼうに言った。

怪我で歩きにくいのか、バランスの悪い歩き方で路地の先へと消えて行く後ろ姿を俺はただ黙って見送る。

「いいの？ 余計なお世話を焼くんじゃなかったの？」

「焼けそうだったと思うか？」

リウは遠ざかる萌えもんの後ろ姿をしばらく眺めた後、

「こっちが焼かれそうね」

「だろ？」

諦めと共に肩を竦めた。

去っていく萌えもんの姿は——そう、見てわかる程度には俺達を拒絶していたのだった。



表通りに戻った俺たちは熊澤警部に付き添われて萌えもんセンタ
ーへと向かっていた。

どうやら岩山トンネルのみならず、ここタムシシティでも萌え
もんの被害が増えているようで、野生の萌えもんだけでなく人の萌
えもんまで姿を消す事があるそうだ。

「誘拐なのか？」

「かもしれん。何れにせよ、街の様子がおかしいのは確かだ」

それにな、と熊澤警部は薄くなった頭をガシガシとかきむしりな
がら、

「表立っては”普通”なんだ。だが何かが違う。水面下で何かが動
いてやがる……つまって爆発しちまう水道管みたいに、その瞬間を
待ってやがる気がしやがるんだ」

思い当たるとすればロケット団しかない。

岩山トンネルからこっち、奴らの話や事件は耳にしてるし実際に
戦闘もしている。

「長年の勘ってやつか？」

「ああ。だがどうも、な」

熊澤警部自身も確かに何かを掴んでいるわけではないのだろう。
魚の小骨が喉に引っかかったかのような気持ち悪さを持て余してい
るように見えた。

「それにその娘はミニリュウだろ？ 危険なのはお前だって同じな
んだからな？」

視線をリュウへと向ける。

相変わらず不敵に腕を組んでいる我が相棒は、それがどうしたと
言わんばかりに顔を背けた。

大丈夫だとは思いたい、安心しきってもいられない。

「特に奴らはとりわけ”強い萌えもんを奪う”だからな。強さこそ

全ての部分もあるようだから万一の無いようにな」

「ああ」

強さこそ全て——しかしやってる事は悪事以外の何物でもない。誰かを傷つけるだけ強さは”強さ”じゃない。それはただの暴力だ。

俺はそれを知るには時間がかかってしまったけど、だからこそ今は絶対に認められない。

でも——

「強さこそ全て、か」

ぽつりと呟いたリウの呟きが頭の中で反響して、嫌な予感が拭えなかった。

熊澤警部を一度別れ、俺たちはいよいよタマムシシティジムへと向かう。

ジムは街の橋にあり、女子しかいないために一部では有名な覗きスポットとなっているらしい。もっとも、ジムリーダーに心酔している自称親衛隊がその度に蹴散らしているらしいが。

「この街のジムってどんなタイプなの？」

そして女の園とも言えるジムだからこそそのタイプでもある。

「草タイプだ。だけど、たぶん毒タイプとか入ってくるだろうな」

萌えもんで純粹に草だけのタイプはあまり見かけられないはずだ。グリーンのフシギダネのように毒タイプを合わせて持っていたりなど、状態異常攻撃が合わさってくる。今までのようにただ相手の攻撃を防ぎ、交わしていれば勝てるというわけでもないだろう。

「有利なのはコンだな」

草タイプに有利なのは炎と飛行、そして虫と毒タイプだ。しかし虫と毒タイプは相性が悪く、毒の効果も期待出来ないと考えていいだろう。フシギダネ以外にも、ナゾノクサやマダツボミなど毒タイプを持っている萌えもんは非常に多い。

だとすれば消去法で炎タイプのみになる。いつものパターンだけ

ど、飛行タイプなんて捕まえてないしな！

「間違はなく苦手なタイプの対策をしてくるはずだ。有利なタイプは無いと考えた方が良さだろうな」

これまでの戦いがそうだったように、搦め手を使ってくるはずだ。正攻法だけでは絶対に勝てないのは予想出来る。

「――そうね」

ともすれば見逃してしまいそうな程に小さく頷いたリウ。

俺とリウの間はまだギクシャクしたままだ。個別のスタンドプレーは出来ても、お互いを信じた戦いが出来るかと問われれば即答出来ない。

果たして勝てるのだろうか。

漠然とした不安を抱えたまま、ジムへと向かう。

その途中、

「ありがとうございますー！」

オープンカフェだろうか。1年前は無かった店から黒いスーツに身を包んだ男が出てきた。

薄コケた年季の入った杖に黒のシルクハット。見るからに紳士然としたその男は俺の方へと視線を向け、身体を硬直させた。

「ん？ おや、君は――そうか。ふ、ははは……！」

そして徐ろに笑い出す。

その声に、仕草に思い当たる。

懐かしくも大きな姿。

かつて何度も親父と共に酒を酌み交わした親友。俺にとっては二人目の親父のような存在。

間違いない、この人は――

「いや、久しぶりだね、ファアル君。随分と大きくなったものだ」

その人はシルクハットを取り、不器用に笑みをこぼす。

ああ、変わっていない。

数年振りの再会を彩る言葉はひとつだけしか思い当たらなかった。

「はい。お久しぶりです――榊さん」

〈続〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0437u/>

萌えっ娘もんすたあ

2012年1月5日19時46分発行